

多文化共学短期 [受入] 留学プログラム

2023 年度実施報告書

アジア研究教育ユニット (KUASU)

国際高等教育院 (ILAS)

目次

はじめに	iii
1 多文化共学短期留学プログラム	1
1.1 概要	1
2 実施体制	2
2.1 京都大学側	2
2.2 派遣元大学側	5
2.3 参加学生リスト	7
3. プログラムの日程	10
3.1 プログラム日程一覧（海外学生向け）	10
3.2 プログラム日程一覧（本学学生向け）	11
3.3 プログラム日程詳細	12
3.4 アカデミックレクチャー担当教員一覧	19
4. 成績評価	20
4.1 成績評価の概要	20
4.2 参考資料	21
5. プログラムの概要	24
5.1 実施方法	24
5.2 カリキュラムの概要	24
5.2.1 カリキュラムの内容	24
5.2.2 アカデミックレクチャー	25
5.2.3 日本語教育	26
5.2.4 課内の特別活動	27
5.2.5 課外の活動	29
6. 展望	30
7. 資料	31
8. 京都サマープログラム 2023(ILAS プログラム)	64
8.1 設立の経緯と目的	64
8.2 ILAS プログラムの特徴	66
8.3 参加学生報告	69

9. 京都サマープログラム 2023(KUASU プログラム)	108
9.1 設立の経緯と目的	108
9.2 KUASU プログラムの特徴.....	109
9.3 共同発表.....	110
9.4 参加学生報告	112
10. 京都大学受講生 参加報告	126

はじめに

2023 年夏、京都大学アジア研究教育ユニット・国際高等教育院が主体となり、アセアン諸大学学生と東アジア+欧米諸大学学生の受け入れをおこなう「京都サマープログラム 2023」が実施されました。本報告書はこの事業の実施内容等についてまとめたものです。今年度のプログラムは新型コロナウイルスの流行後、4年ぶりに対面で実施いたしました。



アセアン諸大学学生の受け入れプログラムは 10 度目、東アジア諸大学の受け入れプログラムは 12 度目を迎えています。長引くコロナ禍の中で、私たちは実際に対面で交流することのかけがえのなさを再認識しましたが、同時に、オンライン開催のメリットを最大限に活用することも学びました。その最たる点が、一層幅広い地域からの参加者受け入れです。今年度は昨年度の参加大学に加えて、タフツ大学（アメリカ）からの参加がありました。その結果、今回アセアンおよび欧米諸大学からは、ベトナム 5 名、インドネシア 4 名、タイ 4 名、アメリカ 1 名の計 14 名が、東アジア+欧米+アフリカ等からは、中国 4 名、香港 6 名、台湾 3 名、韓国 4 名、ドイツ 3 名、オーストラリア 1 名、アメリカ 3 名、の計 24 名が参加しました。合わせますと、10 の国と地域から 40 名近い参加者になります。これほど多様な背景を持つ学生が一同に集まる短期プログラムの機会を作れたことを大変誇りに思います。

参加した学生は、同世代の学生たちと関わる中で、自身と異なる考えや価値観に触れ、多くの学びと刺激を得たものと思います。混沌とする世界情勢の中で、今後本プログラムの参加学生たちが、国際社会の調和と平和を担うリーダーとして活躍してくれることを期待しています。

入念な準備を重ねられた先生方、参加者間の交流が実現するように工夫してくれた京大学生のリーダーの皆さんの並々ならぬご尽力の賜物と深く感謝しています。プログラムの実施にあたってお世話になりました国際高等教育院と連携諸機関の先生方、短期交流学生の講義や日本語授業を担当していただいた講師の方々、さまざまな授業を提供して下さったアジア研究教育ユニットの先生方と京都大学各部局の諸先生、また本プログラムの足腰の部分を支えて下さった国際・共通教育推進部留学生支援課日本語教育掛とアジア研究教育ユニットの事務担当者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

2024 年 3 月
京都大学アジア研究教育ユニット
ユニット長 安里 和晃

1 多文化共学短期留学プログラム

1.1 概要

多文化共学短期留学プログラムは、京都大学アジア研究教育ユニット（以下、KUASU）¹と国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（以下、ILAS 日・日センター）²が主体となって展開しているプログラムである。東アジア、東南アジア諸国連合および欧米各国におけるトップクラスの諸大学と京都大学との間で短期学生派遣／受入をおこなってきた。本報告書は、そのうちの受入プログラムについて報告するものである。

多文化共学短期[受入]留学プログラムは、日本語を主たる教授言語とする KUASU プログラムと英語を主たる教授言語とする ILAS プログラムという 2 つのサブプログラムからなる。2016 年まではそれぞれが独立性を保ちながら運営してきたが、2016 年以降、講義や日本語教育などを共同で実施し、徐々に連携を深め、双方に有益なプログラムを発展させてきた。両プログラムは共に、海外の学生と本学学生の共学を軸としている。参加学生は、本学の学風及び先端研究に触れ、日本の文化、社会、科学、環境問題などを、共に学ぶ。そして、日本文化、日本社会を「外」の視点から捉えなおすことによって、アジアおよび世界各国と日本とのあいだの相互理解の促進と、互いに共通する課題の発見・解決を目指す力を身につける³。本プログラムへの参加を通じて本学学生は、更なる国際的活動への、そして海外の学生は将来にわたる本学ひいては日本との関係への礎を築くことを目的としている。

今年度（令和 5 年度）は新型コロナウイルスパンデミック以降、4 年ぶりの対面開催に復帰することができた。久方ぶりの対面開催にあたり、危機管理の観点から受け入れ学生数を抑えたため、オンライン開催時に比べ参加学生数は半減することとなった。一方で、同じ空間・同じ時間を共有し、実際に対面して交流することの密度の濃さ、かけがえのなさを再認識させてくれるプログラムとなった。その様子は、本報告書後半の「参加学生報告」から十二分に伺えるものと思う。

本年度は、表 1 に挙げた対象国／地域からの短期交流学生の受入をおこなった。

¹ KUASU (Kyoto University Asian Studies Unit) は、平成 24 年度から開始された文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト（『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成）を推進する母体となってきた。KUASU を構成するのは、文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター、東南アジア地域研究研究所、人文科学研究所、経営管理研究部である。

² ILAS : Institute for Liberal Arts and Sciences

³ 注 1 の世界展開力強化事業のプロジェクトにおいて、当プログラムは SEND プログラム (*Student Exchange – Nippon Discovery Program*) と呼ばれていた。

表1 本報告書で扱う短期受入プログラム

形態	プログラム名称 (実施期間)	対象の国／地域
受入	京都サマープログラム 2023 (2023年7月29日 ～8月10日)	ILAS プログラム： 中国、香港、韓国、台湾、オーストリア、ドイツ、 アメリカ KUASU プログラム（主としてアセアン）： ベトナム、インドネシア、タイ、アメリカ

2 実施体制

2.1 京都大学側

実施責任者		
京都大学理事／副学長	平島 崇男	(HIRAJIMA Takao)
▶ ILAS 実施責任者		
国際高等教育院・院長／教授	宮川 恒	(MIYAGAWA Hisashi)
▶ KUASU 実施責任者		
担当教職員 ([1]主として ILAS 担当,[2]主として KUASU 担当)		
国際高等教育院・教授	河合 淳子	(KAWAI Junko) ^{[1][2]}
国際高等教育院・准教授	韓 立友	(HAN Liyou) ^[1]
学際融合 教育研究推進センター・ 特定助教	張 子康	(ZHANG Zikang) ^[2]
国際・共通教育推進部 留学生支援課	杉山 聡子	(SUGIYAMA Satoko) ^[1]
アジア研究教育ユニット	野澤 結衣	(NOZAWA Yui) ^[2]
国際・共通教育推進部 留学生支援課	大島 美花	(OSHIMA Mika) ^[1]

学内協力組織
国際戦略本部
欧州拠点
北米拠点
アフリカオフィス
ASEAN 拠点
学術情報メディアセンター
学外協力組織

KCJS（京都アメリカ大学コンソーシアム）		
SJC（スタンフォード日本センター）		
学術講義担当（学内・学外）		
京都産業大学 現代社会学部・教授 京都大学アジア研究教育ユニット・ 初代ユニット長	落合 恵美子	Emiko OCHIAI
アジア・アフリカ地域研究研究科・ 特任講師 京都大学学術研究支援室	若松 文貴	Fumitaka WAKAMATSU
京都大学 防災研究所・教授	多々納 裕一	Hirokazu TATANO
京都大学 国際高等教育院・教授	河合 淳子	Junko KAWAI
京都大学 教育学研究科・教授	佐野 真由子	Mayuko SANO
京都大学 野生動物研究センター・ 助教	徳山 奈帆子	Nahoko TOKUYAMA
京都大学 農学研究科・教授	近藤 直	Naoshi KONDO
京都大学 国際高等教育院・准教授	湯川 志貴子	Shikiko YUKAWA
京都大学 高等研究院 副院長 京都大学 アイセムス 物質－細胞 統合システム拠点・特別教授	北川 進	Susumu KITAGAWA
京都大学 大学院 総合生存学館・ 准教授	関山 健	Takashi SEKIYAMA
京都大学 国際高等教育院・准教授	家本 太郎	Taro IEMOTO
京都大学 学際融合 教育研究推進センター・特定助教	張 子康	Zikang ZHANG
日本語教育担当		
前国際高等教育院・非常勤講師	中澤 まゆみ	Mayumi NAKAZAWA
国際高等教育院・非常勤講師	南場 尚子	Hisako NAMBA
国際高等教育院・非常勤講師	下橋 美和	Miwa SHIMOHASHI
立命館大学・授業担当講師	柏木 美和子	Miwako KASHIWAGI
国際高等教育院・非常勤講師	浦木 貴和	Norikazu URAKI
神戸学院大学・講師	白方 佳果	Yoshika SHIRAKATA
大学院/研究室訪問対応		
京都大学 大学院文学研究科・ 准教授	安里 和晃	Wako ASATO
京都大学アイセムス 物質－志望統合システム拠点・ 特定准教授	遠山 真理	Mari TOYAMA

京都大学アイセムス 物質－志望統合システム拠点・ 特定准教授	本間 貴之	Takayuki HOMMA
人間・環境学研究科・教授	齋木 潤	Jun SAIKI
人間・環境学研究科・ 准教授	マシュー ディブレ クト	Matthew de BRECHT
人間・環境学研究科・ 講師	パッラヴィ バッ テ	Pallavi BHATTE
学内協力教員		
京都大学 フィールド科学教育研究 センター・准教授／芦生研究林長	石原 正恵	Masae ISHIHARA
京都大学 フィールド科学教育研究 センター・教授	徳地 直子	Naoko TOKUCHI
京都大学 フィールド科学教育研究 センター・講師	松岡 俊将	Shunsuke MATSUOKA
京都大学 フィールド科学教育研究 センター・特定助教	張 曼青	Manqing ZHANG
京都大学 フィールド科学教育研究 センター 芦生研究林	技術職員の皆様	
学外協力者		
京都府菓子工業組合・青年部	西井 一樹様	Kazuki NISHII
	青年部の皆様	
京都着物企画・部長	榊田 莉子様	Riko SAKAKIDA
	着物企画の皆様	
前 国際高等教育院・准教授	青谷 正妥様	Masayasu AOTANI

2.2 派遣元大学側

ILAS プログラム		
北京大学 Division for Education Abroad Program Office of International Relations	Chuqiao SHI	
香港中文大學（全学） Assistant Director Office of Academic Links	Myra LAU	
香港中文大學（歴史学部） Senior lecturer, History Department	SIU Kam-wah, Joseph	
香港中文大學（歴史学部）	Vicki TSANG	
延世大学校 Associate Professor Underwood International College	Astrid LAC	
延世大学校 Dean Underwood International College	Helen LEE	
国立台湾大学 Manager for Global Student Affairs (Outbound) Office of International Affairs	David SHEN	
Kyoto Consortium for Japanese Studies 京都コンソーシアム（KCJS）	シヨア扶左子 Fusako SHORE	
スタンフォード日本センター（SJC）	Mike Hugh	
KUASU プログラム		
ベトナム国家大学 ハノイ校外国語大学 日本語文化学部・講師	ルオン・チャム・アイ ン	LUONG Trâm Anh
ベトナム国家大学 ハノイ校人文社会科学大学 東洋研究学部・講師	グエン・フオン・トゥイ	NGUYEN Phuong Thuy
チュラーロンコーン大学 文学部・准教授	チョムナード・シテ イサーン	Chomnard Setisarn ผศ.ดร.ชนนาค สัตติสาร
インドネシア大学 人文科学部・講師	アリエスティアニ・ ペルウィタサリ	Ariestyani Perwitasari
シンガポール国立大学 人文社会科学部・日本研究学科 課長補佐	アレックス・スー	SOO Jin Hui, Alex

（灰地は今年度学生派遣なし）

2.3 プログラム費用

本節では、京都サマープログラム 2023 における費用補助状況と学生参加状況の概要について述べる。以下の二項目によって短期交流学生の修学が費用面から支援された。

- ①全学事業実施経費（留学生獲得支援事業）（京都大学）
- ②機能強化経費「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成－京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム－」による基幹経費（京都大学）

表 3 では、基本情報と、費目別の費用補助該当者数、各項目の合計人数を、上記 ①～②による費用補助の該当是非と合わせて示す。

表 3 京都サマープログラム 2023 の経済支援概要

	ILAS プログラム	KUASU プログラム	計
実施期間	2023 年 7 月 29 日～ 8 月 10 日		38 名
短期交流学生	24 名	14 名	
短期交流学生 授業料・学内研修費	① 24 名	② 14 名	38 名
短期交流学生学外研修費	① 24 名	①&② 14 名	38 名
渡航費補助	なし	なし	0 名
宿泊費補助	① 24 名	② 14 名	38 名
本学受講生 授業料・学内研修費	② 30 名		30 名
本学学生リーダー雇用	① 6 名	② 6 名	12 名
映像作成補助雇用	0 名	0 名	0 名
出席管理 OA 雇用	① 1 名	② 1 名	2 名

2.4 参加学生リスト

ILAS

KSP No.	Nickname	University	Department	Grade
101	Coco	Peking University	School of Basic Medical Science	B2
102	Winsome		Archaeology and Museology	B2
103	Yeping		Yuanpei College	B2
104	Byron		Department of Electronics Engineering and Computer Science	B2
105	Anthony	The Chinese University of Hong Kong	Bachelor of Medicine and bachelor of surgery	B1
106	Horace		Physics	B2
107	Yoyo		Biomedical Sciences	B2
108	Ron		History	B3
109	Colin		History	B4
110	Hedda		History	B2
111	Ai	Yonsei University	Nano science and engineering	B2
112	Su		Justice and Civil Leadership	B2
113	Tricia		Comparative Literature & Culture	B4
114	JISEOK AHN		Underwood Division (Humanities & Social Sciences)	B1
115	Vincent	National Taiwan University	Public Health	B1
116	LAURA		Public Health	B1
117	Wei		School of Nursing	B2
118	AR	University of Vienna	Art history and psychology	B4
119	Paddy	Heidelberg University	Biosciences	B2
120	Lino		Religious Studies	B3
121	LELA		Physics, Informatics	B3
122	Michelle	UC San Diego	Visual Art/ Speculative Design	B2
123	Gio	George Washington University	Psychological & Brain Sciences	B4
124	Nathan	Tufts University	Political Science	B4

KUASU

KSP No.	Nickname	University	Department	Grade
151	Thuy	University of Languages and International Studies, Vietnam National University, Hanoi	Faculty of Graduate Studies	M2
152	Chip		Faculty of Japanese Language and Culture	B3
153	Tra		Faculty of Japanese Linguistics and Culture	B5
154	Chi		Faculty of Japanese Language and Culture	B2
164	Lily		Faculty of Japanese Linguistics and Culture	B6
155	Mile	Chulalongkorn University	Faculty of Arts	B2
156	Franc		Faculty of Arts	B1
157	Pancake		Japanese	B1
158	Baitong		Department of Arts	B1
159	Meli	Universitas Indonesia	Japanese Studies	B2
160	Aicha			B2
161	Haekal			B2
162	Siska			B2
163	Jackie	University of California, San Diego	International Business and Japanese Studies	B3

Kyoto University Students

KSP No.	Nickname	Department	Grade
201	りあ	法学部	学部 4 回生
202	M.K.	農学部	学部 1 回生
203	YURINA	医学部	学部 2 回生
204	watanabe soya	法学部	学部 1 回生
205	kima	工学部	学部 2 回生
206	Hiro	理学部	学部 3 回生
207	N.R	工学部	学部 1 回生
208	Kaho	総合人間学部	学部 1 回生
209	Canon	総合人間学部	学部 1 回生
210	massan	文学部	学部 1 回生
211	Toshiya	総合人間学部	学部 3 回生
212	Kurumi	総合人間学部	学部 1 回生
213	Mayu	農学部	学部 1 回生
214	eleven	総合人間学部	学部 1 回生
215	Aoi	経済学部	学部 1 回生
216	Haruka	教育学部	学部 2 回生
217	Mackey	文学部	学部 2 回生
218	Shuta	工学部	学部 1 回生
219	Anna	経済学部	学部 2 回生
220	Mihiro	総合人間学部	学部 1 回生
221	Mari	法学部	学部 1 回生
222	bouro	農学部	学部 1 回生
223	Paru	法学部	学部 1 回生
224	じんようず	法学部	学部 3 回生
225	Kei	法学部	学部 1 回生
226	moai	文学部	学部 1 回生
227	NPC	農学部	学部 1 回生
228	riko	文学部	学部 1 回生
229	Mana	農学部	学部 1 回生
230	Kaho	法学部	学部 1 回生

3.1 プログラム日程一覧（海外学生向け）

– 10 –

3.2 プログラム日程一覧（本学学生向け）

	FRI 28-Jul	SAT 29-Jul	SUN 30-Jul	TUE 1-Aug	WED 2-Aug	THU 3-Aug	FRI 4-Aug	SAT 5-Aug	SUN 6-Aug	MON 7-Aug	TUE 8-Aug	WED 9-Aug	THU 10-Aug
Opening Ceremony & Orientation 開校式・オリエンテーション	NI Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	UAS Discussion in English① KIASU・希望者講 講義① 0-2	Discussion Session among Students UAS S-544 KIASU/0-2	Preparation for Presentation KIASU/ S-3
CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5	CU Introduction ① Kawai, Prof. T. Hara Assoc. Prof., 2 Zhong Asst. Prof. 講義① 0-5
Japanese Teaching Practice ① En. 14, 15-5 En. 16, 16-4 En. 17, 16-3 En. 18, 16-4 En. 19, 16-4 En. 20, 16-4 En. 21, 16-4 En. 22, 16-4 En. 23, 16-4 En. 24, 16-4 En. 25, 16-4 En. 26, 16-4 En. 27, 16-4 En. 28, 16-4 En. 29, 16-4 En. 30, 16-4 En. 31, 16-4 En. 32, 16-4 En. 33, 16-4 En. 34, 16-4 En. 35, 16-4 En. 36, 16-4 En. 37, 16-4 En. 38, 16-4 En. 39, 16-4 En. 40, 16-4 En. 41, 16-4 En. 42, 16-4 En. 43, 16-4 En. 44, 16-4 En. 45, 16-4 En. 46, 16-4 En. 47, 16-4 En. 48, 16-4 En. 49, 16-4 En. 50, 16-4 En. 51, 16-4 En. 52, 16-4 En. 53, 16-4 En. 54, 16-4 En. 55, 16-4 En. 56, 16-4 En. 57, 16-4 En. 58, 16-4 En. 59, 16-4 En. 60, 16-4 En. 61, 16-4 En. 62, 16-4 En. 63, 16-4 En. 64, 16-4 En. 65, 16-4 En. 66, 16-4 En. 67, 16-4 En. 68, 16-4 En. 69, 16-4 En. 70, 16-4 En. 71, 16-4 En. 72, 16-4 En. 73, 16-4 En. 74, 16-4 En. 75, 16-4 En. 76, 16-4 En. 77, 16-4 En. 78, 16-4 En. 79, 16-4 En. 80, 16-4 En. 81, 16-4 En. 82, 16-4 En. 83, 16-4 En. 84, 16-4 En. 85, 16-4 En. 86, 16-4 En. 87, 16-4 En. 88, 16-4 En. 89, 16-4 En. 90, 16-4 En. 91, 16-4 En. 92, 16-4 En. 93, 16-4 En. 94, 16-4 En. 95, 16-4 En. 96, 16-4 En. 97, 16-4 En. 98, 16-4 En. 99, 16-4 En. 100, 16-4 En. 101, 16-4 En. 102, 16-4 En. 103, 16-4 En. 104, 16-4 En. 105, 16-4 En. 106, 16-4 En. 107, 16-4 En. 108, 16-4 En. 109, 16-4 En. 110, 16-4 En. 111, 16-4 En. 112, 16-4 En. 113, 16-4 En. 114, 16-4 En. 115, 16-4 En. 116, 16-4 En. 117, 16-4 En. 118, 16-4 En. 119, 16-4 En. 120, 16-4 En. 121, 16-4 En. 122, 16-4 En. 123, 16-4 En. 124, 16-4 En. 125, 16-4 En. 126, 16-4 En. 127, 16-4 En. 128, 16-4 En. 129, 16-4 En. 130, 16-4 En. 131, 16-4 En. 132, 16-4 En. 133, 16-4 En. 134, 16-4 En. 135, 16-4 En. 136, 16-4 En. 137, 16-4 En. 138, 16-4 En. 139, 16-4 En. 140, 16-4 En. 141, 16-4 En. 142, 16-4 En. 143, 16-4 En. 144, 16-4 En. 145, 16-4 En. 146, 16-4 En. 147, 16-4 En. 148, 16-4 En. 149, 16-4 En. 150, 16-4 En. 151, 16-4 En. 152, 16-4 En. 153, 16-4 En. 154, 16-4 En. 155, 16-4 En. 156, 16-4 En. 157, 16-4 En. 158, 16-4 En. 159, 16-4 En. 160, 16-4 En. 161, 16-4 En. 162, 16-4 En. 163, 16-4 En. 164, 16-4 En. 165, 16-4 En. 166, 16-4 En. 167, 16-4 En. 168, 16-4 En. 169, 16-4 En. 170, 16-4 En. 171, 16-4 En. 172, 16-4 En. 173, 16-4 En. 174, 16-4 En. 175, 16-4 En. 176, 16-4 En. 177, 16-4 En. 178, 16-4 En. 179, 16-4 En. 180, 16-4 En. 181, 16-4 En. 182, 16-4 En. 183, 16-4 En. 184, 16-4 En. 185, 16-4 En. 186, 16-4 En. 187, 16-4 En. 188, 16-4 En. 189, 16-4 En. 190, 16-4 En. 191, 16-4 En. 192, 16-4 En. 193, 16-4 En. 194, 16-4 En. 195, 16-4 En. 196, 16-4 En. 197, 16-4 En. 198, 16-4 En. 199, 16-4 En. 200, 16-4 En. 201, 16-4 En. 202, 16-4 En. 203, 16-4 En. 204, 16-4 En. 205, 16-4 En. 206, 16-4 En. 207, 16-4 En. 208, 16-4 En. 209, 16-4 En. 210, 16-4 En. 211, 16-4 En. 212, 16-4 En. 213, 16-4 En. 214, 16-4 En. 215, 16-4 En. 216, 16-4 En. 217, 16-4 En. 218, 16-4 En. 219, 16-4 En. 220, 16-4 En. 221, 16-4 En. 222, 16-4 En. 223, 16-4 En. 224, 16-4 En. 225, 16-4 En. 226, 16-4 En. 227, 16-4 En. 228, 16-4 En. 229, 16-4 En. 230, 16-4 En. 231, 16-4 En. 232, 16-4 En. 233, 16-4 En. 234, 16-4 En. 235, 16-4 En. 236, 16-4 En. 237, 16-4 En. 238, 16-4 En. 239, 16-4 En. 240, 16-4 En. 241, 16-4 En. 242, 16-4 En. 243, 16-4 En. 244, 16-4 En. 245, 16-4 En. 246, 16-4 En. 247, 16-4 En. 248, 16-4 En. 249, 16-4 En. 250, 16-4 En. 251, 16-4 En. 252, 16-4 En. 253, 16-4 En. 254, 16-4 En. 255, 16-4 En. 256, 16-4 En. 257, 16-4 En. 258, 16-4 En. 259, 16-4 En. 260, 16-4 En. 261, 16-4 En. 262, 16-4 En. 263, 16-4 En. 264, 16-4 En. 265, 16-4 En. 266, 16-4 En. 267, 16-4 En. 268, 16-4 En. 269, 16-4 En. 270, 16-4 En. 271, 16-4 En. 272, 16-4 En. 273, 16-4 En. 274, 16-4 En. 275, 16-4 En. 276, 16-4 En. 277, 16-4 En. 278, 16-4 En. 279, 16-4 En. 280, 16-4 En. 281, 16-4 En. 282, 16-4 En. 283, 16-4 En. 284, 16-4 En. 285, 16-4 En. 286, 16-4 En. 287, 16-4 En. 288, 16-4 En. 289, 16-4 En. 290, 16-4 En. 291, 16-4 En. 292, 16-4 En. 293, 16-4 En. 294, 16-4 En. 295, 16-4 En. 296, 16-4 En. 297, 16-4 En. 298, 16-4 En. 299, 16-4 En. 300, 16-4 En. 301, 16-4 En. 302, 16-4 En. 303, 16-4 En. 304, 16-4 En. 305, 16-4 En. 306, 16-4 En. 307, 16-4 En. 308, 16-4 En. 309, 16-4 En. 310, 16-4 En. 311, 16-4 En. 312, 16-4 En. 313, 16-4 En. 314, 16-4 En. 315, 16-4 En. 316, 16-4 En. 317, 16-4 En. 318, 16-4 En. 319, 16-4 En. 320, 16-4 En. 321, 16-4 En. 322, 16-4 En. 323, 16-4 En. 324, 16-4 En. 325, 16-4 En. 326, 16-4 En. 327, 16-4 En. 328, 16-4 En. 329, 16-4 En. 330, 16-4 En. 331, 16-4 En. 332, 16-4 En. 333, 16-4 En. 334, 16-4 En. 335, 16-4 En. 336, 16-4 En. 337, 16-4 En. 338, 16-4 En. 339, 16-4 En. 340, 16-4 En. 341, 16-4 En. 342, 16-4 En. 343, 16-4 En. 344, 16-4 En. 345, 16-4 En. 346, 16-4 En. 347, 16-4 En. 348, 16-4 En. 349, 16-4 En. 350, 16-4 En. 351, 16-4 En. 352, 16-4 En. 353, 16-4 En. 354, 16-4 En. 355, 16-4 En. 356, 16-4 En. 357, 16-4 En. 358, 16-4 En. 359, 16-4 En. 360, 16-4 En. 361, 16-4 En. 362, 16-4 En. 363, 16-4 En. 364, 16-4 En. 365, 16-4 En. 366, 16-4 En. 367, 16-4 En. 368, 16-4 En. 369, 16-4 En. 370, 16-4 En. 371, 16-4 En. 372, 16-4 En. 373, 16-4 En. 374, 16-4 En. 375, 16-4 En. 376, 16-4 En. 377, 16-4 En. 378, 16-4 En. 379, 16-4 En. 380, 16-4 En. 381, 16-4 En. 382, 16-4 En. 383, 16-4 En. 384, 16-4 En. 385, 16-4 En. 386, 16-4 En. 387, 16-4 En. 388, 16-4 En. 389, 16-4 En. 390, 16-4 En. 391, 16-4 En. 392, 16-4 En. 393, 16-4 En. 394, 16-4 En. 395, 16-4 En. 396, 16-4 En. 397, 16-4 En. 398, 16-4 En. 399, 16-4 En. 400, 16-4 En. 401, 16-4 En. 402, 16-4 En. 403, 16-4 En. 404, 16-4 En. 405, 16-4 En. 406, 16-4 En. 407, 16-4 En. 408, 16-4 En. 409, 16-4 En. 410, 16-4 En. 411, 16-4 En. 412, 16-4 En. 413, 16-4 En. 414, 16-4 En. 415, 16-4 En. 416, 16-4 En. 417, 16-4 En. 418, 16-4 En. 419, 16-4 En. 420, 16-4 En. 421, 16-4 En. 422, 16-4 En. 423, 16-4 En. 424, 16-4 En. 425, 16-4 En. 426, 16-4 En. 427, 16-4 En. 428, 16-4 En. 429, 16-4 En. 430, 16-4 En. 431, 16-4 En. 432, 16-4 En. 433, 16-4 En. 434, 16-4 En. 435, 16-4 En. 436, 16-4 En. 437, 16-4 En. 438, 16-4 En. 439, 16-4 En. 440, 16-4 En. 441, 16-4 En. 442, 16-4 En. 443, 16-4 En. 444, 16-4 En. 445, 16-4 En. 446, 16-4 En. 447, 16-4 En. 448, 16-4 En. 449, 16-4 En. 450, 16-4 En. 451, 16-4 En. 452, 16-4 En. 453, 16-4 En. 454, 16-4 En. 455, 16-4 En. 456, 16-4 En. 457, 16-4 En. 458, 16-4 En. 459, 16-4 En. 460, 16-4 En. 461, 16-4 En. 462, 16-4 En. 463, 16-4 En. 464, 16-4 En. 465, 16-4 En. 466, 16-4 En. 467, 16-4 En. 468, 16-4 En. 469, 16-4 En. 470, 16-4 En. 471, 16-4 En. 472, 16-4 En. 473, 16-4 En. 474, 16-4 En. 475, 16-4 En. 476, 16-4 En. 477, 16-4 En. 478, 16-4 En. 479, 16-4 En. 480, 16-4 En. 481, 16-4 En. 482, 16-4 En. 483, 16-4 En. 484, 16-4 En. 485, 16-4 En. 486, 16-4 En. 487, 16-4 En. 488, 16-4 En. 489, 16-4 En. 490, 16-4 En. 491, 16-4 En. 492, 16-4 En. 493, 16-4 En. 494, 16-4 En. 495, 16-4 En. 496, 16-4 En. 497, 16-4 En. 498, 16-4 En. 499, 16-4 En. 500, 16-4 En. 501, 16-4 En. 502, 16-4 En. 503, 16-4 En. 504, 16-4 En. 505, 16-4 En. 506, 16-4 En. 507, 16-4 En. 508, 16-4 En. 509, 16-4 En. 510, 16-4 En. 511, 16-4 En. 512, 16-4 En. 513, 16-4 En. 514, 16-4 En. 515, 16-4 En. 516, 16-4 En. 517, 16-4 En. 518, 16-4 En. 519, 16-4 En. 520, 16-4 En. 521, 16-4 En. 522, 16-4 En. 523, 16-4 En. 524, 16-4 En. 525, 16-4 En. 526, 16-4 En. 527, 16-4 En. 528, 16-4 En. 529, 16-4 En. 530, 16-4 En. 531, 16-4 En. 532, 16-4 En. 533, 16-4 En. 534, 16-4 En. 535, 16-4 En. 536, 16-4 En. 537, 16-4 En. 538, 16-4 En. 539, 16-4 En. 540, 16-4 En. 541, 16-4 En. 542, 16-4 En. 543, 16-4 En. 544, 16-4 En. 545, 16-4 En. 546, 16-4 En. 547, 16-4 En. 548, 16-4 En. 549, 16-4 En. 550, 16-4 En. 551, 16-4 En. 552, 16-4 En. 553, 16-4 En. 554, 16-4 En. 555, 16-4 En. 556, 16-4 En. 557, 16-4 En. 558, 16-4 En. 559, 16-4 En. 560, 16-4 En. 561, 16-4 En. 562, 16-4 En. 563, 16-4 En. 564, 16-4 En. 565, 16-4 En. 566, 16-4 En. 567, 16-4 En. 568, 16-4 En. 569, 16-4 En. 570, 16-4 En. 571, 16-4 En. 572, 16-4 En. 573, 16-4 En. 574, 16-4 En. 575, 16-4 En. 576, 16-4 En. 577, 16-4 En. 578, 16-4 En. 579, 16-4 En. 580, 16-4 En. 581, 16-4 En. 582, 16-4 En. 583, 16-4 En. 584, 16-4 En. 585, 16-4 En. 586, 16-4 En. 587, 16-4 En. 588, 16-4 En. 589, 16-4 En. 590, 16-4 En. 591, 16-4 En. 592, 16-4 En. 593, 16-4 En. 594, 16-4 En. 595, 16-4 En. 596, 16-4 En. 597, 16-4 En. 598, 16-4 En. 599, 16-4 En. 600, 16-4 En. 601, 16-4 En. 602, 16-4 En. 603, 16-4 En. 604, 16-4 En. 605, 16-4 En. 606, 16-4 En. 607, 16-4 En. 608, 16-4 En. 609, 16-4 En. 610, 16-4 En. 611, 16-4 En. 612, 16-4 En. 613, 16-4 En. 614, 16-4 En. 615, 16-4 En. 616, 16-4 En. 617, 16-4 En. 618, 16-4 En. 619, 16-4 En. 620, 16-4 En. 621, 16-4 En. 622, 16-4 En. 623, 16-4 En. 624, 16-4 En. 625, 16-4 En. 626, 16-4 En. 627, 16-4 En. 628, 16-4 En. 629, 16-4 En. 630, 16-4 En. 631, 16-4 En. 632, 16-4 En. 633, 16-4 En. 634, 16-4 En. 635, 16-4 En. 636, 16-4 En. 637, 16-4 En. 638, 16-4 En. 639, 16-4 En. 640, 16-4 En. 641, 16-4 En. 642, 16-4 En. 643, 16-4 En. 644, 16-4 En. 645, 16-4 En. 646, 16-4 En. 647, 16-4 En. 648, 16-4 En. 649, 16-4 En. 650, 16-4 En. 651, 16-4 En. 652, 16-4 En. 653, 16-4 En. 654, 16-4 En. 655, 16-4 En. 656, 16-4 En. 657, 16-4 En. 658, 16-4 En. 659, 16-4 En. 660, 16-4 En. 661, 16-4 En. 662, 16-4 En. 663, 16-4 En. 664, 16-4 En. 665, 16-4 En. 666, 16-4 En. 667, 16-4 En. 668, 16-4 En. 669, 16-4 En. 670, 16-4 En. 671, 16-4 En. 672, 16-4 En. 673, 16-4 En. 674, 16-4 En. 675, 16-4 En. 676, 16-4 En. 677, 16-4 En. 678, 16-4 En. 679, 16-4 En. 680, 16-4 En. 681, 16-4 En. 682, 16-4 En. 683, 16-4 En. 684, 16-4 En. 685, 16-4 En. 686, 16-4 En. 687, 16-4 En. 688, 16-4 En. 689, 16-4 En. 690, 16-4 En. 691, 16-4 En. 692, 16-4 En. 693, 16-4 En. 694, 16-4 En. 695, 16-4 En. 696, 16-4 En. 697, 16-4 En. 698, 16-4 En. 699, 16-4 En. 700, 16-4 En. 701, 16-4 En. 702, 16-4 En. 703, 16-4 En. 704, 16-4 En. 705, 16-4 En. 706, 16-4 En. 707, 16-4 En. 708, 16-4 En. 709, 16-4 En. 710, 16-4 En. 711, 16-4 En. 712, 16-4 En. 713, 16-4 En. 714, 16-4 En. 715, 16-4 En. 716, 16-4 En. 717, 16-4 En. 718, 16-4 En. 719, 16-4 En. 720, 16-4 En. 721, 16-4 En. 722, 16-4 En. 723, 16-4 En. 724, 16-4 En. 725, 16-4 En. 726, 16-4 En. 727, 16-4 En. 728, 16-4 En. 729, 16-4 En. 730, 16-4 En. 731, 16-4 En. 732, 16-4 En. 733, 16-4 En. 734, 16-4 En. 735, 16-4 En. 736, 16-4 En. 737, 16-4 En. 738, 16-4 En. 739, 16-4 En. 740, 16-4 En. 741, 16-4 En. 742, 16-4 En. 743, 16-4 En. 744, 16-4 En. 745, 16-4 En. 746, 16-4 En. 747, 16-4 En. 748, 16-4 En. 749, 16-4 En. 750, 16-4 En. 751, 16-4 En. 752, 16-4 En. 753, 16-4 En. 754, 16-4 En. 755, 16-4 En. 756, 16-4 En. 757, 16-4 En. 758, 16-4 En. 759, 16-4 En. 760, 16-4 En. 761, 16-4 En. 762, 16-4 En. 763, 16-4 En. 764, 16-4 En. 765, 16-4 En. 766, 16-4 En. 767, 16-4 En. 768, 16-4 En. 769, 16-4 En. 770, 16-4 En. 771, 16-4 En. 772, 16-4 En. 773, 16-4 En. 774, 16-4 En. 775, 16-4 En. 776, 16-4 En. 777, 16-4 En. 778, 16-4 En. 779, 16-4 En. 780, 16-4 En. 781, 16-4 En. 782, 16-4 En. 783, 16-4 En. 784, 16-4 En. 785, 16-4 En. 786, 16-4 En. 787, 16-4 En. 788, 16-4 En. 789, 16-4 En. 790, 16-4 En. 791, 16-4 En. 792, 16-4 En. 793, 16-4 En. 794, 16-4 En. 795, 16-4 En. 796, 16-4 En. 797, 16-4 En. 798, 16-4 En. 799, 16-4 En. 800, 16-4 En. 801, 16-4 En. 802, 16-4 En. 803, 16-4 En. 804, 16-4 En. 805, 16-4 En. 806, 16-4 En. 807, 16-4 En. 808, 16-4 En. 809, 16-4 En. 810, 16-4 En. 811, 16-4 En. 812, 16-4 En. 813, 16-4 En. 814, 16-4 													

3.3 プログラム日程詳細

水色部分は ILAS プログラムと KUASU の合同イベント

7 月 28 日(金) Opening Ceremony& Orientation/ Campus Tour/ Optional: Guidance					
時 間		カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
8:45-9:45	Opening Ceremony		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教		KUINEP 教室
	Orientation	ILAS	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授		
	Orientation	KUASU	【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教		多目的 ホール
10:00-11:00	Campus Tour		アテンド：リーダー		
12:00-16:00	Optional: Guidance for Daily Life by KU Students		リーダー		KUINEP 教室
7 月 29 日(土) KU Introduction/ Japanese Language Class/ Academic Lecture①/ Optional: Consultation for Japanese Language level/ Discussion in English① or 発表準備講座①					
時 間		カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
8:45-9:45	KU Introduction 1 (ILAS) (KUASU) (本学学生)		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教		IS-5
10:30-12:30	Japanese Language Class	Elementary IA	柏木美和子(KASHIWAGI Miwako) 講師		IS-5
		Elementary IB	南場尚子(NAMBA Hisako)講師		IS-6
		Elementary II	中澤まゆみ(NAKAZAWA Mayumi)講師		IS-2
		Intermediate I	下橋美和(SHIMOHASHI Miwa)講師		IS-3
		Intermediate II	浦木貴和(URAKI Norikazu)講師		IS-4
		Advanced	白方佳果(SHIRAKATA Yoshika)講師		IS-1
13:30-15:30	Academic Lecture① 歴史からみる日本社会の多様性 Diversity of Japanese Society in Historical Perspective		【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教		IS-5+6

15:45-16:45	Optional: Consultation for Japanese Language level		IS-1
17:00-18:00	Discussion in English① (ILAS)	Immigrants and Refugees	IS-1
	発表準備① (KUASU)		IS-2

7 月 31 日(月) Discussion in English② ③or 発表準備講座②③/ Japanese Language Class/ Academic Lecture②/ 海外学生と日本語で話そう①			
時 間	カリキュラム / イベント		場 所
8:45-9:45	Discussion in English② (ILAS)		Economic Inequality
	発表準備② (KUASU)		IS-2
10:30-12:30	Japanese Language Class	Elementary I A	柏木美和子 (KASHIWAGI Miwako) 講師
		Elementary IB	南場尚子 (NAMBA Hisako) 講師
		Elementary II	中澤まゆみ (NAKAZAWA Mayumi) 講師
		Intermediate II	浦木貴和 (URAKI Norikazu) 講師
		Advanced	白方佳果 (SHIRAKATA Yoshika) 講師
13:30-15:30	Academic Lecture② Exploring the Fascinating World of Bonobos: Unveiling the Secrets of Their Unique Matriarchal Society (ボノボのメス優位・中心社会の秘訣を探る)		【野生動物研究センター】 徳山菜帆子 (TOKUYAMA Nahoko) 助教
13:45-16:45	海外学生と日本語で話そう① Conversation with KU Students in Japanese ① (ILAS)(KUASU)		IS-4
17:00-18:00	Discussion in English③ (ILAS)		Economy and Wars
	発表準備講座③ (KUASU)		IS-2

8 月 1 日(火)			
時 間	カリキュラム / イベント		場 所
One-Day Trip	Fieldtrip		京都大学フィールド科学教育研究センター 芦生研究林

8月2日(水) Discussion in English④ or 発表準備講座④/ Japanese Language Class/ Academic Lecture③/ 海外学生と日本語で話そう②③				
時 間	カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
8:45-9:45	Discussion in English④ (ILAS)		Disaster Prevention	IS-1
	発表準備講座④ (KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Japanese Language Class	Elementary IA	柏木美和子 (KASHIWAGI Miwako) 講師	IS-5
		Elementary IB	南場尚子(Namba Hisako)講師	IS-6
		Elementary II	中澤まゆみ(Nakazawa Mayumi)講師	IS-1
		Intermediate I	下橋美和 (SHIMOHASHI Miwa)講師	IS-3
		Advanced	白方佳果 (SHIRAKATA Yoshika)講師	21, North Wing
13:30-15:30	Academic Lecture③ Political Economy of Japan's "Lost Decades" (日本「失われた 30 年」の政治経済学)		【大学院 総合生存学館】 関山健 (SEKIYAMA Takashi)准教授	ILAS Bldg. Room 32
15:45-16:45	海外学生と日本語で話そう② Conversation with KU Students in Japanese ② (ILAS)(KUASU)			IS-5
17:00-18:00	海外学生と日本語で話そう③ Conversation with KU Students in Japanese ③ (ILAS)(KUASU)			IS-5
8月3日(木) Discussion in English ⑤ or 発表準備⑤/ Japanese Language Class/ Academic Lecture④ / 海外学生と日本語で話そう④/ Graduate School-Lab Visit I&II				
時 間	カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
8:45-9:45	Discussion in English⑤ (ILAS)		Innovation	IS-1
	発表準備講座⑤(KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Japanese Language Class	Elementary IA	柏木美和子 (KASHIWAGI Miwako) 講師	IS-5
		Elementary II	南場尚子(Namba Hisako)講師	IS-2
		Intermediate I	下橋美和 (SHIMOHASHI Miwa)講師	IS-3
		Intermediate II	浦木貴和(URAKI Norikazu)講師	IS-4

13:30-15:30	Academic Lecture④ Science and Technology in the Age of Gases- Is it Possible to Live on "Haze (Water Vapor and Air)? - (気体の時代の科学技術―「かすみ（水蒸気、空気）」を食って生きることが可能か？―)		【高等研究院】 北川進(KITAGAWA Susumu)副院長・特別教授	ILAS Bldg. Room32
15:45-16:45	海外学生と日本語で話そう④ Conversation with KU Students in Japanese ④			IS-4
17:00-18:00	Graduate School/ Lab Visit I &II		I) Department of Sociology, Graduate School of Letters II) Institute for Integrated Cell-Material Sciences	
8月4日(金) Cultural Experience				
時 間	カリキュラム／イベント		教職員／詳細	場所
One-Day Trip	Cultural Experience (ILAS) Kimono Japanese Traditional Sweets		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授	
	Cultural Experience (KUASU) Nishiki ichiba Club Activity		【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教	
8月5日(土) Discussion in English⑥⑦ or 発表準備講座⑥⑦/ Japanese Language Class/ Academic Lecture⑤⑥				
時間	カリキュラム／イベント		教職員／詳細	場所
8:45-9:45	Discussion in English⑥ (ILAS)		AI	IS-1
	発表準備講座⑥ (KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Japanese Language Class	Elementary IA	柏木美和子(KASHIWAGI Miwako)講師	IS-5
		Elementary IB	南場尚子(NAMBA Hisako)講師	IS-6
		Elementary II	中澤まゆみ(NAKAZAWA Mayumi)講師	IS-2
		Intermediate I	下橋美和(SHIMOHASHI Miwa)講師	IS-3
		Intermediate II	浦木貴和(URAKI Norikazu)講師	IS-4
		Advanced	白方佳果(SHIRAKATA Yoshika)講師	IS-1

13:30-15:30	Academic Lecture⑤ Diplomatic ceremonial in the last decade of the Tokugawa Shogunate: Japan's first step into modern diplomacy before the Meiji Restoration —Ver. 4 (幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の幕開けを考える—その4)	【大学院教育学研究科】 佐野真由子(SANO Mayuko)教授	IS-5+6
15:45-17:45	Academic Lecture⑥ The unique features of Japanese feminist movements: Placing Japan in the multilayered diversity of global gender history (日本のフェミニズム運動はどこがユニークなのか—グローバルジェンダー史の重層的多様性の中に日本を位置付ける)	【京都産業大学 現代社会学部】 落合恵美子(OCHIAI Emiko)教授	IS-5+6
18:00-19:00	Discussion in English⑦ (ILAS)	Gender	IS-1
	発表準備講座⑦ (KUASU)		IS-2
8月7日(月) KU Introduction/ Academic Lecture⑦⑧/ Japanese Language Class/ Graduate-Lab Visit III			
時 間	カリキュラム／イベント	教職員／詳細	場所
8:45-9:45	KU Introduction 1 (ILAS) (KUASU) (本学学生)	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教	IS-5
10:30-13:30	Academic Lecture⑦ 日本語の社会言語的諸相 (Sociolinguistic aspects of Japanese)	【国際高等教育院】 家本太郎 (IEMOTO Taro)准教授	ILAS Bldg. Room32
13:30-15:30	Academic Lecture⑧ Sustainable Food Production Considering Environment and Animal Welfare (環境、アニマルウエルフェアを考慮した持続的食料生産)	【農学研究科】 近藤直 (KONDO Naoshi)教授	ILAS Bldg. Room32

15:45-17:45	Japanese Language Class	Elementary I B	南場尚子(NAMBA Hisako)講師	IS-6
		Intermediate I	下橋美和 (SHIMOHASHI Miwa)講師	IS-3
		Advanced	白方佳果(SHIRAKATA Yoshika)講師	IS-1
18:00-19:30	Graduate School/ Lab Visit III		Graduate School of human and Environmental Studies	
8月8日(火) Discussion in English⑧or 発表準備講座⑧/ Academic Lecture⑨⑩/ Japanese Language Class				
時 間	カリキュラム／イベント		教職員／詳細	場所
8:45-9:45	Discussion in English⑧ (ILAS)		Human and nature	IS-1
	発表準備講座⑧ (KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Academic Lecture⑨ Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation (日本の捕鯨:食と保護を巡る文化政治学)		【アジア・アフリカ地域研究研究科】 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka) 特任講師	IS-5+6
13:30-15:30	Academic Lecture⑩ The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature (日本古典文学に見る日本人の美意識)		【国際高等教育院】湯川志貴子 (YUKAWA Shikiko)准教授	吉田国際会館 I-S 5 Zoom
15:45-17:45	Japanese Language Class	Intermediate II	浦木貴和(URAKI Norikazu)講師	IS-4
8月9日(水) Discussion Session among Students/ Academic Lecture⑪⑫				
時 間	カリキュラム／イベント		教 職 員	場所
8:45-11:45	Discussion Session among Students	ILAS	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授	IS-5+6
		KUASU	【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教	IS-2
13:30-15:30	Academic Lecture⑪ Why do we pay special attention on disasters? (なぜ、我々は災害を特別視するのか?)		【防災研究所】 多々納裕一 (TATANO Hirokazu)教授	ILAS Bldg. Room32

15:45-17:45	Academic Lecture ^⑫ Cultural Aspects of Education in Japan (学校教育にみる日本文化の諸相)		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授	ILAS Bldg. Room32
8月10日(木) Preparation for Final Presentation/ Final Presentation/ Completion Ceremony/ Farewell Party				
時 間	カリキュラム／イベント		教 職 員	場所
8:45-11:45	Preparation for Final Presentation	ILAS		IS-1
		KUASU		IS-3
13:30-16:30	Final Presentation	ILAS	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授	ILAS Bldg. Room32
		KUASU	【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教	IS-4
16:45-17:45	Completion Ceremony		【国際高等教育院】 宮川恒 (MIYAGAWA Hisashi)教育院長 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 大島美花 (OSHIMA Mika)職員 【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教	ILAS Bldg. Room32
18:00-	Farewell Party		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 【学際融合教育研究推進センター】 張子康 (ZHANG Zikang)特定助教	IS-5+6

3.3 アカデミックレクチャー担当教員一覧

No.	Date	Photo	Lecturer	Affiliation	Lecture title	Language
①	July 29 13:30- 15:30		Zikang ZHANG Program-specific Assistant Professor	Center for the Promotion of Interdisciplinary Education and Research (C-PIER)	歴史からみる日本社会の多様性 Diversity of Japanese Society in Historical Perspective	日本語 Japanese + English
②	July 31 13:30- 15:30		Nahoko Tokuyama Assistant Professor	Wildlife Research Center, Kyoto University	Exploring the Fascinating World of Bonobos: Unveiling the Secrets of Their Unique Matriarchal Society (ボノボのメス優位・中心社会の秘訣を探る)	English
③	August 2 13:30- 15:30		Takashi SEKIYAMA Associate Professor	Graduate School of Advanced Integrated Studies in Human Survivability, Kyoto University	Political Economy of Japan's "Lost Decades" (日本「失われた30年」の政治経済学)	English
④	August 3 13:30- 15:30		Susumu KITAGAWA Deputy Director-General of Kyoto University Institute for Advanced Study, Distinguished Professor	Kyoto University Institute for Advanced Study Kyoto University Institute for Integrated Cell-Material Sciences (ICeMS)	Science and Technology in the Age of Gases - Is It Possible to Live on "Haze (Water Vapor and Air)" - (気体の時代の科学技術ー「かすみ(水蒸気 空気)」を食って生きることが可能か?ー)	English
⑤	August 5 13:30- 15:30		Mayuko SANO Professor	Graduate School of Education, Kyoto University	Diplomatic ceremonial in the last decade of the Tokugawa Shogunate: Japan's first step into modern diplomacy before the Meiji Restoration -Ver. 4 (幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の 幕開けを考えるーその4)	English
⑥	August 5 15:45- 17:45		Emiko OCHIAI Founding Director of Kyoto University Asian Studies Unit, Faculty of Sociology, Kyoto Sangyo University, Professor	Faculty of Sociology, Kyoto Sangyo University	The unique features of Japanese feminist movements: Placing Japan in the multilayered diversity of global gender history (日本のフェミニズム運動はどこが ユニークなのかーグローバルジェンダー史の 重層的な多様性の中に日本を位置付ける)	English
No.	Date	Photo	Lecturer	Affiliation	Lecture title	Language
⑦	August 7 10:30- 12:30		Taro IEMOTO Associate Professor	Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University	日本語の社会言語的機能 (Sociolinguistic aspects of Japanese)	日本語 Japanese
⑧	August 7 13:30- 15:30		Naoshi KONDO Professor	Graduate School of Agriculture, Kyoto University	Sustainable Food Production Considering Environment and Animal Welfare (環境、アニマルウェルフェアを考慮した 持続的食料生産)	English
⑨	August 8 10:30- 12:30		Fumitaka WAKAMATSU Program-Specific Lecturer	Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University	Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation (日本の捕鯨:食と保護を巡る文化政治学)	English
⑩	August 8 13:30- 15:30		Shikiko YUKAWA Associate Professor	Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University	The Aesthetics and Sensibilities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature (日本古典文学に見る日本人の美意識)	English
⑪	August 9 13:30- 15:30		Hirokazu TATANO Professor	Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University	Why do we pay special attention on disasters? (なぜ、我々は災害を特別視するのか?)	English
⑫	August 9 15:45- 17:45		Junko KAWAI Professor	Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University	Cultural Aspects of Education in Japan (学校教育にみる日本文化の諸相)	English

4. 成績評価

4.1 成績評価の概要

海外学生に対し京都大学から単位付与は行われていないものの、成績表及び参加証を交付している。協定校によってはそれに基づき、単位を認めているところもある(北京大学、延世大学校)。海外学生については、出席・参加態度 30%、日本語クラス 30%、最終発表と最終レポート 40%の合計で評価することとし、素点及び評語による成績評価を行った。2020 年度より、条件を満たした本学学生の受講生に対しても参加証を発行し、2022 年度より、本学学生の修了条件を精緻化し、プログラムの講義およびその他のプログラムの正規活動への出席・参加態度 30%、小レポート 10%、Discussion Session among Students への貢献 30%、最終レポート 30%の合計で評価することとした。そして、今年度から本学学生向けの全学共通科目「多文化教養演習：見・聞・知@京都」としての単位付与が実現し、本学の全学共通教育における位置づけがより明確なものとなった。

4.2 参考資料

本学学生成績評価基準

成績評価基準

京都大学国際高等教育院
京都大学アジア研究教育ユニット

京都サマープログラム 2023 の成績評価は以下の基準に沿っておこなわれます。

評価対象

必修活動を含む、合計 40 時間以上の参加者を評価対象とする。

【必修活動（25 時間）】

本学学生向けオリエンテーション 2 session の内 1 session（1 時間）

日本語教授準備講座 3 session の内 1 session（1 時間）

Academic Lecture 12 コマの内 8 コマ（16 時間）

KU. Introduction 2 コマの内 1 コマ（1 時間）

Discussion Session among Students（3 時間）

Final Presentation（3 時間）

(1) プログラムの講義およびその他のプログラムの正規活動への出席・参加態度	30%
(2) 小レポート（日本語教授準備講座・実習又は学外研修・文化体験等）	10%
(3) Discussion Session among Students への貢献	30%
(4) 最終レポート	30%

The assessment for “Kyoto Summer Program 2023”

Institute for Liberal Arts and Sciences (ILAS)
Kyoto University Asian Studies Unit (KUASU)

The assessment of “Kyoto Summer Program 2023” will be carried out in the following manner.

Participants will receive a certificate of participation. The certificate of participation and academic transcript will be awarded only when the following conditions are met. These certificates will be sent to each university after the program.

[Certificate of participation ・ Academic Transcript]

Requirements: Participants must attend at least 80% of the required 52hours of lecture and activities on a real time basis to receive the transcript.

Assessment:

- | | |
|--|-----|
| (1) Attendance and participation in lectures and activities | 30% |
| [42 hours of lectures and activities, including participation in | |
| Opening Ceremony &Orientation (1h) | |
| Campus Tour (1h) | |
| KU introduction (1h) | |
| Academic Lectures (16h) | |
| Fieldtrip (6h) | |
| Cultural Experience (6h) | |
| Graduate School/ Lab Visit (1h) | |
| Discussions Session among Students (3h) | |
| Presentation for Final Preparation (3h) | |
| Final Presentation (3h) | |
| Completion Ceremony (1h).] | |
| (2) Japanese language class | 30% |
| [2 hours × 5 days = 10 hours] | |
| (3) Presentation and Final report | 40% |



京都大学

September 7, 2023

ACADEMIC TRANSCRIPT

Name:

Home University:

Course: Kyoto Summer Program 2023

Period: July 28– August 10, 2023

Evaluation: Attendance and participation in lectures and activities (30%),
Japanese language class (30%), Presentation and final report (40%).

This certifies that Jingzhi Luo has completed the above-named program and received the following evaluation:

Attendance and participation in lectures and activities	30/30
Japanese language class (Elementary-IA)	29/30
Presentation and final report	35/40

Overall	94/100

For Reference:

The grading scale of the Kyoto University Institute for Liberal Arts and Sciences (ILAS) and Faculty/Graduate School of Letters is as follows:

A+: 100–96	A: 95–85	B: 75–84
C: 74–65	D: 64–60	F: below 60

Note: This document does not officially certify academic credits awarded by Kyoto University.

Hisashi MIYAGAWA

Director

Institute for Liberal Arts and Sciences
Kyoto University

5. プログラムの概要

5.1 実施方法

プログラムは4年ぶりの対面で実施され、京都大学に海外学生が集った。昨年度までのオンラインプログラムでは、参加学生のために時差を考慮して二部構成をとったが、今年度は本来の一部構成に戻り、参加者全員が同時間に同じ活動を行うことができるようになった。京都大学の1限と合わせて授業開始時間を8:45に設定し、最長19:30まで様々な活動を組み込んだ。会場は主にKUINEP講義室、国際高等教育院棟、吉田国際交流会館を使用し、出席はICカードを参加者に配布し、データで管理した。

5.2.カリキュラムの概要

5.2.1.カリキュラムの内容

今年度プログラムのカリキュラム内容は、おおむね表1のようにまとめることができる。大きく分けると、(A)日本語学習、(B)学術的学習、(C)体験学習、(D)共同学習の4つのパートから構成されている。(B)内のアカデミックレクチャーに関しては選択制である。A・B・C・Dの配分は以下の通りになる。

表1 本プログラムのカリキュラムの概要(時間数)

分類	項目	時間数	割合	内容	
A 日本語学習	日本語講義	10	16%	6クラス (初級3クラス、中級2クラス、上級1クラス)	
B 学術的学習	アカデミック レクチャー 研究室訪問	27	44%	社会学、政治経済学、科学技術、日本史、ジェンダー史、日本言語学、農学、文化政治学、日本古典文学、防災学、教育社会学(選択制)	
C 体験学習	文化体験	6	10%	日本文化体験 (KUASU)	日本文化体験 (ILAS)
	学外研修	6	10%	芦生研究林 Fieldtrip	
D 共同学習	討論・発表	9	15%	討論、発表準備、発表	
	その他	3	5%	Opening/ Completion Ceremony, Orientation, Campus Tour	
	計	61	100%		

本プログラムは国際的に活躍できる留学生／日本人大学生の育成を目的としており、受入・派遣の両プログラムが密接に連携している。双方向型の学生の受入・派遣をよ

り円滑にするため、学生間の交流が最も盛んとなる「D 共同学習」に質的な重点を置いてきた。京都サマープログラム 2023 では正規の時間としては 9 時間の共同学習を設けた他、授業の合間に自由参加の「Discussion in English」や「海外学生と日本語で話そう (Conversation with KU students in Japanese)」などの学生交流の時間を多く設けた。

本プログラムの内容は、以下の 4 つの部分に分けられる。

5.2.2 アカデミックレクチャー

毎年講義を担当する教員は代わるが、国際関係、歴史、文学、農学、社会学など、各教員が専門とする講義を依頼している。教授言語は主に英語(10 講義)、英語と日本語(1 講義)、主に日本語(1 講義)で提供された。

今年度のアカデミックレクチャーは 12 種のレクチャーを用意した。最低 8 種類受講することを評価対象の条件にし、関心があれば、8 科目を超えての受講も可能とした。

アカデミックレクチャーの内容も担当教員の間で検討を重ねた。選定の際の観点は、日本・日本社会を理解することに資する内容であること、又は本学のユニークな学究成果に触れられる内容であること、そして専門外の学生にも理解でき且つ表面的な理解にとどまらない内容を含むことである。今年度も、特定の分野・テーマに焦点をあてるのではなく、幅広いトピックを扱い、参加学生がこれまで触れることのなかった分野に触れ、分野を問わず物事を捉える際に生かせる視点を提供することを重視した。後掲の学生の報告文からは、この趣旨はよく理解されており、非常に高い満足度が示されている。

今年度の 11 のアカデミックレクチャーの担当教員、タイトルは次の通りである。後掲の写真、学生のコメントも参照されたい。

- ・張子康（学際融合教育研究推進センター）歴史からみる日本社会の多様性 (Diversity of Japanese Society in Historical Perspective)
- ・徳山奈帆子（野生動物研究センター）Exploring the Fascinating World of Bonobos: Unveiling the Secrets of Their Unique Matriarchal Society（ボノボのメス優位・中心社会の秘訣を探る）
- ・関山健（大学院 総合生存学館）Political Economy of Japan's "Lost Decades"（日本「失われた 30 年」の政治経済学）
- ・北川進（高等研究院）Science and Technology in the Age of Gases - Is it Possible to Live on "Haze (Water Vapor and Air)? -(気体の時代の科学技術―「かすみ（水蒸気、空気）」を食って生きることが可能か？―)
- ・佐野真由子（大学院教育研究科）Diplomatic ceremonial in the last decade of the Tokugawa Shogunate: Japan's first step into modern diplomacy before the Meiji Restoration ―Ver. 4(幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の幕開けを考える―その 4)
- ・落合恵美子（現代社会学部）The unique features of Japanese feminist movements: Placing Japan in the multilayered diversity of global gender history（日本のフェミニズム運動はどこがユニークなのかーグローバルジェンダー史の

重層的多様性の中に日本を位置付ける)

- ・ 家本太郎 (国際高等教育院) 日本語の社会言語的諸相 (Sociolinguistic aspects of Japanese)
- ・ 近藤直 (大学院農学研究科) Sustainable Food Production Considering Environment and Animal Welfare (環境、アニマルウェルフェアを考慮した持続的食料生産)
- ・ 若松文貴 (アジア・アフリカ地域研究研究科) Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation (日本の捕鯨:食と保護を巡る文化政治学)
- ・ 湯川志貴子 (国際高等教育院) The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature(日本古典文学に見る日本人の美意識)
- ・ 多々納裕一 (防災研究所) Why do we pay special attention on disasters?(なぜ、我々は災害を特別視するのか?)
- ・ 河合淳子 (国際高等教育院) Cultural Aspects of Education in Japan(学校教育にみる日本文化の諸相)

5.2.3 日本語教育

本プログラムのうち、ILAS プログラムは、募集の段階では日本語能力を要求しておらず、すべて英語で受講できる。しかし、以前のプログラム参加者には希望する学生が少なくなかったため、2016 年度(平成 29 年度)より、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターに講師紹介を依頼し、初級日本語のクラスの提供を開始した。日本語学習は非常に好評で、その後も継続されただけでなく、中級以上の学生も参加するようになってきた。そのために KUASU プログラムと乗り入れ、毎年 4 レベルの日本語クラスを提供してきた。それでも日本語クラスの更なる充実を求める声が大きかった。

一方、KUASU プログラムは、教授言語は原則として日本語であり、日本語能力試験 N3 以上の日本語能力を有することが望ましいと募集要項に記載している。

以上の状況を踏まえ、今年度は、レベルの日本語クラスを提供した。また、プレイスメントテストをオンラインでプログラム前に実施した。これにより、初回からスムーズに授業に入ることができた。重ねて Consultation for Japanese Language level の時間を設け、微調整が必要な学生への対応もしやすくなった。履修者構成は以下の通りとなった。どのレベルも、語学学習に適正な人数で構成されていることがみてとれよう。

さらに今年度より、本学受講生の希望者を各日本語クラスに配置し、担当講師の指示の下、海外学生の日本語学習を補助する役割を担わせた。海外学生にとっては、クラス内で習った事柄をその場で練習する相手となり、本学学生にとっても、日本語を教える難しさを認識し、その方法を学ぶ貴重な経験となった。

日本語クラスのレベル別受講者(2023)

	初級 IA	初級 IB	初級 II	中級 I	中級 II	中級 II～ 上級	
北京大学	1	1		1	1		4
香港中文大学	1	2	3				6
延世大学校	2	2					4
国立台湾大学	1		1	1			3
ウィーン大学	1						1
ハイデルベルク大学		2	1				3
カリフォルニア大学 サンディエゴ校				1		1	2
ジョージ・ワシントン大学				1			1
【KCJS】タフツ大学				1			1
ベトナム国家大学ハノイ校				1	1	3	5
チュラーロンコーン大学					3	1	4
インドネシア大学				1	2	1	4
合計							38

5.2.4 課内の特別活動

[Fieldtrip]

当プログラムの一つの軸は、日本社会への理解を深める実地研修であるが、昨年度までのオンラインプログラムでは、動画視聴と議論を中心に行ってきた。対面開催に復帰した今年度は、受講生が文字通り「フィールド」に赴き、現地での研修を行うことができた。

今年度のフィールドトリップではバスをチャーターし、京都大学フィールド科学教育研究センター 森林ステーション芦生研究林へ出かけた。教職員の方からお話を伺いながら芦生研究林の中を散策し、日本の原生林と生態系の保全、特に獣害の問題や、里山と人間の関係性について理解を深めた。

[KU intro.]

KU intro.とは Kyoto University Introduction の略であり、京都大学の紹介である。前述の通り、本プログラムは、本学学生はさらなる国際的活動への、そして海外学生は将来にわたる本学ひいては日本との関係への礎を築くことを目的としている。

担当の教員 2 名が日英両言語で 20 分程度の紹介を行った。その中には、日本留学や奨学金の情報も含めた。その後、学生による京大の学生生活の紹介が行われた。

[Cultural Experience]

ILAS プログラム、KUASU プログラムそれぞれで企画した。ILAS プログラムは文化紹介・文化比較として、午前中は浴衣の着付けと歴史的建造物の見物を行い、午後は

京都の和菓子を実際に作った。KUASU プログラムでは、午前中は「日本の商店街」をテーマに、京都の錦市場商店街へ出かけ、午後は京都大学の部活動を見学、体験した。詳細については、各プログラムの報告を参照のこと。

[Discussion among students ディスカッション]

プログラム 10 日目には、3 時間にわたる Discussion session among students が行われた。これは全ての受講生に参加が義務付けられている。ILAS のディスカッションでは、自由参加のディスカッションの時間を計 8 回とってきたが、Discussion session among students ではそれぞれのテーマのまとめを各代表者に発表してもらい、その後いくつかの話題について希望するメンバーでさらに 60 分間議論を行い、その後全体でアイデアの共有をした。各テーマの発表者と、扱った話題を記しておく。

8 月 6 日(土) 8:30-11:30 ILAS プログラムのディスカッション

各テーマの発表者

- ・ Immigrants and Refugees : リーダー Eva
- ・ Economic Inequality : 221 Mari
- ・ Economy and Wars : 120 Lino
- ・ Disaster Prevention : 211 Toshiya
- ・ Innovation : 213 Mayu
- ・ AI : リーダー Sota
- ・ Gender : 224 じんようず
- ・ Human and Nature : 220 Mihiro

当日ディスカッションテーマ

- ・ AI
- ・ Disaster Prevention
- ・ Gender
- ・ Humans and Nature

KUASU のディスカッションでは、担当教員とリーダーがテーマ(「ジェンダー」「コロナ禍での生活」「持続可能な社会」「若者と政治」)を設定した。ディスカッションでは、各チームの本学学生がファシリテーターがプレゼンをおこない、その後、各チーム内で議論をおこなった。

8 月 9 日(水) 8:45-11:45 KUASU プログラム(ディスカッションは 9:30-)

- ・ グループ①テーマ「AI と教育」
ファシリテーター : moai
- ・ グループ②テーマ「身近なジェンダーギャップ」
ファシリテーター : Shuta
- ・ グループ③テーマ「意味のある環境対策の政策提言をしよう」
ファシリテーター : kima

- ・グループ④テーマ「日本の移民受け入れ体制」

ファシリテーター：M.K.

- ・グループ⑤テーマ「戦争と平和」

ファシリテーター：massan

[Final Presentation 最終プレゼンテーション]

ILAS プログラムでは、4 分間の個人発表、KUASU プログラムは海外学生と本学学生で構成されるグループでの発表を行った。詳細については、各プログラムの報告を参照のこと。

5.2.5 課外の活動

[Discussion in English・発表準備講座/ 海外学生と日本語で話そう (Conversation with KU students in Japanese)]

プログラム中の朝と夕方の時間帯に開催された。Discussion in English は ILAS の学生・英語で議論したい本学学生向けで、KUASU の発表準備講座と同じ時間に行われた。発表準備講座は KUASU 学生が最終発表に向けグループで準備を進める時間である。本学学生もグループ発表に参加することができるが、一度参加を決めたら最終発表まで継続して参加する必要がある。また、海外学生と日本語で話そう (Conversation with KU students in Japanese) では、海外学生と本学学生が1対1になって日本語を話す機会を作った。後掲の報告書からは、この時間の自由な議論を高く評価する記述が少なくない。

[研究室訪問]

昨年度に引き続き、京都大学でどのような研究がおこなわれているのか、より具体的に知ることができる「研究室訪問」を行った。文学研究科、アイセムス、そして人間・環境学研究科の協力を得て、研究紹介や各大学院への進学案内を行い、好評を博した。

8月3日(木)				8月7日(月)	
17:00-18:00				18:00-19:30	
Department of Sociology Graduate School of Letters 文学研究科 社会学研究室		Institute for Integrated Cell-Material Sciences アイセムス		The Graduate School of Human and Environmental Studies 人間・環境学研究科	
海外学生	21	海外学生	13	海外学生	24
本学学生	9	本学学生	12	本学学生	13
合計	30	合計	25	合計	37

本学学生の数には補助を行う学生を含む。

6. 展望

各プログラム固有の展望については、各章に譲るが、ILAS プログラム、KUASU プログラム共通の観点から、(1) 地域の拡大、(2) 運営体制の充実、(3) 広報について、展望を述べておきたい。

(1) 現在、ILAS プログラム、KUASU プログラムは、それぞれの個性を生かしつつ、両者に共通する部分については協力して提供している。共通部分は、英語を教授言語とした学術講義(アカデミックレクチャー) 群、日本語授業、京大紹介講義(日本語、英語の 2 か国語で提供)、学外研修である。これにより、多様な背景を持つ学生が一同に会して学ぶ機会を提供できており、京都大学学生に対する教育的効果も大きい。とくに今後もこの方針を継続したい。

(2) 引き続き体制の強化が必要である。プログラムの経験を蓄積し、継続的なプログラム運営が可能となる体制を一層強化していかなければならない。学部生を受け入れるこうしたプログラムは、京都大学全体を見渡してもユニークなものであり、参加者、協力教員の評価も高い。現在、受入を実施していない協定校の学生からの参加希望の連絡を受けることもある。中・長期的実施を可能にする運営体制の構築が求められる。また、学外組織との連携は、両プログラムにとって重要な要素である。今年度は ILAS 側では京都府菓子工業組合・青年部、京都着物企画の協力を得た。KUASU 側では学内の部活動・サークル(有機農業研究会 minori、京都大学新聞社、京都大学天之武産合氣道同好会)の協力を得た。

(3) 広報も課題である。本プログラムは海外パートナー校では一定の認知度があるが、むしろ学内での認知度は向上の余地がある。今年度は本学学生向けの受講申込フォームに「どこで本プログラムを知ったか」という問いを入れ、統計をとった。複数回答を許可したが、総数に占める割合で一番大きいのは KULASIS で 44.8%にのぼった。次は授業中の紹介 31.3%で、知人・友人からの紹介が次いで 11.9%であった。上位 3 位で全体の 88%を占めることが分かった。65 人の応募があり、30 人を受講生として受け入れた。授業中の紹介では、プログラム担当教員が学生リーダーと共に、プログラムと特に親和性の強い授業を訪問して広報を行わせていただいたほか、本学の共通英語科目でも多数のクラスで紹介をいただいた。広報にご協力いただいた先生方に深く謝意を申し上げる。今後も学内外と連携し、海外学生、本学学生双方に資する研修内容の開発を行っていく。

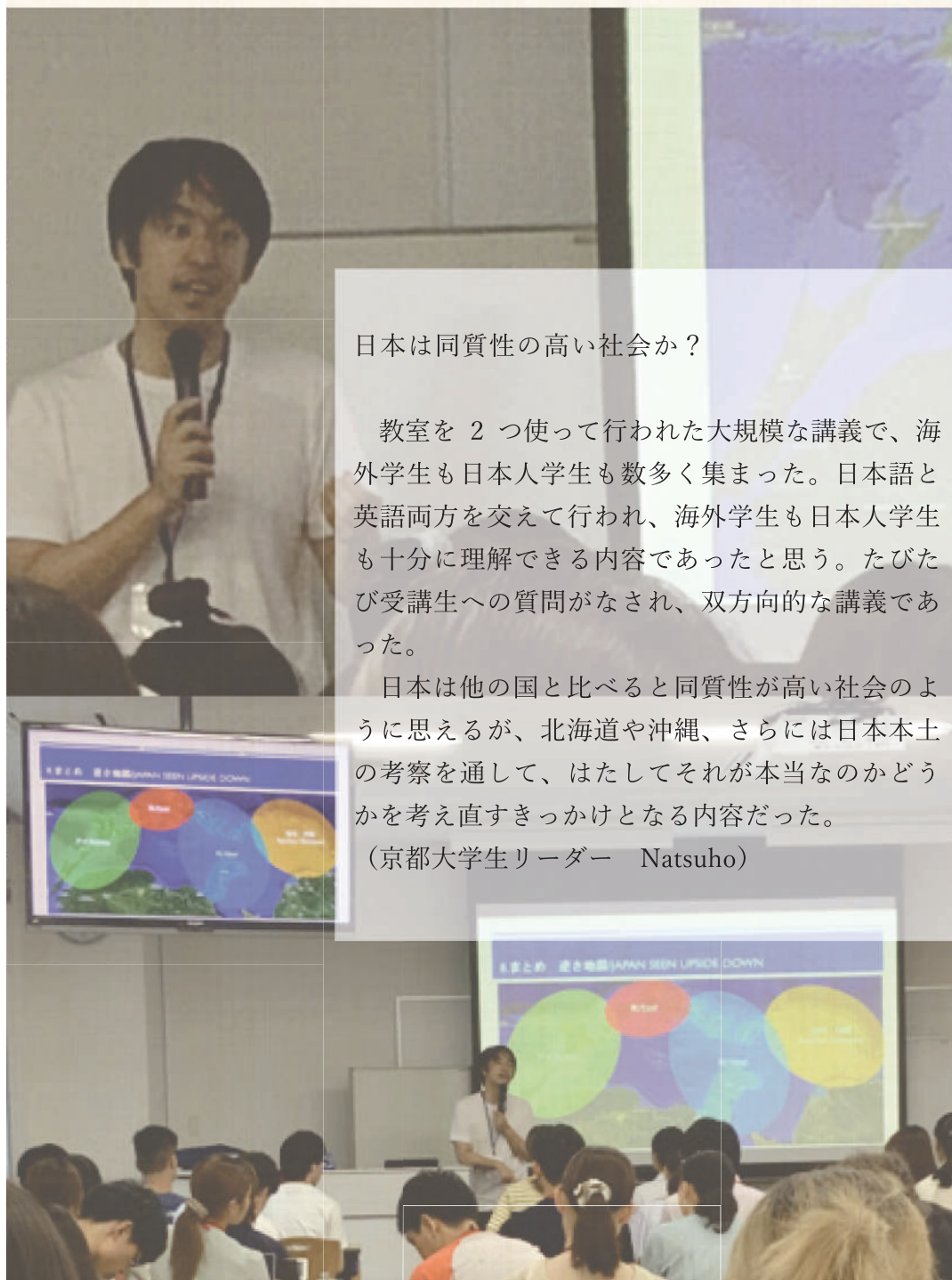
7. 資料集

アカデミックレクチャーの様子と報告

アカデミックレクチャー①; “歴史からみる日本社会の多様性

Diversity of Japanese Society in Historical Perspective”

[Zikang ZHANG]



日本は同質性の高い社会か？

教室を 2 つ使って行われた大規模な講義で、海外学生も日本人学生も数多く集まった。日本語と英語両方を交えて行われ、海外学生も日本人学生も十分に理解できる内容であったと思う。たびたび受講生への質問がなされ、双方向的な講義であった。

日本は他の国と比べると同質性が高い社会のように思えるが、北海道や沖縄、さらには日本本土の考察を通して、はたしてそれが本当なのかどうかを考え直すきっかけとなる内容だった。

(京都大学生リーダー Natsuho)

アカデミックレクチャー②; “Exploring the Fascinating World of Bonobos: Unveiling
the Secrets of Their Unique Matriarchal Society
(ボノボのメス優位・中心社会の秘訣を探る)”

[Nahoko TOKUYAMA]



チンパンジーとボノボは、霊長類の中でも特に近い存在である。そんなボノボとチンパンジーの大きな相違点は、チンパンジーの社会はオスが優位、ボノボの社会はメスが優位であるということだろう。では、なぜボノボの社会では女性優位なのだろうか。この説明として、二つの仮説がある。

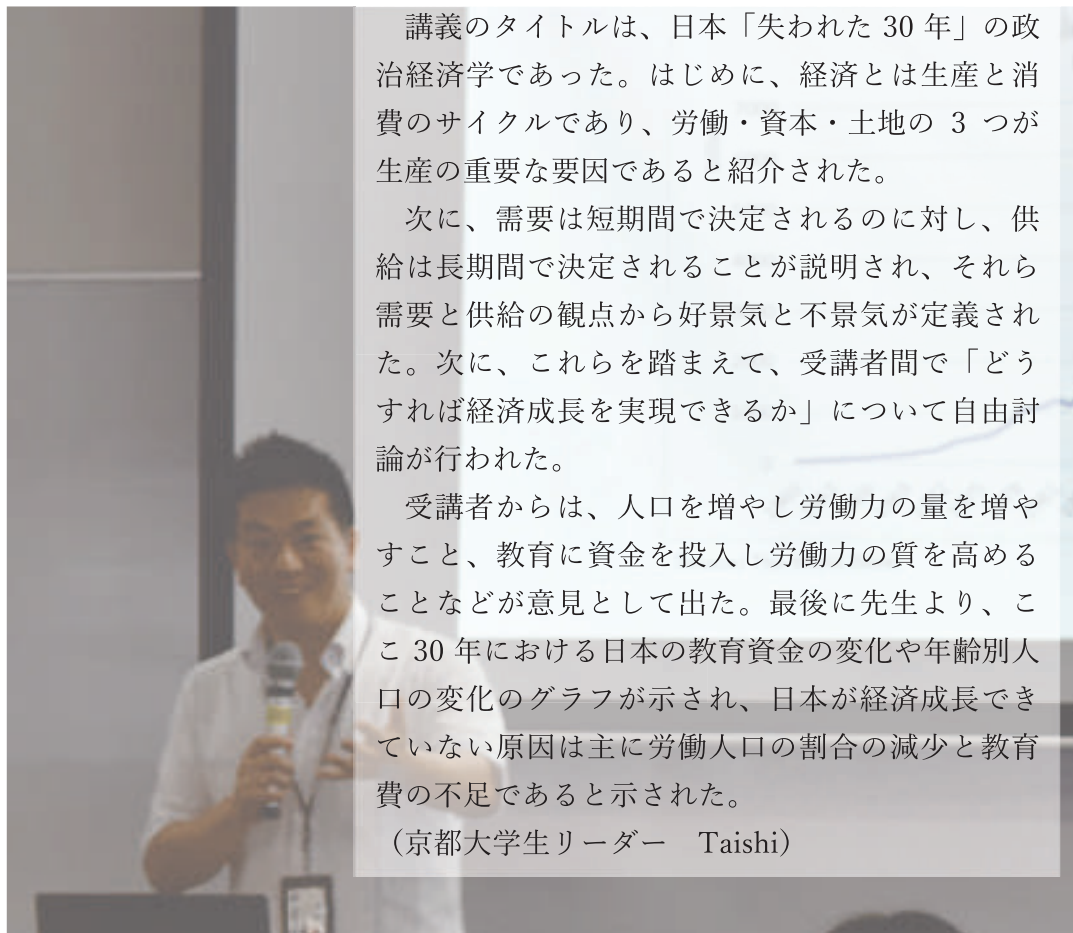
一つは、メスのボノボには妊娠中や子育て期間にも偽発情という状態になるためという説、もう一つはメス同士が協力するためという説である。後者が徳山先生の研究内容であり、フィールド調査の結果、若いメスのボノボと、オスのボノボが争う時、年長のメスのボノボが若いメスのボノボに協力してともに戦うという光景がみられたという。さらに、若いメスのボノボも年長のメスのボノボに従うような光景が多くみられ、群れで移動する時には年長のメスのボノボが先頭 (initiator) で引率することが多いという。まだ解明されていないことは多々あるが、このようにしてボノボの集団では年長のメスが優位な社会が形成される。

(京都大学生リーダー Haruka)

アカデミックレクチャー③；“Political Economy of Japan’s “Lost Decades”

(日本「失われた 30 年」の政治経済学)”

[Takashi SEKIYAMA]



講義のタイトルは、日本「失われた 30 年」の政治経済学であった。はじめに、経済とは生産と消費のサイクルであり、労働・資本・土地の 3 つが生産の重要な要因であると紹介された。

次に、需要は短期間で決定されるのに対し、供給は長期間で決定されることが説明され、それら需要と供給の観点から好景気と不景気が定義された。次に、これらを踏まえて、受講者間で「どうすれば経済成長を実現できるか」について自由討論が行われた。

受講者からは、人口を増やし労働力の量を増やすこと、教育に資金を投入し労働力の質を高めることなどが意見として出た。最後に先生より、ここ 30 年における日本の教育資金の変化や年齢別人口の変化のグラフが示され、日本が経済成長できていない原因は主に労働人口の割合の減少と教育費の不足であると示された。

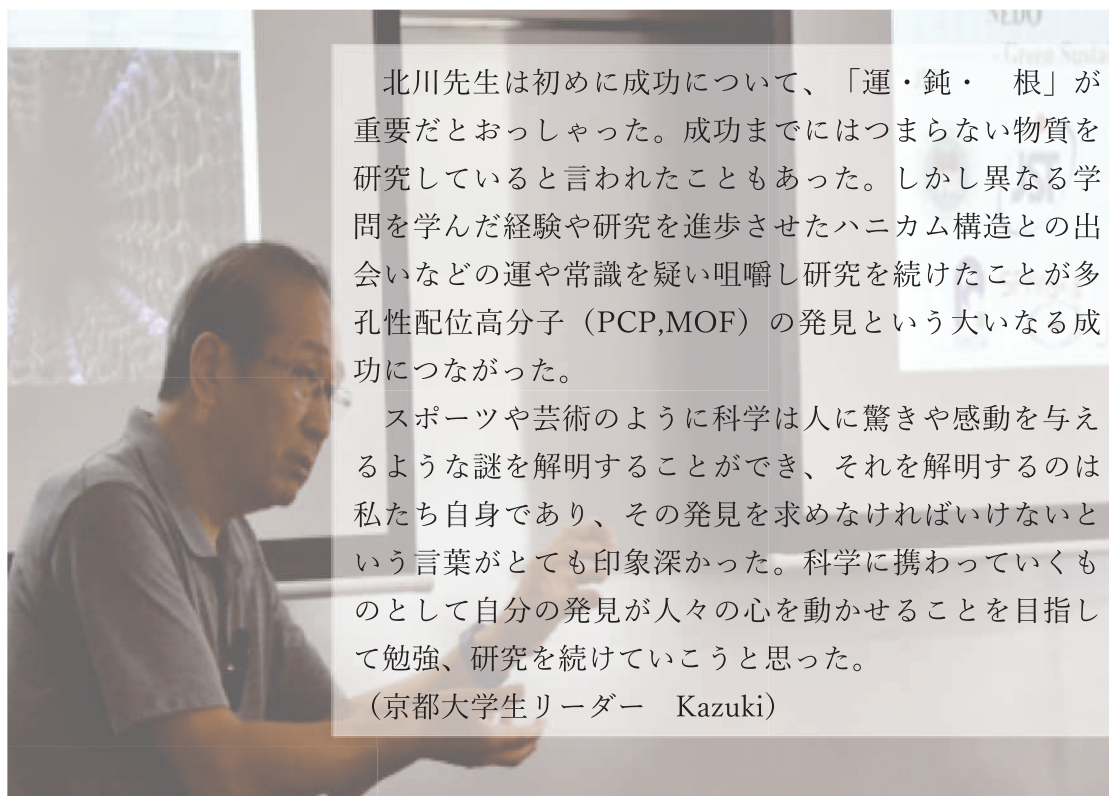
(京都大学生リーダー Taishi)

The title of this lecture was Political Economy of Japan’s “Lost Decades”. First, it was shown that economy is basically a cycle of production and consumption. Three factors: Labor, capital, and land are important to determine production. Supply is determined in a short time while demand is determined in a long time, and from these perspective recession and boom were defined.

Next, free discussion about how to realize economic growth was conducted among students. Some students said it was important to improve the amount of labor by increasing population and improve the quality of labor by educating people.

Finally, some graph or figures were given to show how the education funding and ratio of labor population have changed in these thirty years in Japan. The conclusion given by professor was that the reason why Japan has been trapped in “Lost decades” is aging society (decrease of ratio of labor population) and lack of education funding. (Taishi, Leader of Kyoto University)

アカデミックレクチャー④；“Science and Technology in the Age of Gases - Is it Possible to Live on "Haze (Water Vapor and Air)”（気体の時代の科学技術―「かすみ（水蒸気、空気）」を食って生きるとは可能か？―）” [Susumu KITAGAWA]



At the beginning, Dr. Kitagawa said that "Unn(luck), Don(bluntness), and Konn(root)" were important in regard to success. He was once told he was studying a boring subject before he succeeded. However, his experience of studying different disciplines and his encounter with honeycomb structures that advanced his research led him to the discovery of porous coordination polymers (PCP, MOF), which was a great success.

I was deeply impressed by his words that science, like sports and art, can unravel mysteries that surprise and inspire people, and that it is we ourselves who must seek such discoveries. As a person involved in science, I would like to continue my study and research with the aim that my discoveries will move people's hearts.
(Kazuki, Leader of Kyoto University)



アカデミックレクチャー⑤; “Diplomatic ceremonial in the last decade of the Tokugawa Shogunate: Japan’s first step into modern diplomacy before the Meiji Restoration –Ver. 4 (幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の幕開けを考えるーその4)”

[Mayuko SANJO]



幕末の外交儀礼についての講義。固定観念として明治維新から西洋式の儀礼が日本でも導入されたと思われがちだが、実は日本を含むアジアでも同様の形態が明治維新前から存在した。

筒井正憲という幕末の外交官が紹介された。ペリー来航時にハリスの国書を受け取ることに賛成派だった。朝鮮とは正式に国交があるのにどうしてアメリカとしてはいけないのかという理由付けをしたところが興味深いとのことだった。

この講義のまとめとして、西洋が日本を 180 度変えたのではなく、もともと共通認識が存在したことが見落とされていたように、研究をする際に先入観が入ると真実が見えないことがあるので、気をつけようということだった。

日本の教育において、明治維新後の日本の急速な発展を西洋化と結びつけて「正当」なものとするために日本独自の形態だった江戸時代を貶めてきた節があるように感じる。

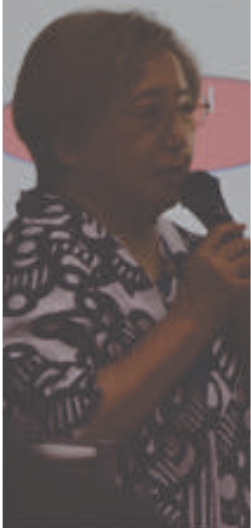
これは経済が劣っていたために西洋が全て正しいのだと認識してきたからだと思う。

今アジアは経済成長を遂げて西欧に匹敵するまでになったのでようやくこのような再評価ができるようになったのだと感じた。

今後アフリカ諸国などが経済成長を遂げるとまた新たな発見が得られるのかも知れない。

(京都大学生リーダー Haruki)

アカデミックレクチャー⑥; “The unique features of Japanese feminist movements:
Placing Japan in the multilayered diversity of global
gender history (日本のフェミニズム運動はどこがユニークなのかーグローバルジェンダー史の 重層的多様性の中に日本を位置付ける)” [Emiko OCHIAI]



講義全体を通して日本及びアジアの女性の性に関する歴史的な変遷を学んだ。前半は「一つのアジア」とも時に称されるほど似通っていると思われるアジアの文化は大変多様でありその変遷はとても複雑であることを学んだ。日本については昔の女性は性的に開放的であり離婚や再婚は一般的であったことに驚いた。日本の良妻賢母が比較的現代に考え出された概念であるのと同様に現代の価値観、イメージが必ずしも当てはまることはない。

後半では 1900 年代の日本の女性運動や家庭での位置付けについて学んだ。驚くべきは 1970 年までスウェーデンをはじめとした欧米諸国に比べて女性の労働率が高く 1900 年などは年齢別の就業率は現代のスウェーデンのそれに似た形をしていることだ。このような状況からなぜ現代のようになったかの詳しい理由や原因は講義内では語られ尽くされた訳ではないが本やネットでさらに調べたくなるような非常に興味深いものであった。

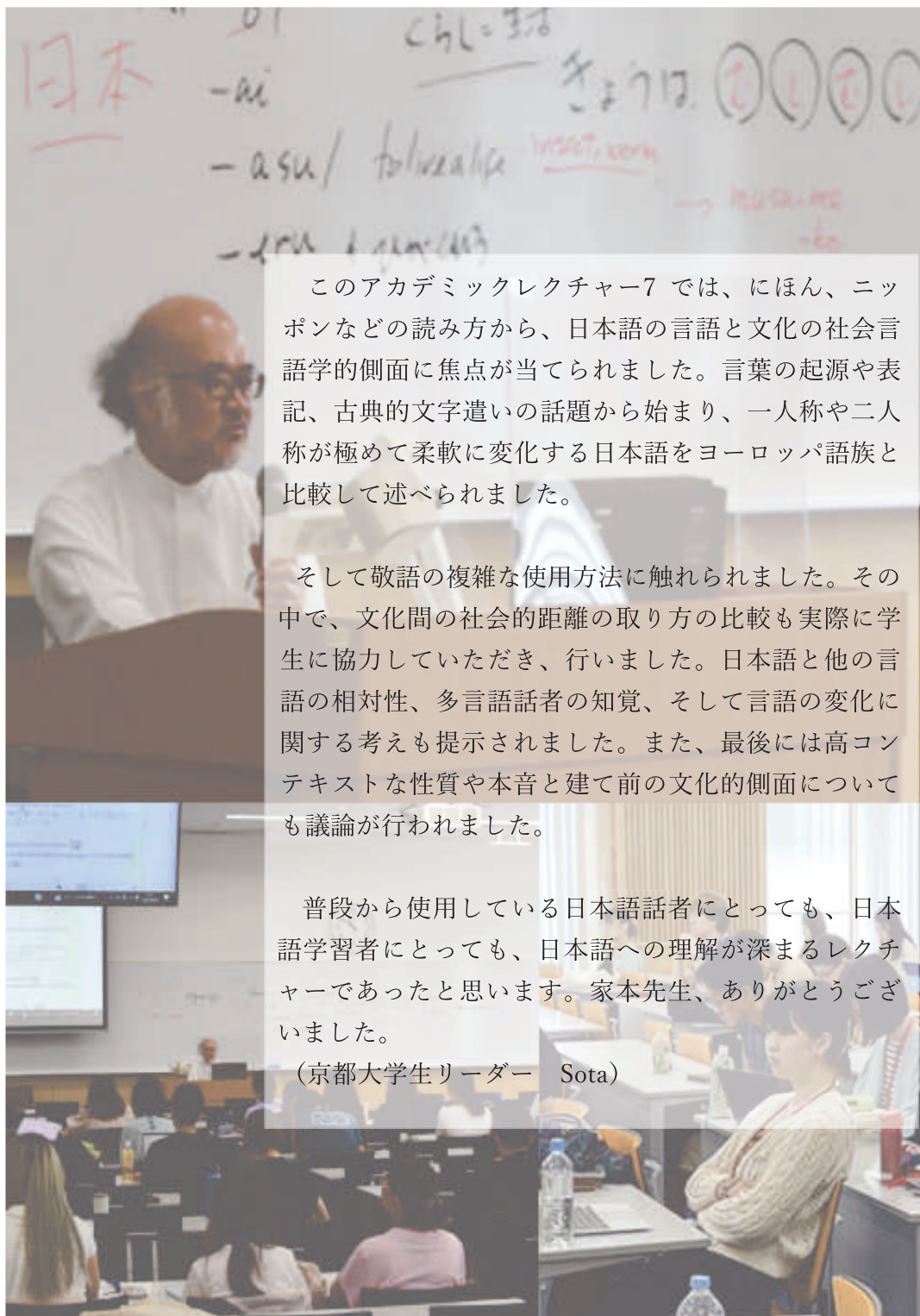
(京都大学生リーダー Kazuki)

Throughout the lecture, I learned about the historical evolution of women's sexuality in Japan and Asia. The first half of the lecture, I learned that Asian cultures, which sometimes seem so similar that they are referred to as "one Asia," are so diverse and their transitions so complex. In Japan, I was surprised to learn that in the past women were sexually liberated and that divorce and remarriage were common. Just as the Japanese concept of a "good wife and wise mother" is a relatively modern idea, modern values and images do not always apply.

In the second half of the course, we learned about the women's movement in Japan during the 1900s and its place in the family. Surprisingly, until 1970, women's labor rates were higher than in Sweden and other Western countries, and in 1900, for example, the employment rate by age was similar to that of today's Sweden. The detailed reasons and causes of how and why the situation changed from such a situation to the current one were not fully discussed in the lecture, but it was very interesting and made me want to do further research in books and on the Internet. (Kazuki, Leader of Kyoto University)

アカデミックレクチャー⑦: “日本語の社会言語的諸相
(Sociolinguistic aspects of Japanese)”

[Taro IEMOTO]



このアカデミックレクチャー7では、にほん、ニッポンなどの読み方から、日本語の言語と文化の社会言語学的側面に焦点が当てられました。言葉の起源や表記、古典的文字遣いの話題から始まり、一人称や二人称が極めて柔軟に変化する日本語をヨーロッパ語族と比較して述べられました。

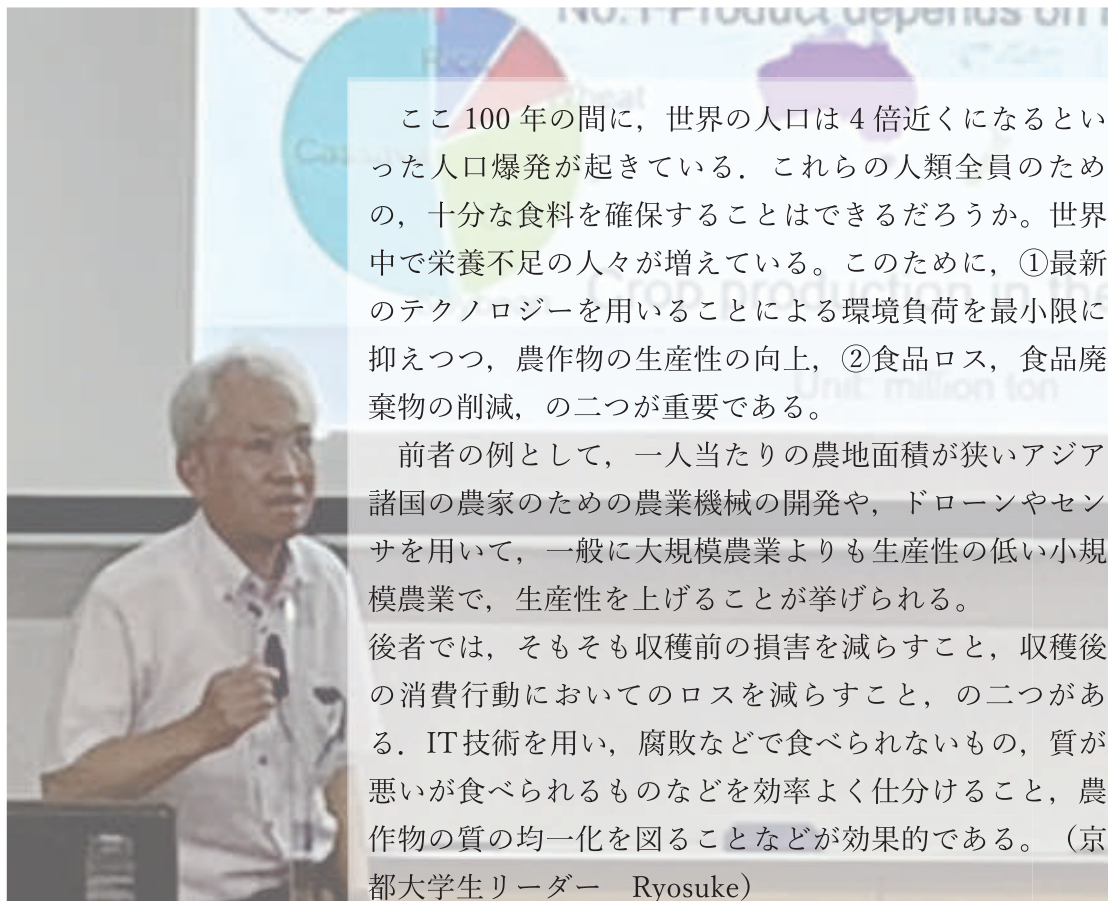
そして敬語の複雑な使用方法に触れられました。その中で、文化間の社会的距離の取り方の比較も実際に学生に協力していただき、行いました。日本語と他の言語の相対性、多言語話者の知覚、そして言語の変化に関する考えも提示されました。また、最後には高コンテキストな性質や本音と建て前の文化的側面についても議論が行われました。

普段から使用している日本語話者にとっても、日本語学習者にとっても、日本語への理解が深まるレクチャーであったと思います。家本先生、ありがとうございました。

(京都大学生リーダー Sota)

アカデミックレクチャー⑧; “Sustainable Food Production Considering Environment and Animal Welfare (環境、アニマルウェルフェアを考慮した 持続的食料生産)”

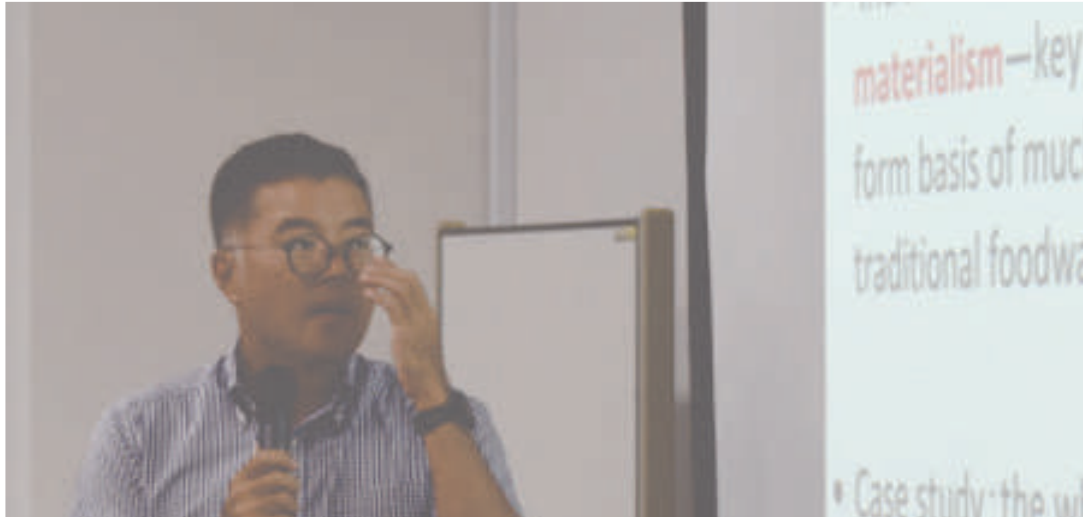
[Naoshi KONDO]



Over the past 100 years, the world's population has exploded, nearly quadrupling in size. Can we ensure an adequate food supply for all these people? Malnutrition is on the rise worldwide. To address this challenge, two key factors are crucial: 1) improving crop productivity while minimizing environmental impact using cutting-edge technology, and 2) reducing food loss and waste. As an example of the former, the development of agricultural machinery for farmers in densely populated Asian countries with limited arable land per capita and the utilization of drones and sensors to enhance productivity in generally less productive small-scale farming compared to large-scale agriculture can be cited.

Regarding the latter, there are two aspects: reducing pre-harvest losses and minimizing post-harvest waste. Utilizing IT technology to efficiently sort out items that are unsuitable for consumption due to factors like spoilage and those with lower quality but still edible, as well as striving for uniformity in the quality of agricultural products, can be effective strategies. In the face of a rapidly growing global population and increasing food insecurity, innovative approaches and technology-driven solutions will be pivotal in meeting the challenge of providing sufficient and nutritious food for all. (Ryosuke, Leader of Kyoto University)

アカデミックレクチャー⑨; “Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation
(日本の捕鯨:食と保護を巡る文化政学)”
[Fumitaka WAKAMATSU]



今回は、京都大学学術研究支援室 URA に所属されている若松文貴先生に「Whaling in Japan : Cultural politics of food and conservation」という題で、1) 食禁忌とは何か、2) 捕鯨の問題系、3) 捕鯨の解釈をめぐって、について講義していただきました。

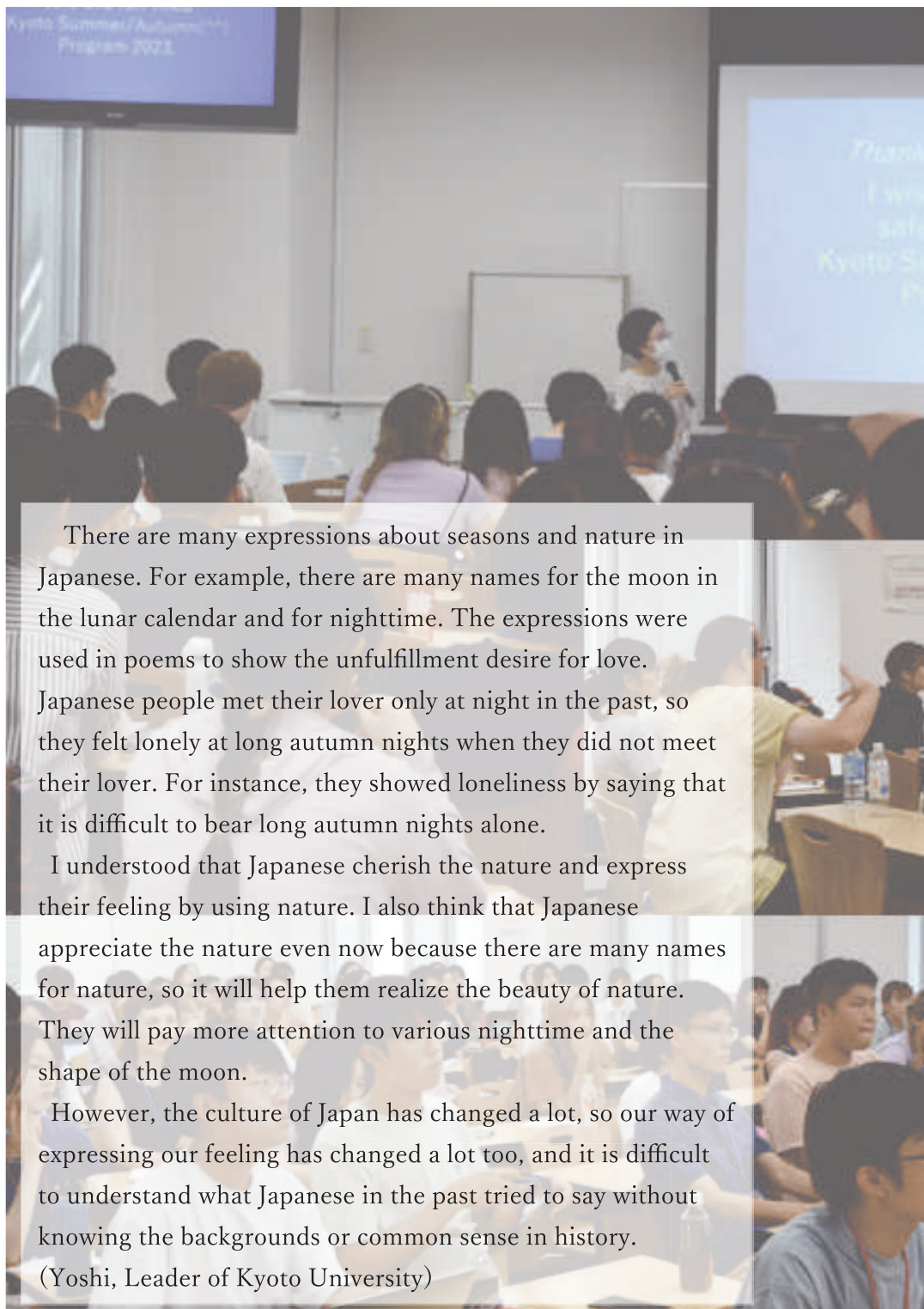
若松先生は、世界的に批判を浴びることがある「日本の捕鯨」という営みに関して、食にまつわる禁忌と理論・日本の歴史的背景や法律・捕鯨可能な他国との比較などの観点から解説されました。

講義終盤には Q&A にもご回答いただきました。主に ILAS 海外学生が、自国の食肉文化との比較・味や料理に関する質問をして、大変盛り上がる時間となりました。

(京都大学生リーダー Shuya)



アカデミックレクチャー⑩; “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature (日本古典文学に見る日本人の美意識)” [Shikiko YUKAWA]



アカデミックレクチャー⑪；“Why do we pay special attention on disasters?”

(なぜ、我々は災害を特別視するのか?)”

[Hirokazu TATANO]



京都大学の防災研究所では地震、火山研究グループ、大気・水研究グループ、地盤研究グループ、総合防災研究グループの四つのグループがあり、様々な観点から災害大国日本の防災について研究が行われています。

自然災害の危険性の特徴がいくつか挙げられます。まずはめったに起こらないことという特徴です。自然災害はめったに起こらないので、過去の事例が極端に少なく、歴史から学ぶということが非常に困難な状況です。

二つ目は災害というのは一回起こってしまうと、甚大な被害をもたらす、復旧までに時間を要してしまうことなどが挙げられます。

現在、世界の様々な地域で都市化が進んでおり、都市の災害に対する脆弱性が問題視されています。これを克服するために、モデル化を向上させること、リスクコミュニケーションを円滑に行う、災害教育の充実を図るなどの対策を行う必要があります。

(京都大学生リーダー Fumiya)

Research is being conducted on disaster prevention in Japan from various perspectives.

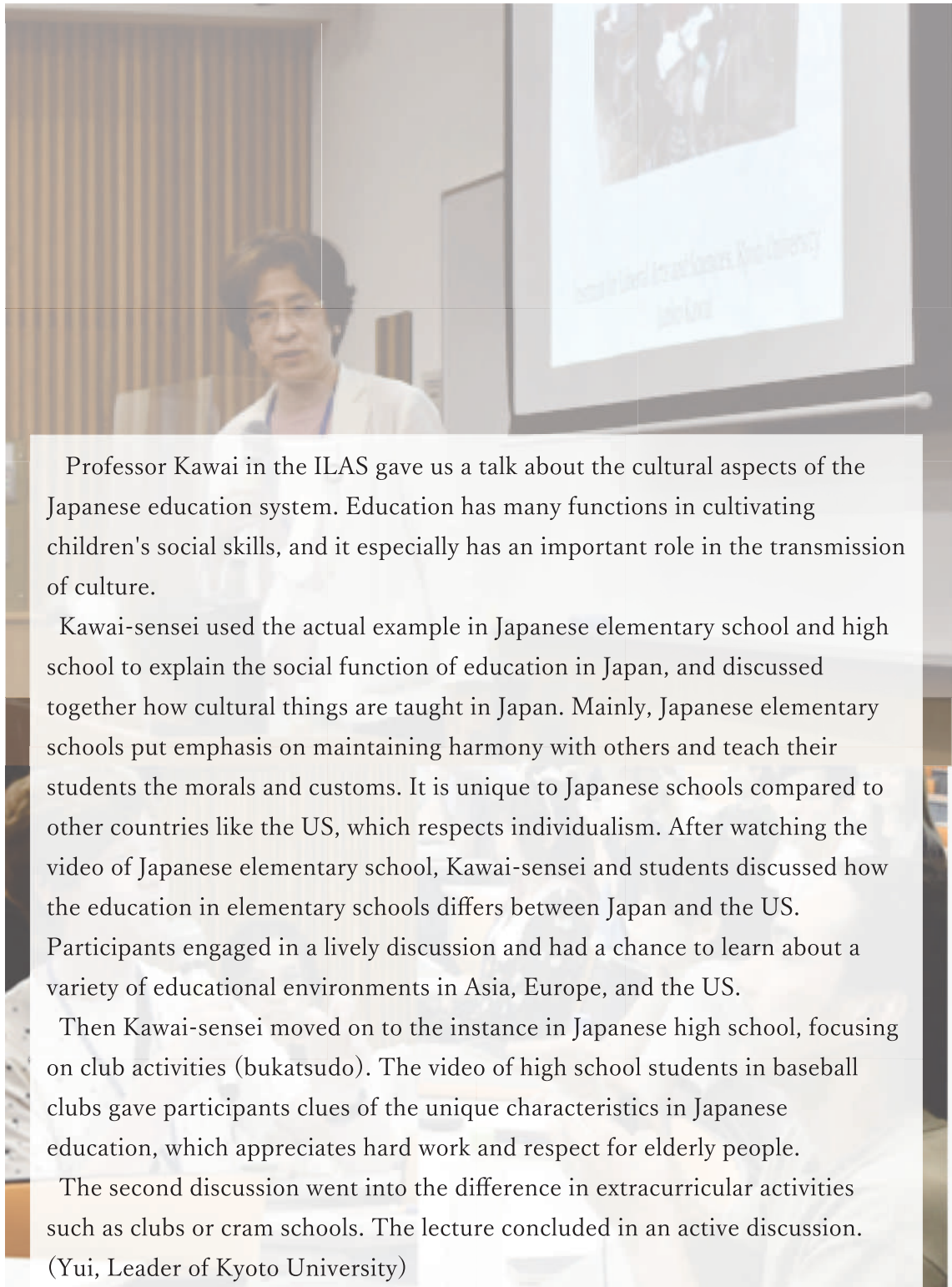
First, let's look at trends in disasters around the world. The number of disasters causing extensive damage is increasing worldwide. The Great East Japan Earthquake and Hurricane Katrina in the United States were two of the world's most devastating disasters and caused the greatest economic losses. There are several characteristics of natural disaster hazards. The first characteristic is that they rarely occur. Because natural disasters occur so rarely, there are very few examples from the past, so it is very difficult to learn from history. Second, once a disaster occurs, it can cause extensive damage and it take a long time to recover.

Urbanization is currently underway in many parts of the world, and the vulnerability of cities to disasters is becoming an issue. To overcome this, it is necessary to improve modeling by numerical analysis, facilitate risk communication, and enhance disaster education.

(Fumiya, Leader of Kyoto University)

アカデミックレクチャー⑫；“Cultural aspects of education in Japan
(学校教育にみる日本文化の諸相)”

[Junko KAWAI]



Professor Kawai in the ILAS gave us a talk about the cultural aspects of the Japanese education system. Education has many functions in cultivating children's social skills, and it especially has an important role in the transmission of culture.

Kawai-sensei used the actual example in Japanese elementary school and high school to explain the social function of education in Japan, and discussed together how cultural things are taught in Japan. Mainly, Japanese elementary schools put emphasis on maintaining harmony with others and teach their students the morals and customs. It is unique to Japanese schools compared to other countries like the US, which respects individualism. After watching the video of Japanese elementary school, Kawai-sensei and students discussed how the education in elementary schools differs between Japan and the US. Participants engaged in a lively discussion and had a chance to learn about a variety of educational environments in Asia, Europe, and the US.

Then Kawai-sensei moved on to the instance in Japanese high school, focusing on club activities (bukatsudo). The video of high school students in baseball clubs gave participants clues of the unique characteristics in Japanese education, which appreciates hard work and respect for elderly people.

The second discussion went into the difference in extracurricular activities such as clubs or cram schools. The lecture concluded in an active discussion. (Yui, Leader of Kyoto University)

日本語シラバス

Japanese Language Classes

科目名 Title		日本語初級I/A Japanese Elementary I/A		講師 Instructor		柏木 美和子 Kashiwagi, Miwako	
〔授業の進め方 Contents of the class〕							
かい 回	がっぴ 月日 (曜日) Date		じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授業内容 Contents of the class		びこう 備考 Notes	
	きょうしつ 教室 Classroom						
1	7月29日 (土) Jul.29 (Sat.) IS-5		10:30 - 12:30	にほんごたんぼう はつおん めいしぶん 日本語探訪1: 発音、名詞文、 自己紹介、あいさつ			
				Exploring Japanese Language 1: Pronunciation, Noun sentences Greeting, Self-introduction			
2	7月31日 (月) Jul.31 (Mon.) IS-5		10:30 - 12:30	にほんごたんぼう ぶんぽう どうしぶん かいわ 日本語探訪2: 文法、動詞文1、会話		たんご 単語クイズ	
				Exploring Japanese Language 2: Japanese Grammar, Verb sentences 1 Conversation: Useful expressions		Vocabulary quiz	
3	8月2日 (水) Aug.2 (Wed.) IS-5		10:30 - 12:30	にほんごたんぼう もじ けいようしぶん かいわ 日本語探訪3: 文字、形容詞文、会話		たんご 単語クイズ	
				Exploring Japanese Language 3: Japanese letters, Adjective sentences Conversation: Useful expressions		Vocabulary quiz	
4	8月3日 (木) Aug.3 (Thu.) IS-5		10:30 - 12:30	にほんごたんぼう どうしぶん かいわ 日本語探訪4: 動詞文2、会話		たんご 単語クイズ	
				Exploring Japanese Language 4: Verb sentences 2 Conversation: Useful expressions		Vocabulary quiz	
5	8月5日 (土) Aug.5 (Sat.) IS-5		10:30 - 12:30	にほんごたんぼう にほんごしょうはつびよう 日本語探訪5: 日本語小発表、まとめ		たんご 単語クイズ	
				Exploring Japanese Language 5: Short Presentation in Japanese Wrap-up		Vocabulary quiz	
〔教科書 Textbook〕 ひつよう しりょう はいふ 必要な資料を配布する。Teaching materials will be provided.							
〔その他の注意 Miscellaneous〕 にほんごがくしゅう 日本語学習システム「さみどり」で、ひらがなとカタカナの読み方を学んでおいてくださ い。 Please learn how to read Hiragana & Katakana with Japanese Learning System “Samidori”. https://www.samidori.k.kyoto-u.ac.jp							

〔^{きょうだいせい}京大生に^{もと}求めること〕初めて日本語を学ぶ留学生たちです。彼らの日本語使用を後押しするとともに、日本語の興味深さも伝えたいと思います。各クラスの後半で「京大生 10 分ツアー」という時間を設けますので、できるだけ彼らが習った日本語を使い、キャンパス・京大周辺・京都市内の楽しみ方を案内、ワクワクドキドキ体験を演出してください。よろしくお願いいたします。

Schedule

10:30-12:30	E-I/A Kashiwagi sensei
July 29 (Sat.)	IS-5
July 31 (Mon.)	IS-5
August 2 (Wed.)	IS-5
August 3 (Thu.)	IS-5
August 5 (Sat.)	IS-5

15:45-17:45	E-I/A Kashiwagi sensei
August 7 (Mon.)	No class
August 8 (Tue.)	No class

IS-5: Room5, basement floor, Yoshida International House

^{よしだ こくさいこうりゅうかいかん} 吉田国際交流会館 ^{ちか} 地下 ^{こうぎしつ} 講義室5

科目名 Title		にほんごしょきゅう 日本語初級I／B Japanese Elementary I/B		こうし 講師 Instructor		なんば ひさこ 南場 尚子 Namba, Hisako	
〔授業の進め方 Contents of the class〕							
かい 回	がっぴ ようび 月日（曜日） Date	じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授業内容 Contents of the class		びこう 備考 Notes		
	きょうしつ 教室 Classroom						
1	7月29日（土） Jul.29 (Sat.) IS-6	10:30	1. 発音、文字、自己紹介				
		- 12:30	1. Pronunciation, Characters, Self-introduction				
2	7月31日（月） Jul.31 (Mon.) IS-6	10:30	2. あいさつ、会話:名詞文①				
		- 12:30	2. Greetings Conversation: noun sentences①				
3	8月2日（水） Aug.2 (Wed.) IS-6	10:30	3. 会話:名詞文②				
		- 12:30	3. Conversation: noun sentences②				
4	8月5日（土） Aug.5(Sat.) IS-6	10:30	4. 会話：動詞文				
		- 12:30	4. Conversation: verb sentences				
5	8月7日（月） Aug.7(Mon.) IS-6	15:45	5. 会話：形容詞文 スピーチ				
		- 17:45	5. Conversation: adjective sentences Speech				
〔教科書 Textbook〕 教材配布。Teaching materials will be provided.							
〔その他の注意 Miscellaneous〕							
〔京大生に求めること〕 日本語を外国語の一つとして客観的に見てみてください。 それを初めて学習する人にとって、何かなぜ難しいのかも合わせて意識してみてください。							

Schedule

10:30-12:30	E-I/B Nanba sensei
July 29 (Sat.)	IS-6
July 31 (Mon.)	IS-6
August 2 (Wed.)	IS-6
August 3 (Thu.)	No class
August 5 (Sat.)	IS-6

15:45-17:45	E-I/B Nanba sensei
August 7 (Mon.)	IS-6
August 8 (Tue.)	No class

IS-6: Room 6, basement floor, Yoshida International House

よしだ こくさいこうりゅうかいかん ち か こうぎしつ
吉田国際交流会館 地下 講義室6

科目名 Title		にほんごしょきゅう 日本語初級Ⅱ Japanese Elementary I/Ⅱ		こうし 講師 Instructor		なかざわ まゆみ 中澤 まゆみ Nakazawa, Mayumi	
〔授業の進め方 Contents of the class〕							
かい 回	がっぴ いうび 月日（曜日） Date		じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授業内容 Contents of the class		びこう 備考 Notes	
	きょうしつ 教室 Classroom						
1	7月29日（土） Jul.29 (Sat.) IS-2		10:30	様態・伝聞表現練習／会話 （～そう）			
			- 12:30				
2	7月31日（月） Jul.31 (Mon.) IS-2		10:30	助言・勧誘表現練習／会話 （～たほうがいい・～ませんか）			
			- 12:30				
3	8月2日（水） Aug.2 (Wed.) IS-1		10:30	可能表現練習／会話 （～ことができる・potential form）			
			- 12:30				
4	8月3日（木） Aug.3 (Thu.) IS-2		10:30	条件表現練習／会話 （～たら・～なら）			
			- 12:30				
5	8月5日（土） Aug.5 (Sat.) IS-2		10:30	受身表現練習／会話 （～れる・～られる）			
			- 12:30				
〔教科書 Textbook〕 教材配布。Teaching materials will be provided.							
〔その他の注意 Miscellaneous〕 時間厳守。							
〔京大生に求めること〕 学習者との会話は日本語だけで行ってください。学習者は初級前半の文法・語彙は理解できますので、既習の文型・語彙を使うように心がけてください。							

Schedule

10:30-12:30	E-II Nakazawa sensei
July 29 (Sat.)	IS-2
July 31 (Mon.)	IS-2
August 2 (Wed.)	IS-1
August 3 (Thu.)	IS-2
August 5 (Sat.)	IS-2

15:45-17:45	E-III Nakazawa sensei
August 7 (Mon.)	No class
August 8 (Tue.)	No class

IS-2: Room 2, Yoshida International House

よしだ こくさいこうりゅうかいかん いっかい こうぎしつ
吉田国際交流会館 1階 講義室2

IS-1: Room 1 Yoshida International House

よしだ こくさいこうりゅうかいかん いっかい こうぎしつ
吉田国際交流会館 1階 講義室1

科目名 Title		にほんごちゅうきゅう 日本語 中 級 I Japanese Intermediate I		こうし 講師 Instructor		しもはし みわ 下橋 美和 Shimohashi, Miwa	
〔授業の進め方 Contents of the class〕							
かい 回	がつ 日 (曜日) Date		じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授 業 内 容 Contents of the class		びこう 備考 Notes	
	きょうしつ 教室 Classroom						
1	7 月 29 日 (土) Jul.29 (Sat.) IS-3		10:30 -	さそ 誘う			
			12:30	はなあ 話し合う			
2	8 月 2 日 (水) Aug.2 (Wed.) IS-3		10:30 -	いらい 依頼する			
			12:30	メールを書く			
3	8 月 3 日 (木) Aug.3 (Thu.) IS-3		10:30 -	きよか もと 許可を求める			
			12:30	1 分スピーチ (1)			
4	8 月 5 日 (土) Aug.5 (Sat.) IS-3		10:30 -	まとまった文章を読む			
			12:30	1 分スピーチ (2)			
5	8 月 7 日 (月) Aug.7 (Mon.) IS-3		15:45 -	まとまった文章を読む			
			17:45	1 分スピーチ (3)			
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を配布する。 参考テキスト：『会話に挑戦！中 級 前期からの日本語ロールプレイ』（スリーエーネットワーク）							
〔その他の注意 Miscellaneous〕							
〔京大生に求めること〕 ロールプレイをするときや話し合うとき、留学生の会話のパートナーになってください。 留学生がメールを書くとき、1分スピーチの準備をするときのお手伝いをお願いします。 中級レベルの日本語を使ってくださるとありがたいです。							

Schedule

10:30-12:30	Interm-I Shimohashi sensei
July 29 (Sat.)	IS-3
July 31 (Mon.)	No class
August 2 (Wed.)	IS-3
August 3 (Thu.)	IS-3
August 5 (Sat.)	IS-3

15:45-17:45	Interm-I Shimohashi sensei
August 7 (Mon.)	IS-3
August 8 (Tue.)	No class

IS-3: Room 3, basement floor, Yoshida International House

よしだ こくさいこうりゅうかいかん ち か こうぎしつ
吉田国際交流会館 地下 講義室3

科目名 Title		にほんごちゅうきゅう 日本語 中 級 II Japanese Intermediate I		こうし 講師 Instructor	うらきのりかず 浦木 貴和 Norikazu, Uraki
〔授業の進め方 Contents of the class〕					
かい 回	がっぴ 月日 (曜日) Date	じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授業内容 Contents of the class	びこう 備考 Notes	
	きょうしつ 教室 Classroom				
1	7 月 29 日 (土) Jul.29 (Sat.) IS-4	10:30	ニュースの日本語、ニュースな日本語①		
		- 12:30	ニュースの日本語、ニュースな日本語②		
2	7 月 31 日 (月) Jul.31 (Mon.) Room22, North Wing Seminar Room	10:30	ニュースの日本語、ニュースな日本語③		
		- 12:30	ニュースの日本語、ニュースな日本語④		
3	8 月 3 日 (木) Aug.3 (Thu.) IS-4	10:30	ニュースの日本語、ニュースな日本語⑤		
		- 12:30	ニュースの日本語、ニュースな日本語⑥		
4	8 月 5 日 (土) Aug.5 (Sat.) IS-4	10:30	ニュースの日本語、ニュースな日本語⑦		
		- 12:30	ニュースの日本語、ニュースな日本語⑧		
5	8 月 8 日 (火) Aug.8 (Tue.) IS-4	15:45	ニュースの日本語、ニュースな日本語⑨		
		- 17:45	ニュースの日本語、ニュースな日本語⑩		
〔教科書 Textbook〕 ざっし しんぶん きじ どうが しょう よてい 雑誌や新聞記事、動画などを使用する予定					
〔その他の注意 Miscellaneous〕					
がくせい のうりょく ないよう か 学生のニーズや能力によって内容を変えることがあります。					
〔京大生に求めること〕					
外国から来る学生たちの日本語を手助けしながら日本および出身国の文化や社会などについて学び合いディスカッションをしてほしい。					

Schedule

10:30-12:30	Interm-II Uraki sensei
July 29 (Sat.)	IS-4
July 31 (Mon.)	Room22, North Wing Seminar Room
August 2 (Wed.)	No class
August 3 (Thu.)	IS-4
August 5 (Sat.)	IS-4

15:45-17:45	Interm-II Uraki sensei
August 7 (Mon.)	No class
August 8 (Tue.)	IS-4

IS-4: Room 4, basement floor, Yoshida International House

よしだこくさいこうりゅうかいかん ちか こうぎしつ
吉田国際交流会館 地下 講義室4

Room 22, North Wing Seminar Room よしだみなみそうごうかん きたとう かい こうぎしつ
吉田南総合館 北棟 2階 22講義室

科目名 Title		にほんごじょうきゅう 日本語 上 級 Japanese Advanced		こうし 講師 Instructor		しらかた よしか 白方 佳果 (Shirakata, Yoshika)	
〔授業の進め方 Contents of the class〕							
かい 回	がっぴ じようび 月日 (曜日) Date		じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授 業 内 容 Contents of the class		びこう 備考 Notes	
	きょうしつ 教室 Classroom						
1	7 月 29 日 (土) Jul.29 (Sat.)		10:30	ガイダンス			
			12:30	きょうと かん ぶんしやう 京都に関する文章 を読む①			
2	7 月 31 日 (月) Jul.31 (Mon.)		10:30	きょうと かん ぶんしやう 京都に関する文章 を読む②			
			12:30	きょうと かん ぶんしやう 京都に関する文章 を読む③			
3	8 月 2 日 (水) Aug.2 (Wed.)		10:30	きょうと かん ぶんしやう 京都に関する文章 を読む④			
			12:30	きょうと かん ぶんしやう 京都に関する文章 を読む⑤			
4	8 月 5 日 (土) Aug.5 (Sat.)		10:30	きょうと ぶたい ぶんがくさくひん あじ 京都を舞台にした文学作品を味わう①			
			12:30	きょうと ぶたい ぶんがくさくひん あじ 京都を舞台にした文学作品を味わう②			
5	8 月 7 日 (月) Aug.7 (Mon.)		15:45	きょうと ぶたい ぶんがくさくひん あじ 京都を舞台にした文学作品を味わう③			
			17:45	きょうと ぶたい ぶんがくさくひん あじ 京都を舞台にした文学作品を味わう④			
〔教科書 Textbook〕 ひつよう しりよう はいふ 必要な資料を配布する。							
〔その他の注意 Miscellaneous〕							
きょうだいせい もと 〔京大生に求めること〕							
1. 「京都の大学に通う大学生」という立場から、自分の経験や感想について述べること。							
2. グループワークに参加し、留学生と会話すること。							
3. 留学生からの質問に答えること。							

Schedule

10:30-12:30	Advanced Shirakata sensei
July 29 (Sat.)	IS-1
July 31 (Mon.)	21, North Wing Lecture Room
August 2 (Wed.)	21, North Wing Lecture Room
August 3 (Thu.)	No class
August 5 (Sat.)	IS-1

15:45-17:45	Advanced Shirakata sensei
August 7 (Mon.)	IS-1
August 8 (Tue.)	No class

IS-1: Room1, 1st floor, Yoshida International House

よしだ こくさいこうりゅうかいかん いっかい こうぎしつ
吉田国際交流会館 1階 講義室1

21, North Wing Lecture Room

よしだみなみそうごうかん きたとう にかい きょうほく 2 1 えんしゅうしつ
吉田南総合館（北棟） 2階 共北21演習室

フィールドトリップの様子 於、芦生研究林



Cultural Experience



ILAS

着物文化体験

浴衣着付け

ILAS
和菓子作り



KUASU

部活動体験

KUASU
錦市場見学
日本の商店街について



前期集中講義

京都サマープログラム 2023

受講生募集要項

開催日程：2023年7月29日（土）～8月10日（木）

科目名	多文化教養演習：見・聞・知@京都 受容から発信へ (本学 学部生、大学院生 対象)
Course Title	Seminar for multicultural studies: Watch, Listen and Learn @Kyoto -From accepting various cultures to transmitting your own
群	キャリア形成科目群
分野	多文化理解分野
使用言語	日本語及び英語
単位数	2単位
週コマ数	その他
授業形態	ゼミナール
開講期	2023年前期集中
曜時限	その他
配当学年	全回生
対象学生	全学部

プログラム紹介

Introduction of this program

京都大学では、世界のトップレベルの大学から学生の参加を得て、「京都サマープログラム」を開催しています。

12回目の開催となる本年度は、4年ぶりの対面形式で実施し、修了者には2単位が付与されます。

本プログラムは、海外学生と本学学生の共学を軸としています。参加者は、本学の学風および先端研究に触れ、日本の環境・農業問題、伝統、文化、歴史、政治、経済などを、共に学び理解する機会が得られます。また、本プログラムへの参加を通じて、本学学生はさらなる国際的活動への、そして海外学生は将来にわたる本学ひいては日本との関係への礎を築くことを目的に実施しているものです。

プログラム構成 Program Configuration

- ・学術講義…共学を軸として学際的なプログラムを象徴する講義群を提供します。
- ・日本語教授実習準備及び実習…日本語教授に関する準備講座を受講後、海外学生が学ぶ日本語学習科目において、日本語教授実習を行います。
- ・共同学習、討論会、最終発表…海外学生との共同学習を通して準備を行い、様々なテーマについて討論会を行います。
- ・実地研修、文化体験…地元企業や各種組織の協力を得て、実体験に基づいて学術講義で学んだ点を確認し、日本文化、社会状況、日本的組織の特徴等への理解を深めます。

海外学生は二つのサブプログラムに分かれます。

■ ILAS プログラム（主に英語使用。東アジア+欧米地域大学生等対象）

■ KUASU プログラム（主に日本語使用。アセアン諸国+北米地域大学生等対象）

本学学生はサブプログラム毎には分かれませんが、Discussion in English(ILAS)か発表準備(KUASU)、Cultural Experience (ILAS か KUASU)、Fieldtrip (ILAS か KUASU)、Discussion Session among Students(ILAS か KUASU)をそれぞれ選択することができます。

■ 共同実施セッション ■

- KU Introduction
- Conversation with KU students in Japanese
- Academic Lectures
- Japanese Teaching Practice
- Graduate School/ Lab Visit
- Completion Ceremony
- Farewell Party

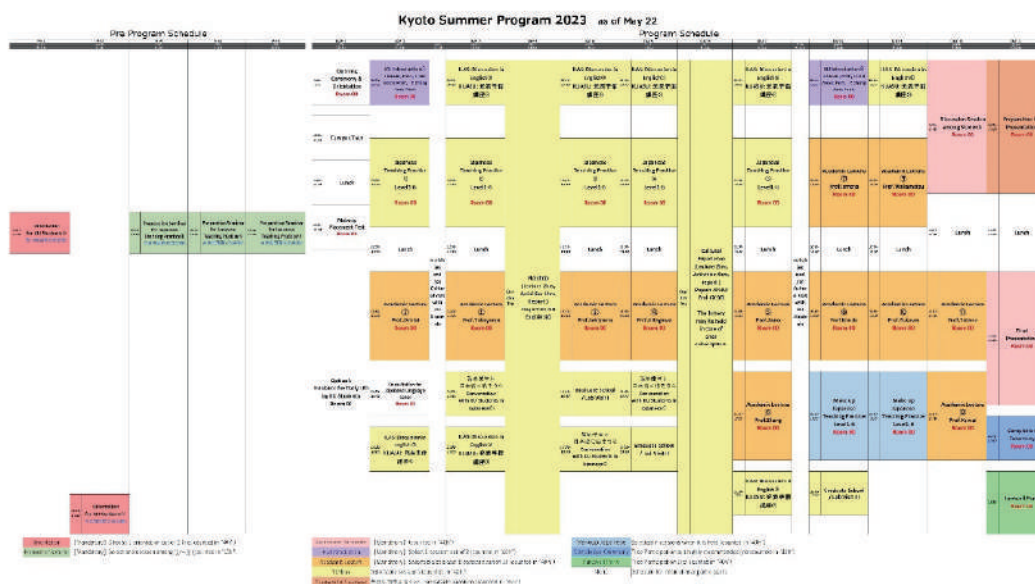
■ 単独実施セッション ■

- Fieldtrip (同一内容・開催日程別)
- Cultural Experience (別内容・開催日程別)
- Final Presentation
- ILAS □
 - Discussion in English
 - Discussion Sessions among Students (英語)
- KUASU □
 - 発表準備
 - Discussion Session among Students (日本語)
 - Preparation for Presentation

京都大学から、このプログラムに参加する受講生を募集します。世界の学生と共に国際的な学びをつくり上げていきます。意欲ある学生の応募をお待ちしています。

プログラム詳細 Program Details

Schedule for KU participants (tentative)



必修時間を含む、合計 40 時間以上の参加者を評価対象とします。

必修時間は以下の通りです。

6月29日(木)、7月3日(月)に行われるOrientation ()計2session中1回、7月4日(火)、7月7日(金)、7月14日(金)に行われるPreparation seminar for Japanese teaching practice ()計3session中1回、プログラム中のAcademic Lecture ()計12コマ中8コマ、KU Introduction ()計2コマ中1コマ、Discussion session among students ()、Final Presentation ()

本プログラムの各種活動がフィードバック期間と重なっていることに留意し、受講計画を立ててください。最新の時間割は[こちら](#)

応募について Application Procedures

プログラム期間 : 2023年7月29日(土)～2023年8月10日(木)

募集人数 : 京都大学に在籍する正規学部生、大学院生 30人
(申込人数が上限に達した場合は選考を行います。)

締切 : 2023年6月25日(日) 23時59分

成績評価の方法・観点：出席・参加態度 30%

小レポート 10% (日本語教授準備講座・実習又は学外研修・文化体験等)

討論会への貢献 30%

最終レポート 30%

以下の必修活動 (25 時間) を含む合計 40 時間以上の参加が確認できた学生を
評価対象とします。

- 本学学生向けオリエンテーション (Orientation for KU students)
計 2 session の内 1 回
- 日本語教授準備講座 (Preparation seminar for Japanese Teaching Practice)
計 3 session の内 1 回
- 学術講義 (Academic Lecture)①～⑫ 計 12 コマの内 8 コマ
- 大学紹介 (KU Introduction) 計 2 コマの内 1 コマ
- 学生同士の討論 (Discussion Session among Students) 1 コマ
- 最終発表 (Final Presentation) 1 コマ

本学学生向けオリエンテーション①～② (2 session 中 1 回参加必須) (合計 40 時間に含まれる)

①2023 年 6 月 29 日 (木) 12:10-13:05

②2023 年 7 月 3 日 (月) 18:30-19:25

日本語教授準備講座①～③ (3 session 中 1 回参加必須) (合計 40 時間に含まれる)

①2023 年 7 月 4 日 (火) 12:10-13:05

②2023 年 7 月 7 日 (金) 12:10-13:05

③2023 年 7 月 14 日 (金) 12:10-13:05

- 受講料は無料です。ただし Fieldtrip、Cultural Experience にかかる交通費、日曜日に予定されている Activities and/or Cultural Visit with KU students に参加する場合に掛かる費用は実費となります。(交通費、拝観料、食事代等)
- 受講申込みは以下の Google form より行ってください。

受講申込み「京都サマープログラム 2023」
<https://forms.gle/VC1S4UEAiUBGXMCW8>



- 英語力は問いません。

本件問合せ (問い合わせのみです。申込先ではありません。):

京都大学 京都サマープログラム事務局 kyoto_summer@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

主催:

京都大学国際高等教育院 (ILAS: Institute for Liberal Arts and Sciences)

京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU: Kyoto University Asian Studies Unit)

2023前期集中講義 多文化教養演習：見・聞・知@京「受容から発信へ」

5月31日版

京都大学
正規学部生
大学院生の
皆さん

プログラム紹介 開催決定！

留学したい、
世界を知りたい、
日本を理解したい、挑戦したい、
その第一歩となるプログラム

2日とも同一内容です。
日時 6月12日（月）12:10-13:00
6月15日（木）12:10-13:00
場所 吉田南国際交流会館1階 講義室2
Zoom、教室会場から参加が可能です。
詳細 KULASIS>information>留学
※説明会に参加していなくても、申込可能です。

京都サマープログラム2023 受講生募集

選択参加制（一部必修活動を含む）・2単位付与・無料

開催期間

2023.7.29（土）－ 8.10（木）11日間 [対面実施]

プログラム内容

①多彩な講義群 ②世界トップ大学の学生との学び 等

環境、世界情勢、日本の歴史と文化...その道の第一人者から、
世界と、世界の中の日本を知る、多彩な講義が提供されます。

講師予定者例（全12科目）

高等研究院 副院長・特別教授

「気体の時代の科学技術－「かすみ（水蒸気、
空気）」を食って生きることが可能か？－」

北川 進氏

トムソン・ロイター引用栄誉賞（2010年）、紫綬褒章（2011年）



京都産業大学 現代社会学部 教授
京都大学アジア研究教育ユニット 初代ユニット長

「日本のフェミニズム運動はどこがユニークなのか
－グローバルジェンダー史の重層的な多様性」

落合 恵美子氏



野生動物研究センター 助教

「ボノボのメス優位・中心社会の
秘訣を探る」

徳山 奈帆子氏



世界の15を超える国と地域のトップ大学から、40名近い学生が参加。
環境、ジェンダー、教育福祉といった、様々な社会テーマについて
京大生とディスカッションを行います。

海外参加大学例（過去実績含む）

東アジア

北京大学、国立台湾大学、香港中文大学、
延世大学校

北米

カリフォルニア大学サンディエゴ校、ジョージ・
ワシントン大学、コロンビア大学、スタンフォード大学

欧州

ハイデルベルク大学、ウィーン大学

ASEAN

ベトナム国家大学ハノイ校、シンガポール国立大学、
チュラロンコン大学、マヒドン大学、
インドネシア大学

募集概要

京都大学からの受講生を募集中です。受講生は、プログラム内の講義やディスカッションに参加する
他、来日する海外学生を対象とした日本語学習科目において日本語教授実習を行ったり、共同学習や
実地研修、文化体験を行います。詳細は右申込フォーム内の[募集要項]をご確認ください。
修了者には2単位が付与されます。英語力は不問です。

締切

2023年6月25日(日) 23:59

本学学生向け受講申込み「京都サマープログラム2023」
<https://forms.gle/VC1S4UEAIUBGXMCW8>



主催：京都大学国際高等教育院/京都大学アジア研究教育ユニット

第一部
京都サマープログラム 2023
(ILAS)

《主催》



京都大学
国際高等教育院

《共催》



KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT
京都大学アジア研究教育ユニット

8. 京都サマープログラム 2023(ILAS プログラム)

8.1 設立の経緯と目的

今年度(2023 年度)、本プログラムは 12 回目の実施を迎えた。大学間学生交流協定校である北京大学、香港中文大学、国立台湾大学、延世大学校、ウィーン大学、ハイデルベルク大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校、ジョージ・ワシントン大学、KCJS 加盟大学（タフツ大学）、合計 9 大学より選抜された 24 名を短期交流学生として受け入れた。同時開催の KUASU プログラムでは 4 大学より 14 名を受け入れ、合わせて 13 大学より 38 名の参加となった。

今年度は、2019 年度以来の 4 年ぶりの対面での開催となった。その間の 2020 年度～2023 年度は、新型コロナウイルスの影響で、オンラインでの開催を余儀なくされたが、継続はもちろん、オンラインプログラムの利点を生かしてより多くの学生、より多様な国地域の参加を得られたことは特筆すべきであろう。こうした経験を踏まえながら、今年度、対面での開催を復活させ、本学学生 42 名（内、受講生 30 名、ILAS 学生リーダー 7 名、KUASU 学生リーダー 5 名）が参加した。以下、本来の本プログラムの設立の経緯と目的を今一度省み、検証の一助としたい。

本プログラムは、前身の北京大学学生のための「京都サマースクール」(2012 年開始) が学生 15 名を受け入れたことに遡る。当初、担当者らには次の問題意識があった。「日本と中国は、歴史的・文化的に深く交流してきた大切な隣国であるとともに、経済的にも補完し合う相互依存度の高い関係を築いてきた。しかし、近年は政治的な影響から双方の国民感情は悪化の一途を辿っているといえる。・・・(中略)・・・その根底には日中の人的な相互交流が十分に行われず、互いの差異への理解の乏しさ、対話の基礎となる、国を超えた個々人の信頼関係の希薄さが見え隠れする。一方で、隣国である日本に対する関心は必ずしも低いものではない。本稿の報告者らが中国のトップ大学で行った調査においても、日本留学に関心を持つ学生が一定数存在することが分かっている。しかし、彼らの多くは奨学金、学費、言葉などの問題から、最終的に日本への長期留学を選択肢から外してしまうことが多い[原文注：韓立友・河合淳子(2012)「日本の大学における留学生受入れ体制の問題点及び解決策の探索：京都大学におけるアドミッション支援オフィス導入の背景と効果」『京都大学国際交流センター論攷』第 2 号：37-55.]。こうした現状から、両国関係を永く維持・発展させるために、将来を担う中国の若い世代に少しでも日本の実像に関する理解を深めてもらいたいと考え、まずは短期受入れプログラムを実施するようになった」⁴。上記の引用に見られる状況は、一時の政治的関係に左右されない、人的な相互交流の必要性そして個々人の信頼関係の構築の重要性を示している。そのような中で、2019 年度までの本取組(第 1 回～第 4 回北京大学サマープログラム、規模を拡大し改称して実施した第 5 回～第 8 回「京都サマープログラム」) は大きな成功を収めてきた。参加学生たちは、日本への理解を深めると共に、ソーシャルネットワーキングサービス(SNS) 等を通じて、周りの人々にもその情報を発信し、参加学生や彼らの情報に触れた学生の中から、日本への長期留学を志す学生が出てきていた。

⁴ SEND プログラム 2015 年度受入実施報告書「京都サマープログラム二〇一五」p.6.

その後、より充実したプログラムを実現すべく、2016 年から募集先を拡大し、北京大学と同じく大学間学生交流協定校である延世大学校(韓国)、国立台湾大学、香港中文大学の計4校を対象大学とした。2018 年には、東アジアから全世界に範囲を拡大する端緒として、ドイツのハイデルベルク大学を対象校に加え、初めて2名の学生を東アジア以外から受け入れた。2019 年度はハイデルベルク大学の事情によって派遣学生の推薦が行われなかったため、本学のドイツの協定校に対して本学の欧州拠点を紹介して参加者を募り、ゲッティンゲン大学、ミュンヘン工科大学、ボン大学からの参加を得た。そして2020 年度春に4大学—ジョージ・ワシントン大学2名、カリフォルニア大学サンディエゴ校5名(ILAS2名、KUASU3名)、タイ・マヒドン大学5名、ウィーン大学2名—を迎えることができた。北米にはこれまで拡大できていなかったが、北米拠点の尽力によりこれが実現した。また、ウィーン大学は2019 年10月に戦略的パートナーシップ⁵を締結した大学であり、学部レベルから研究者まで交流の一層の活性化が望まれている。当プログラムは、戦略的パートナーシップの包括的な交流の基礎ともいえる学生交流を担うプログラムとしての役割を果たしたいと考え、前回からの受け入れとなった。また、タイ・マヒドン大学は数年前に本学学生約20名を派遣したが、先方からの受入れが実現していなかった。双方向交流の準備として2020 年度のスプリングプログラムから5名の学生を受け入れた。2021 年度は新規大学として欧州2校、アフリカ2校、KCJS 加盟大学の4大学が参加、合計16大学より選抜された48名を短期交流学生として受け入れた。2022 年度はさらに、カールスルーエ工科大学、フロリダ大学、スタンフォード大学から学生を受け入れたほか、新たに個人応募枠を設け、インド工科大学グワハチ校、トロント大学からの学生参加があった。第1回から第12回の今年度まで、ILAS プログラムに参加した海外学生は合計321名にのぼる。

当プログラムでは、多様な文化的背景を持つ学生が集うことにより、海外学生はもちろんのこと、本学学生にとってもより豊かな教育環境の実現を目指している。このことは、将来、京都大学が国際的な短期留学の拠点、ないしはアジアの文化、社会に通じ、その発展に寄与できる人材の育成拠点としての存在感を高めることにも繋がると考えるためである。2021 年度より、これまでサポーターに限られていた本学学生の参加を、受講生枠を設けたことで、より一層促進することができた。なお、オンラインプログラム時は本学受講生の人数制限を設けなかったが、今年度は30名とし、選抜を行った。また、本プログラムの特徴の一つに、地域との連携がある。第一回プログラム開始前の2011年に京都府に対し、短期留学生受入れ事業を京都大学と協働で行うプログラムの提案を行った。こうした経験から、地域との緊密な協力体制は、本プログラムに「京都ならではの」要素を加える非常に重要なものであると捉えてきた。

3回にわたるオンラインプログラムを成功裏に挙行し、今年度の対面開催に復帰することが出来たのは、以上に述べたこれまで培ってきた各大学とのネットワークと、プログラム実施に係る経験があったためである。

⁵ 戦略的パートナーシップとは、京都大学の大学間学術交流協定校の中から、これまでの研究交流のさらなる活性化に加え、新たな学術分野での共同研究や人材の流動性の促進等を目指して両大学の連携の強化を学長レベルで約束して締結されるものである。本学は2019 年10月に、ウィーン大学とボルドー大学と戦略的パートナーシップを締結している。

8.2 ILAS プログラムの特徴

前述の通り、京都サマー/スプリングプログラムでは、2つのサブプログラム(ILAS プログラムと KUASU プログラム)を共同で実施してきた。多くの共通部分があるが、ここでは ILAS プログラムに特徴的な点について述べる。それらは、(1) 理系を含む多様な専門分野の学生の受入れ、(2) 教授言語が英語であること(3) 最終プレゼンテーション(個人発表)(4) 学生交流である。

まず(1) についてであるが、ILAS プログラムでは、海外学生の出身国・地域や専門分野の多様性を確保することに努めている。募集要項には、日本語・日本学専攻以外の学生、日本への留学経験がない学生、日本語学習経験がない学生を優先する旨、明記している。また(2) の通り、設立当初より教授言語は英語である。(1) とも関係するが、英語でプログラムを実施することで、これまで日本に留学する機会がなかった、あるいは日本留学を深く考えることのなかった世界のトップ大学の学生に、それへの関心を喚起するためである。結果的に(1)(2) により、多様な背景を持つ学生の受入れにつながっていると評価している。

また(3) 最終プレゼンテーションは、グループで行う KUASU プログラムとは異なり、個人での発表となる。各学生がプログラムの中で学んだことのうちに関心を持った題材について、本学学生との議論や個々で文献調査などを行い、理解の深化に努め、それを発表するスタイルをとっている。今年度のプログラムにおける発表タイトルは以下のとおりである。(発表順)

KSPNo.	ニックネーム	大学	Final presentation title
101	Coco	Peking University	Changes in women's attitudes toward being privileged
102	Winsome	Peking University	The comparison between Japanese garden and Chinese garden
103	Yeping	Peking University	Comparison between Ancient Chinese Dress and Kimono
104	Byron	Peking University	The railway system of Kyoto and Osaka
105	Anthony	Chinese University of Hong Kong	Bipedalism of Human
106	Horace	Chinese University of Hong Kong	On the similarities and differences between Japanese and foreign languages e.g. Chinese
107	Yoyo	Chinese University of Hong Kong	Ginkgo tree: one of the most common roadside trees in Japan
116	Laura	National Taiwan University	The Power Of Connection
108	Ron	Chinese University of Hong Kong	Ryukyuan separatism and their struggling national identity

109	Colin	Chinese University of Hong Kong	What additional knowledge can be gained by visiting The Kyoto University Museum following this program?
110	Hedda	Chinese University of Hong Kong	The possibility of the reappearance of female Tenno in Japan
111	Ai	Yonsei University	Sustainable Development
112	Su	Yonsei University	Japanese Stagnation: Necessity to Shift Perspectives
113	Tricia	Yonsei University	Cultural Linguistics - Language and Society
114	Jiseok	Yonsei University	The things I gained in Kyoto
115	Vincent	National Taiwan University	Japan's unique monetary policies
117	Wei	National Taiwan University	Comparison of the educational forests belonged to Kyoto University and National Taiwan University
118	AR	University of Vienna	Academia and Activism
119	Paddy	Heidelberg University	What we missed at Ashiu Research Forest
120	Lino	Heidelberg University	Religious Diversity within today's Japanese Society
121	Lela	Heidelberg University	Unique encounters of Japanese made possible by this program
122	Michelle	University of California, San Diego	Socially Dead to Socially Alive
123	Gio	George Washington University	How KSP changed what I thought I knew about Japan
124	Nathan	Tufts University	Importance of Old-Growth Forests in the World's Biomes

最後に(4)の学生同士の交流についてである。プログラムの柱の一つとして学生同士の議論の機会、特にできる限り対面に近い環境で密度の濃いコミュニケーションの場を提供することを重視しているのは ILAS プログラムも KUASU プログラムも同じである。KUASU プログラムは、本学学生と海外学生が日本語で共同発表を行うという目標があり、それに向かって準備する機会が重要な位置を占めているが、ILAS プログラムでは、また別のアプローチを模索している。それは、インフォーマルにもフォーマルにも、対話と議論の機会を毎

日持つことである。今年度も、このインフォーマルな議論の部分を、教員の指導の下、学生リーダーが中心となって企画・運営を行う体制をとった。7名の学生リーダーが分担し、30名の本学学生の協力を促しながら、連日活気のある活動を展開した。

8.3.参加学生報告

Final Report

Coco

KSP Number: 101

Peking University

1. General impression about the program

I'd like to use 3 key words to summarize my general impression: connection, inspiration and appreciation.

First is connection. I still remember what Kawai sensei has said on the opening ceremony. To make more friends, to have fun. On the last night, When everyone was still reluctant to leave after the fireworks by the Kamogawa River, I think we all did a good job of fulfilling our teacher's wishes. In fact, I was originally an introvert, and before the program started I felt very apprehensive, could I become friends with students from other countries? Would I be able to get along with my new friends? Can I really build deep friendships in just 15 days? Looking back today, these concerns were unnecessary. For the first time, I felt how amazing the connection between people is. Even though we had different cultural backgrounds, different majors and different ages, but we shared common concerns about social issues in our discussions, and our consistent curiosity about Japanese culture and language in our lessons, which allowed us to feel connected to each other and make precious friendships. Whether it's studying or playing together, it's become one of my most cherished memories.

Second is inspiration. In this program, Kyoto University has provided us with many excellent academic resources and cultural experiences, which are very rare and valuable. I participated in all the lectures and discussions. As a medical student, the content of the lectures and discussions could hardly be related to my specialty, but I still gained a lot of inspirations and thoughts beyond my own limitations from each lecture. Also, during the field trip, I was impressed by the effort in protecting the natural environment, while generated new thinking on topics such as climate change and biodiversity. For culture experience, the experience of wearing kimono and making wagashi gave me the most intuitive experience of Japanese culture, which made me interested in the cultural differences between China and Japan

Therefore, finally is appreciation. I have many thanks to KU, to this summer program, to teachers, and all the participants. Thanks to KU for organizing such a summer program, which provides a platform to get in touch with the cutting-edge knowledge of the profession and communicate with many outstanding students. I would also like to thank all the teachers for their efforts in making these 15 days of study run smoothly. And thank all the members for their active participation, working hand in hand to create many wonderful experiences.

2. privilege in gender equality

In the discussion which topic is gender, there is a question that inspired me to think more: How do you feel about women being privileged in the process of achieving gender equality? When discussing this question, I figured out that there might be some change in women's attitude

towards such privilege, so after that, I set a social etiquette, Lady First, as an example to confirm my guess. I explored the origins, the changing attitudes, and the reasons behind lady first.

The most common theory is that lady first has its roots in Western chivalry. According to the theory in Norbert Elias's book *The Civilizing Process*, this set of norm is a continuation of the patriarchal power structure, also related with the structural changes in society. Traditionally, aristocratic male in the West were trained in "Lady First" etiquette because, on the one hand, it was expensive enough to be proud of. On the other hand, some noble female were important part of the state power at that time. Noble male learned the etiquette of getting along with noble female, helps them to get close to power. But for most of the male from civilian backgrounds, they had to support the whole family by working hard. In such a general environment, male generally discriminate against female, thinking that they are lazy and always drag themselves to earn money to support their families. What's more, they hardly have the time and energy to help female do such small things as making seats or passing tea. So the "lady first" culture belonged to the aristocracy.

However, now women's attitudes have changed a lot. The current dictionary definition of Lady First is a polite invitation for a woman to do something first. There is also debate based on whether lady first contribute to gender equality, which reflects that with the advancement of society and feminism, women started to re-examining their situation and challenging patriarchy. They find bona fide sexism covers up the oppression of patriarchy, and continues and affirms patriarchy's values that marginalize and instrumentalize women.

As the etiquette between Western aristocrats in the past, Lady first implies two important premises: first is the value of female which may bring the male considerable benefits and influence; second is male have far more advantages in social status than female, so that while cooperating with them, male can play a greater influence or even a restraining role in female's decisions and actions. So much of the value of a female at that time also came from her ability to serve the purposes and needs of others as a pawn. From such essence of lady first, it's easy to figure out that it has never been about giving privilege to women in every way, or giving privilege to women according to their wishes. In fact, it is a seemingly benign differential treatment of female stereotypes based on patriarchy. The underlying logic of lady first is to view men as natural protectors and women as natural caretakers. Under the friendly cloak of bona fide sexism, women will be more likely to accept the patriarchal system containing malicious sexism because they are treated seemingly more kindly.

Attitude change may be a sign of awakening. As language has its unique power, feminism has evolved to a point where we should have more subtle thinking about affirmative action, rejecting bona fide sexist language, and bona fide sexist behavior as well.

Final Report

Winsome
KSP Number: 102
Peking University

1. General impression about the program

This program provides me with a wonderful opportunity to delve into Japanese culture and lifestyles, as well as the global community.

During this program, I have the privilege of spending two weeks in Kyoto, not as a mere tourist, but as a student. This allows me to truly immerse myself in the essence of Japan and gain insight into the nation's way of life. Engaging in cultural activities and experiential learning, such as attending the fireworks night, participating in the summer festival at Kamo Shrine, and learning the art of making traditional Japanese sweets, has deepened my understanding of the country through personal experiences. Additionally, listening to the academic lectures given by professors has provided me with valuable insights from professionals. I consider this opportunity to be extremely valuable.

One of the highlights of this program is the chance to meet outstanding students from around the world and engage in discussions where we share insights and opinions on various topics. I am particularly grateful for the opportunity to engage in serious conversations on subjects like gender, economy, innovation, and the environment. The space provided by Kyoto University has been immensely enjoyable for me. Interacting with individuals from diverse backgrounds has broadened my horizons, and I am truly thankful to this program for offering this opportunity, especially in the aftermath of the pandemic when global connections were disrupted.

Moreover, the Japanese language lessons offered in this program have been instrumental in helping me explore a new culture, as language is the gateway to understanding a culture deeply. After attending these classes, I am now capable of reading Japanese news articles and books independently, without assistance. I believe that this newfound ability will greatly aid me in my future research and career.

The program has taken me to numerous places and provided me with unique experiences exclusive to Kyoto University. I would like to express my heartfelt gratitude to all the staff and students at Kyoto University for their dedicated efforts. Overall, I consider this program to be an unforgettable journey that I will cherish dearly.

2. Gender problem in Japan

I have always had a keen interest in gender issues, and I've heard that Japan has a significant gender gap, resulting in a notable disparity in social status between males and females. My initial impression of the gender ratio at Kyoto University was that there seemed to be more male students than female students. Upon further inquiry, I learned from Kyoto University students

that only 20% of the university's students are female. This came as a surprise to me, as the gender proportion at my home university is nearly equal.

During one of my Japanese lessons, my teacher shared news about Japan ranking 125th out of 146 countries in terms of gender inequality. This ranking took into account factors such as political engagement, economic participation, and school enrollment, revealing a significant imbalance. Engaging in discussions with Kyoto University students, I had the opportunity to hear the perspectives of young women. Unsurprisingly, they felt that their opportunities and capabilities were undervalued, which I found to be a lamentable issue. I came to realize that while Japan still holds traditional views regarding gender, with the belief that males are more capable than females, the gender gap in Japan today is much wider.

As I delved deeper into this topic, I discovered that the stereotypes between genders did not exist in traditional Japan. As OCHIAI Emiko mentioned in an academic lecture, homosexuality was prevalent, and women were economically active and had inheritance rights in ancient Japan. The gender balance was lost during the process of modernization. Additionally, while visiting history museums, I learned that women could hold positions of authority and become renowned scholars in the past, indicating that the gender gap was not as pronounced as it is now. This revelation surprised me and made me reflect on the current trends.

I have contemplated potential solutions to address this issue in Japan. In my view, gender inequality is deeply rooted in societal values and stereotypes. Therefore, I believe that education is crucial in bringing about change. Upon reflecting on the news, I considered that having a female Tenno (emperor) or restoring women's status within the imperial family could serve as powerful symbols of the country's commitment to addressing gender issues.

Final Report

Byron

KSP Number: 104

Peking University

First of all, I want to show great gratitude to all the KU leaders, teachers and organizers of this great summer program for providing us with a fantastic experience in Japan, showing us various unique Japanese culture and different aspects of Japanese society. In fact, it is my first time to visit Japan and I'm very delight to learn about Japan through this program.

In study aspects, the program offers Japanese classes in five different levels and I am in intermediate one. During my high school time, I have learned Japanese by myself through the Standard Japanese textbook and commanded most of the grammar. In addition, I continually practiced my Japanese reading and listening skills by reading manga and watching anime. However, I hardly have chance to speak Japanese. Focusing on conversation and practicing

speaking skills, the teacher of the intermediate one class encourages our international students to communicate with the Kyoto University students and then talk aloud own opinions in the public, which lets me become fully enjoy in this study pattern. After the short ten hours of practice, I'm much more proficient in Japanese and can speak rather fluently to normal people like the staff in convenient store and waiters in the restaurant.

What's more, the program has a variety of other meaningful activities. For instances, the academic lectures introduce many interesting topics ranging from Japan's economy to its education characteristics, broadening my horizon and enlarging my knowledge system. But the most impressive one in my mind is the cultural experience. On that day, we took the beautiful yukata and walked to gorgeous Japanese style garden. The yukata really looks nice but also was really hard to wear. In the afternoon, we made the delicious confectioneries with the shape of Sakura and another flower.

But I think the most precious thing I gained from this program are these friends, from the ILAS or from the Kyoto University. We've done a lot of things together, having dinner in restaurants around school, going to see the firework festival, visiting the aquarium in Osaka, going to the karaoke on the last day of the program. I think the precious memory is really a great treasure for me and I'm so glad I applied and finally participate in this great program.

And the topic I want to talk about is the one I present on the last day: The differences of railway system between Japan and China.

Railway systems serve as vital components of a country's infrastructure, facilitating efficient transportation and contributing to economic development. Japan and China, two influential Asian nations, boast extensive railway networks, yet they differ significantly in terms of technological innovation, historical development, and operational characteristics.

Japan's railway system is renowned for its efficiency, punctuality, and cutting-edge technology. The Shinkansen, or "bullet train," introduced in 1964, revolutionized rail travel with its high speeds and unparalleled safety records. The Shinkansen's magnetic levitation technology (Maglev) pushes the boundaries of speed, potentially reaching up to 375 mph. This system has played a crucial role in connecting major cities, reducing travel times, and boosting regional economies. The integration of efficient ticketing systems, well-designed stations, and impeccable maintenance further underline Japan's dedication to quality rail service. The close collaboration between the government and private companies ensures continuous improvement and innovation, making Japan's railway system a global benchmark for excellence.

In contrast, China's railway system showcases the nation's ambition and rapid modernization. Over the past few decades, China has undergone a railway renaissance, constructing a vast high-speed rail (HSR) network that is now the largest in the world. The Chinese government's emphasis on infrastructure development has led to the creation of remarkable HSR lines, such as the Beijing-Shanghai line, boasting speeds up to 217 mph. China's railway expansion serves both economic and social purposes, connecting remote regions, spurring urbanization, and promoting tourism. The state-driven approach has allowed China to achieve

rapid growth in its railway sector, albeit sometimes with concerns over project costs, safety standards, and environmental impact.

Historical context plays a significant role in shaping the differences between the two railway systems. Japan's railways have evolved over a century, with meticulous attention to detail and incremental advancements. The railway culture is deeply ingrained in the society, contributing to the high levels of service and efficiency observed today. In contrast, China's recent railway expansion has been a response to its rapid economic growth and urbanization, resulting in a more ambitious and centrally planned approach.

Operational characteristics also differentiate the two systems. Japanese railways prioritize precision and punctuality, with the average delay of Shinkansen being a matter of seconds. This culture of reliability stems from a strong work ethic and meticulous planning. On the other hand, China's vast network faces challenges in maintaining similar punctuality due to capacity constraints, high passenger volumes, and occasional technical issues. However, China's system excels in sheer scale and connectivity, facilitating long-distance travel and fostering economic integration.

In conclusion, the railway systems of Japan and China diverge significantly in terms of technological innovation, historical development, and operational characteristics. Japan's focus on precision, innovation, and efficiency has made its railway system a global benchmark, while China's rapid expansion of high-speed rail showcases the nation's modernization and ambition. Both systems contribute uniquely to their respective countries' economic development and societal progress, demonstrating the pivotal role of railways in shaping a nation's infrastructure and connectivity.

Final Report

Anthony

KSP Number: 105

The Chinese University of Hong Kong

1. General impression of the program

Throughout the program, I have had a lot of valuable cultural experiences and acquire knowledge of other professional fields, such as primatology, agriculture, economics and so on. Considering the academic lectures, they were carefully designed to shed light on professional topics using layman's terms. I particularly enjoyed the lecture on primatology, delivered by Professor Tokuyama. Before attending the lecture, I didn't know that animals societal structure can be classified as patriarchal and matriarchal as I thought animals are not as intelligent as human beings. It turns out that the inherent behaviour allow the bonobos to develop a matriarchal society. I was deeply impressed by the idea that a short ovulation interval reduces competition between males and curtails violence. The idea that breast-feeding delays ovulation and leads to infanticide also intrigued me. In short, although there were lectures that I found not as interesting, I enjoyed the lectures in overall and appreciate the effort by the professor very much.

For the fieldtrip, it was an extremely treasurable experience. Without the staff and the program, I would never have the chance to visit such a remote area and be introduced to the history and current situation of the forest. The staff told us that the tree had been planted to provide wood for construction but were left there finally due to the fact that imported woods are far cheaper, posing harm to the habitat. We have learnt from history that comprehensive and prospective consideration should be done before making any changes on the environment. The field trip is quite informative.

As for the cultural experience, it was very fruitful. We wore kimono and made Wagashi together, experiencing what people back then wear and eat and connecting with Japanese people back then. While we were wearing kimono, the staff took great care of us and provided us with help, making me feel privileged. Overall, the program, the place and most importantly, the people have given me a great impression. The program is carefully considered. The place is well-preserved throughout history, living up to its fame. The leaders, teacher of the Japanese class and the staff are expansive and kind. The program is perfect and I couldn't think of a single suggestion. I hope that quality of it can continue in the future and inspire more young minds.

2. Bipedalism

In the second lecture on matriarchal structure of Bonobos, Prof. Tokuyama said that many theories regarding differences between human beings and animals were once established but were overthrown later. For instance, having personalities was once believed as a unique feature of human beings. However, it was found out that chimpanzees share 60% of human personalities. Another example is communication. It was believed that communication is unique to human beings but it was found out that human babies and bonobos have functional similarities in their own gestures.

At that time, bipedalism sprang to my mind. Meaning a type of locomotion which involves the two lower limbs, bipedalism might be a way to distinguish humans from animals. I became interested in Bipedalism. As I searched for more information, I quickly found my guess to be wrong. A lot of primates can stand on their feet and walk on their two feet in a short period. Therefore, bipedalism is not a difference between humans and animals.

Although my initial guess was proven wrong, I started to be intrigued by the reasons why humans are so good at walking on their two feet. It is said that average person can walked for 34 km continuously in 7 hours per day after receiving training. It begs the question of why bipedalism is so efficient for us.

There are a lot of reasons. Anatomically, humans have their ilium of hip oriented on the sagittal plane and therefore, providing a large surface area for the attachment of gluteal muscles. The gluteal muscles allow abduction of legs for balance and prevent hip bone from tilting to the unsupported side when one leg is lifted during walking as the gravity causes our body to tilt.

Besides, we have a short ilium, hence preventing the injury of spinal nerve root by ilium during walking and making a S-shape body possible for shock absorbing. All these adaptations save energy while we are walking, improving the efficiency of walking for humans. There are more reasons to the high efficiency and I will continue to research on it in the future.

To conclude, bipedalism is not a unique feature of humans. Many adaptations allow us to walk efficiently and it shouldn't be taken for granted. It reminds us how treasurable it is for us to be healthy.

Final Report

Horace

KSP Number: 106

The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

I believe this is one of the best summer programmes I have ever joined. The programme in general was so much fun and I met great people from all around the world. The 2-week schedule was tightly packed and we learned a lot not only from the academic lectures, but also from the Japanese classes, English discussions, field trips and cultural experiences. On the first day of check in to Oyado Ishicho, I was super terrified since this was my first time travelling alone. Though Hong Kong is near to Japan, but I felt so distant from my family and friends, and felt so lost and homesick while trying to adapt to a new, unfamiliar life. Luckily I met really great roommates, all 4 of us shared the same room and slept on the Tatami mat together. We had great chemistry. We even made friends with a student leader from Kyoto University and he brought us around in Osaka during the free day. We went to the largest aquarium and had beef shabu-shabu. I just had so much fun with these guys. Besides my roommates, my classmates from other universities were also super nice and I got to know them during the programme. The Kyoto University student leaders also made us home. I really enjoyed chatting with them and knew more about the cultural differences between Hong Kong and Japan – they were so shocked to discover that Mandarin(spoken in mainland China) and Cantonese(spoken in Hong Kong) were two completely distinct languages, they were even more shocked when knowing that Cantonese has 9 tone inflexions. Since I was learning both Japanese and German, it was such a great opportunity for me to practice both languages with friends met from Japan and Germany, they were super nice and patient while correcting my mistakes. It was also cute that some Japanese I knew were learning Mandarin as they have exchanged to Taiwan before, so I taught them in return. In general I had so much unforgettable moments in the programme and made so many friends. I hope I can still keep in contact with them after I came back to Hong Kong. I sincerely recommend this programme to future participants!

2. The similarities and differences between Japanese and Sino-languages

I was quite intrigued in the similarities and differences between Japanese and the languages I have known (Cantonese, English and Mandarin). Before coming here I only knew that Japanese also use Kanji with some slight variations. It appears that Japanese is a very complicated language system, around one-third composed of Hiragana, one-third composed of Katakana and the rest is Kanji. When my Osaka friend brought us to the aquarium I asked him what is the Japanese for otter, he replied かわうそ／川獺, but he did not know the Kanji. Just when I thought Katakana was only for English-influenced words, I saw the Japanese for rubbish can be written in both ごみ／ゴミ, apparently some words can be written in both Hiragana and Katakana. Moreover, some Japanese words do have highly similar pronunciation compared to Cantonese or Mandarin. For example when I went to the hot bath it was written 大浴場／だいうくじょう. Not only the same Kanji was used, but the consonants of the three characters are highly similar. Other examples I found from Kyoto University are 図書館／としょかん or 食堂／しょくどう. These two examples are interesting, for the former one, the first Kanji 図 is unique for Japanese, since in Cantonese (traditional Chinese) it is written as 圖書館, and in Mandarin (simplified Chinese) it is written in 图书馆. This implies that Japanese Kanji is a mixture of traditional Chinese characters and its unique Japanese Kanji characters. Other examples I found on the street are for example the Kanji for pharmacy 薬局／やっきょく and at the parking lot it is written 満／まん. The Kanji for pharmacy also includes a unique Kanji character 薬, in Cantonese it is written as 藥局 while in Mandarin it is written as 药局. These are all small details and do not matter a lot for my Japanese learning, but I do find them interesting as the linguistic legacy of the Japanese language.

Final Report

Yoyo

KSP Number: 107

The Chinese University of Hong Kong

1. General impression of the program

The Kyoto summer program is a great program that makes one grow. Keeping in mind of the words given by Prof. Kawai during the opening ceremony, I have undoubtedly gained many by making friends and study hard with other participants as well as Kyoto university students.

It is not a harsh program with packed schedule, providing sufficient free time for us to mingle with one another outside campus and sightsee around the city. At the same time, through academic lectures, free discussions, fieldtrip, and Japanese classes, I learned hard knowledge as well. I like that the program stressed on interactions among us, the participants, the Kyoto university students, and the professors. Chatting with and playing with Japanese students as well as other participants are the funniest and one of the most efficient ways to understand our respective cultures, social issues in respective countries and our school life. This sort of cultural interactions is not only cherished, but also imprinted in my memory. Horizons are broadened after spending 2 weeks with smart students from all around the world. After each academic lectures, we are

encouraged to raise questions, not only stimulating us to mull over the lectures, but also facilitate interactions among students and professors. This allows us to learn more at a short period of time.

This program has also deepened my understanding about culture of Japan. The cultural experiences and the activities held by ILAS and KUASU leaders have granted me first hand experiences of Japan's culture. The cultural experiences showcased the traditional Japan's culture like wagashi, while the leaders led us to experience their everyday life in Kyoto, like jankara, firework along the Kamo river and summer festival. All the above makes me have a closer look at Japan's culture and slowly fall in love with it.

2. Comparative study of the roadside trees in Japan and Hong Kong: The Ginkgo tree V.S The Chinese Banyan tree

In the field trip to the Ashiu Research Forest I was told that many trees were in fact planted by humans decades ago, trying to preserve the ecosystem of the forest. Days after the field trip, I strolled along the road outside campus, where arrays of Ginkgo Trees are planted. Questions then sprang out of my mind: why the roadside trees in Kyoto are mostly ginkgo trees? Are they planted to protect or enhance the ecosystem and environment? Upon research, I found out that roadside trees are planted to enhance urban environment. Also, there are criteria, which differs in different places with different climates to be chosen as roadside trees. Speaking of climate, I immediately compare the heat in Kyoto with that in Hong Kong. Thus, I think it will be interesting to compare the common roadside trees in Japan and Hong Kong, reflecting our respective climates and environmental issues. Below are my findings.

Ginkgo trees and The Chinese banyan tree have different features. Ginkgo trees are deciduous tree that shed leaves in the Autumn while the Chinese banyan trees are evergreen. Ginkgo trees only have deep roots down below the ground, but Chinese banyan has both deep roots and long, thin, dangling aerial roots. Ginkgo's leaves are also smaller than that of the Chinese banyan.

From the above differences we can observe the differences between HK and Japan's climate. In terms of temperature: Being a deciduous tree, the Ginkgo are mostly planted in temperate regions. For the Chinese banyan, an evergreen, it is mostly found in tropic and subtropical region. This shows that Japan is in the temperate region while HK is in the subtropical region.

In terms of humidity, as the aerial roots can thrive better in high humidity (70-100%), there are more Chinese banyan trees in HK, which has an 80% annual humidity while Japan has a 69% annual humidity. The size of leaves also indicates the humidity difference. In Japan, where it is relatively dryer than HK, the Ginkgo have smaller leaves than the Chinese Banyan as smaller leaves can reduce evaporative cooling.

Besides, there are similarities between the two trees as well as the climates of the two places. Both Ginkgo tree and the Chinese banyan tree have deep roots. As deep roots provide strong anchor support for trees to resist strong wind, this indicates that both Japan and HK will frequently experience strong wind like typhoon. Indeed, the average typhoon that Japan will experience is 17 times a year while HK will experience 8 times per year according to the world data info.

Apart from reflecting the climate of the places, roadside trees may indicate the environmental problem the places are facing. In fact, both Japan and Hong Kong are suffering from unprecedented increase in temperature in the summer. Urban heat effect is the major culprit instead of global warming. This suggests why both Japan and HK plant Ginkgo and The Chinese banyan trees as roadside trees both of which have large tree crowns that have proven cooling effect and urban microclimate adjustment.

Final Report

Ron

KSP Number: 108

Chinese University of Hong Kong

1. General Impression about the program

To begin with, I think the program is packed with numerous events and learning experiences to let us understand more about not just the academic life in Kyoto University, but also Japan culture itself.

For academic lectures, they comprehensively covered each and every sphere of Japanese society with well-explained teaching delivery. For instance like first lecture on Japanese Society, I was shocked the argument upon homogeneity of Japanese society supported with historical cases of Ryukuans, Ainus and divergence between Kanto and Kansai people. The lecture was very thought-provoking to me, a History lover.

Moreover, the design of language class catered students with different language ability for acclimating into Japanese life, by providing useful phrases and sentences for daily conversation within a stressless and joyful environment. As a beginner in Japanese language, I quickly absorbed some useful Japanese conversation skills and practiced them through daily life like ordering food in Izakaya.

As for numerous discussions either in Japanese or English, I received a fruitful time by having academic and ideological exchanges with local KU students. In the discussion session with English, I was stunned and amazed by how different societies with diverse social context will end up with a great variety of stances and solutions to deal with controversial and difficult topics like gender equality, immigrant problem and etc. It converted my perception of how society could run on diverse spectrum, for instance, Japanese mums received half-year marital leave while Hong Kong mums

were given 3 to 4 months only. Furthermore, the discussion process was very constructive with ideas exchanging between participants, to think of a better way of improving human society by tackling tough social problems. Although the discussion might not come out with concrete conclusion not each and every time, the debates supplied us great reflection upon the existing social logics and motivation to strive for better in the future.

At last, cultural experiences provided us hands-on immersion to Japanese Culture, for instance, trying on Kimono and making wagashi with well-oriented historical background. Understanding Kyoto University's academic efforts for preserving environment during the Aishu Forest Visit.

Although much compliments were given to the program for its packed and fruitful events, I would like to point out that program might be way too packed which left us way little time for exploring Kyoto itself. Me and lots of students felt that we were buried with lectures and classes until 6:00pm everyday, left us no time for visiting shrines and temples nearby, considering most of them closes around 5pm.

Nonetheless, this program left me amazing experiences and unforgettable memories with the beauty of Japanese Society, Japanese people and Kyoto University itself.

2. Diversity of Japanese society in historical perspective

To me, the most interesting and inspiring topic would be the first lecture, focusing on the diversity of Japanese society with historical traces and explanations, as I briefly mentioned above.

In the lecture, Professor Zhang explained the so-called "existing fact" that Japan is a society with high homogeneity after the defeat of WWII. Interesting enough, the lecture debated the concept of homogeneity with historical examples of different marginalized community in Japan, such as Ainus and Ryukuans. Although they maintained distinctive historical and social context throughout most of history up until Meiji period, the diversity of their cultural or historical roots were often being ignored.

The reason for me to be interested in this topic was to dig deep in how Japan government itself formed the concept of nation in first place by understanding how diversity might be eliminated during the strengthening process. To strengthen the national power of Japan and so-called "departing from Asia to Europe", the Japanese government implemented series of national policies to strengthened the idea of "homogenous Japan" with constant marginalization on peripheral communities such as Ainus and Ryukuans. These historical problems became almost forgotten up until recent academic researches unearth the social and religious diversities of them.

For me, I did historical researches on the total opposite subject, the groups which intentionally avoid or defy formal governance upon Sino-Vietnamese piracy and bandits during Ming-Qing era,

inspired by James Scott's book of *The Art of Not Being Governed*. While Ainus and Ryukuans were forcefully being conglomerated into the "Japan society" itself, the Vietnamese or many other peripheral communities took the approach with language and geographical divergences to preserve their social distinctiveness.

Upon my further research, I was wondering the efforts of preserving Ryukuan cultures in contemporary times. In some sense through commercialization and tourist commerce, Ryuku preserve its culture like festivals and foods to the perspectives of Tourists. But upon the separatist efforts and Ryukuan struggling national identity, frankly speaking, most of younger generations deemed that they were effortless and improbable. Therefore, this explained why cultural diversity with rich historical background in Japan society might be losing its importance in the eyes of public or the respective communities itself.

Final Report

Colin

KSP Number: 109

The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

From my perspective, this program is truly commendable and highly beneficial, captivating me with at least four remarkable aspects.

Firstly, this program provides an excellent platform for participants to exchange ideas and cultures. The program's activities primarily focus on delivering Japanese culture to us, such as our experiences wearing 'Yukata' and making 'Wagashi.' However, this program unintentionally created numerous opportunities for us to share our own ideas with local students. One notable example is the last lecture on the 'Cultural Aspects of Education in Japan,' where Professor KAWAI invited overseas students to share their countries' high school education systems. This lecture style is quite rare, both in Hong Kong and Japan, as regular classes typically lack such a degree of cultural diversity. Thus, this lecture showcases the program's uniqueness: our classroom comprised students from diverse backgrounds! Interestingly, we continued these discussions beyond the classroom, fostering more and more interaction between us and the local students.

Secondly, this program not only arranged for local students to teach us Japanese but also encouraged their active participation in lectures and activities. This unexpected arrangement brought a lot of fun to our experience. Within two weeks, we had lunch together and hung out as a group. As a result of this program, I have made many friends, and I believe our relationships will endure.

Lastly, this program offered me an opportunity for self-reflection. Throughout the program, my most significant takeaway was gaining a deeper understanding of my own city. I had numerous chances to introduce different aspects of Hong Kong to other students. However, I found it quite challenging to effectively convey a compelling Hong Kong story, as the city has lost some iconic symbols compared to the past, such as prominent celebrities, unique travel sites, or ground-breaking achievements in various fields. As a history major student working in the history of Hong Kong, I often felt at a loss after this program because I had to convince my peers of the research significance of Hong Kong. However, sometimes I couldn't achieve it when talking to Japanese students and other international students. Unexpectedly, this trip prompted me to reflect on the outcomes of my research and find new ways to articulate the importance of Hong Kong's history.

I would like to share my feedback on the recent field trip, but please note that my comments do not imply that the field trip was not enjoyable. However, I personally find some of the field trips from previous programs more appealing, particularly the company visits. As you are aware, the forest excursion may only be of interest to students in the field of biology. On the other hand, company visits have a more universal appeal, as many Japanese brands are popular worldwide. Unfortunately, I did not have the opportunity to experience a company visit during this program.

2. The diversity within Japanese society and its fascination

This topic is derived from Prof. Zhang's lecture, which sheds light on the distinct differences and diversity among various regions in Japan. The lecture emphasizes that this historical diversity has endured over time. It is attributed to the fact that different areas of Japan had interactions with neighboring nations in the past. For instance, Western Japan (関西) had close connections with the Korean peninsula and mainland China. This historical perspective reminds us that Japan was not the only cultural center in relation to its neighboring nations, but rather a recipient of significant cultural resources from other countries.

After attending this lecture, I developed a keen interest in applying this historical perspective. Coincidentally, I discovered that the exhibition at Kyoto University Museum shared the same viewpoint as Prof. Zhang. This led me to choose the topic "What additional knowledge can be gained by visiting The Kyoto University Museum following this program?" for my final presentation. During the presentation, I primarily focused on explaining how the museum utilized the historical perspective of Japanese diversity to design their exhibitions.

Upon examining the "Ancient Japanese culture and East Asia" exhibition, I observed that it could be interpreted in two ways. Firstly, the exhibition serves as a reminder of the influence and presence of other significant countries neighboring Japan. Secondly, it reinforces the importance of Japan among these neighboring nations. For instance, the description of the Prehistoric cultures in Northeast China states that the culture of Northeast China greatly influenced not only Neolithic Korea but also Japan. Thus, this exhibition serves as a reminder that nearby cultures have had a profound impact on Japan. Additionally, the "Funerary Goods of the Han Dynasty" exhibition

highlights the efforts of the Far Eastern Archaeological Society and Japanese scholars. This exhibition showcases how Japanese scholars contributed to the field of archaeological studies in other countries. In this sense, Japan holds significance among its neighboring nations from an archaeological perspective.

Furthermore, I thoroughly enjoyed Prof. Zhang's lecture, even beyond its academic value. It enhanced my conversations with local students and facilitated a deeper exploration of Japanese diversity. As foreigners, we are often intrigued by the diverse aspects of Japanese culture, which are ingrained in every Japanese individual. For example, the differing rules for escalator etiquette between Western and Eastern Japan exemplify this Japanese diversity. Moreover, I find the distinct features and pronunciation of Kansai-ben particularly appealing. Therefore, through the lecture, I learned about Japanese diversity, enabling me to engage in meaningful discussions with local students and ask more insightful questions.

Final Report

Hedda

KSP Number: 110

The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

This program was very fruitful. I was amazed by the variety of topics provided by the university and student leaders during academic lectures and free discussions. Moreover, there seemed to be a relationship between lectures and discussions with similar fields, such as gender and feminism. This could consolidate my impression towards this topic and utilize the knowledge immediately to foster my understanding.

During the program, I especially enjoyed the cultural exchange with international and Japanese students. When we met one another during discussion sessions and lectures, we would have lunch together, chat, and exchange Instagram accounts. It seemed like we were friends who had met for years. Since we would not be able to get along quickly after two weeks, I especially treasured our friendship and it is my staunch belief that we can still keep my relationship in the future.

Moreover, field trips and cultural experiences are interesting and inspiring. Concerning the field trip, this was the first time that I was able to step into a forest. I was amazed by the uncountable tall trees and insects surrounding me. I also realized the strategies of conservation in Japan, such as planting artificial trees and constructing closed deer fences. Due to the increasing demand for fuel and land, deforestation has become a global issue, while Japan can set up such precious research forest and conserve it well. Concerning the cultural experience of making wakashu and wearing Yukata, I was able to get in touch with traditional cultures and understand their history. Compared to Hong Kong, Japan is a country which succeeds in preserving, promoting and even

exporting local cultures. Japan is a good model for the Hong Kong government which wanted to promote local cultures.

Having said that, the schedule is quite packed and tense. Since it only lasted for two weeks with numerous academic lectures, discussions, and Japanese classes, I usually began the classes from 9 till 6. It was saddening to realize that the shops and shrines in Kyoto tended to be closed after 6. Hence, I failed to visit many historical sites and comprehend Japanese culture more, which was a regret to a certain extent.

2. Possibility of the reappearance of female tenno in Japan

Throughout Japanese history, there had eight female Tennos. However, since the Meiji Modernisation, the government had prohibited the appearance of female Tenno. Inspired by academic lecture 6 concerning feminism, I am interested in why Japan changed from a bilateral society to a patrilineal society from the perspective of Tenno's successor.

In short, due to the worship of femaleness and fertility, Japan had been a matriarchal society. In yamataikoku, which is regarded as the origin of Japan, the state was ruled by Himiko and later her daughter, who is a female wizard. This showed that female rulers were widely recognised by the public with respect.

Later, most of the female tennos obtained the right to manage politics, diplomacy, and the military. Both males and females could inherit the position of an emperor, implying that Japan was probably a bilateral society.

However, since Meiji Modernisation, the appearance of female Tenno was prohibited by the Imperial House Act. This patriarchal decision continued after WW2 despite the SCAP government's request for the promotion of gender equality.

In recent times, the imperial family faces the problem of a lack of male successors. This led to the discussion of whether to allow daughters to become one of the successors of the emperor.

Before talking about the possibility, I would like to analyse the main opposition against female Tenno.

The first concerned the tradition of unbroken imperial lines. The Meiji government claimed that the bloodline of Tenno had been succeeded by god for thousand years. Female succession would destroy this tradition as males were usually the only legally recognised emperor. Allowing female imperial members' children to become a successor was also criticised as breaking the male bloodline. Indeed, if we trace back to the bloodline's origin, the imperial family was inherited from the bloodline of a female Sun God and Himiko's daughter became the ruler of the country. This

showed that the female bloodline was more emphasised at first. There was no such thing as only males could inherit the bloodline.

Another reason was the suspicions towards female leadership and the ability to rule the country. During the Meiji Modernisation, females lacked the right to election and became a member of the military, hence they should not rule over the government and became the leader of the military. Also, since females should be subordinate to males while Tenno was the highest leader, such a paradox led to the prohibition of females from becoming Tenno. Nonetheless, this is possibly a gender stereotype of 'good wife and wise mother' and 'three obediences and four virtues'. The Imperial Rescript of Education proposed during the Meiji Modernisation aimed to foster female morality and patriotism. These ideas are still embedded in education policies. Having said that, there are an increasing number of female politicians in the face of the spread of feminism and equality in receiving education. Women begin to increase political awareness and participation which is recognised by the public. Their leadership and ability are recognised too. Such suspicions towards their ability to rule the country are outdated and should not uphold to prohibit the appearance of female Tenno.

In conclusion, changing the Imperial House Act is not difficult. Hence, the main oppositions come from deep-rooted gender stereotypes and traditions. To solve the issue of lack of male successors, the three possible solutions will be allowing the appearance of female Tenno, promoting inter-group marriage to avoid losing imperial family members and reaccepting Miyake for inter-group marriage. If Japan allows the reappearance of female Tenno, it would be a great step in achieving gender equality.

Final Report

Ai

KSP Number: 111

Yonsei University

1. General impression about the program

I recently had the opportunity to visit Kyoto, my first trip to Japan. Kyoto, known for its deep cultural heritage and history, coupled with the exceptional program at Kyoto University. This combination created impact on my understanding and appreciation of both the city and the institution. The memories are vivid, the moments unforgettable, and the friendships promise to last a lifetime.

Kyoto University's commitment to academic excellence stood out distinctly. The university encourages students to be interested in researches, to broaden their understanding, and to deepen into a range of subjects. This was evident in the diverse lectures presented in Kyoto Summer Program, each thoughtfully planned to provide both knowledge and perspective.

A highlight of the program was our visit to the Ashiu Forest. This experience highlighted the importance of natural habitat and the broader theme of environmental conservation. Additionally, the

cultural activities facilitated by the university offered a direct link to Japanese traditions. Activities such as wearing the traditional Yukata and crafting the Japanese confectionery, Wagashi, provided practical insight into Japan's cultural practices.

The language classes at Kyoto University further enriched my experience. While I had some prior understanding of Japanese, engaging with native speakers and students enhanced the learning process, creating a collaborative environment for mutual growth.

In conclusion, my time in Kyoto, by my studies at Kyoto University, has been both enlightening and transformative. The academic rigor, coupled with the cultural immersion, has expanded my horizons and provided invaluable insights. Reflecting on this experience, I am filled with gratitude for the knowledge gained and the connections made. Kyoto Summer Program will undoubtedly influence my future development.

2. The Cultural Significance of Horse Meat Consumption in Kazakhstan

Drawing inspiration from academic lecture number 9 by Professor Wakamatsu on the Cultural politics of food conservation, I felt compelled to delve into the rich culinary traditions of my own heritage, specifically focusing on the Kazakh people's consumption of horse meat. Professor Wakamatsu's insights triggered a curiosity in me to explore the cultural nuances surrounding the foods we eat, with a particular emphasis on the significance of horses in Kazakh traditions.

While the consumption of horse meat might be commonplace in several countries, Kazakhstan stands out, ranking second only to China in the volume of consumption. However, when we factor in the difference in population sizes, the per capita horse meat consumption in Kazakhstan far surpasses that of China. This indicates a deep-rooted cultural significance and preference for horse meat among Kazakhs.

For many around the world, the idea of consuming horse meat might be met with hesitation or outright refusal. The reasons can range from religious beliefs to perceiving horses primarily as pets or even as spiritual or sacred beings. Interestingly, in Kazakhstan, the consumption of horse meat is integral to the national culinary. A prime example is the dish 'Beshbarmak,' directly translating to 'five fingers.' As the name suggests, traditionally, this dish was consumed using one's bare hands, underscoring communal nature of Kazakh meals.

It's essential to note that while horse meat is consumed routinely, much like beef or chicken in other cultures, horses aren't viewed as mere livestock in Kazakh culture. In fact, they hold a revered position, symbolizing both cultural heritage and historical significance. As nomads, the Kazakh ancestors relied heavily on horses, not just as a food source but as essential companions for travel, warfare, and daily life.

Using professor's perspective of the reasons of whaling, I wanted to see the horse consumption through

Cultural materialism. The fact that Kazakhstan is located in central Asia by having more than 90% steppes, it makes good place for horses to be in this territory. The consumption of horses might be explained through cultural materialism. But still I was questioning myself of why even though kazakh people think of horses as sacred animals, they still consume it?

In concluding, the culinary traditions of a culture can offer insights into its history, values, and way of life. The Kazakh practice of consuming horse meat, while rooted in practical nomadic lifestyles.

Final Report

Su

KSP Number: 112

Yonsei University

1. General impression about the program

If someone were to ask what was the best part of the program, I would, without any hesitation, say the people I met. From my experience, regardless of how prestigious the content is, what truly determines the overall quality is with whom you have worked with; in this manner, the Kyoto University program was outstanding with every participant and leaders showing respect and dedication. I remember the first ILAS discussion time where we debated about refugees and migration; despite it being a controversial topic I enjoyed the academic atmosphere where people tried to understand each other by thinking about the raised points which was clearly shown as the people started off their remarks with “I can see why the previous speaker said...” In general, referring to professors, students, and even Japanese citizens I can sense the mutual respect they have towards each other in any scenarios which I felt other parts of the world should look up to and start adopting.

However, to contribute to the genuine improvement of this program, I cannot avoid mentioning the content of the program. First, having a wide range of studies, for our case, including environmental studies, poetry, and economics under the umbrella of humanities is a double-edged sword. Some would be satisfied as it touched upon one’s study and could obtain a broader perspective of each area while others might complain about how some areas were not their topic of interest. Honestly speaking, I appreciate the diversity of the lectures; I believe that is the purpose of learning humanities, getting hints of different studies to understand a bigger picture. Yet, what I was disappointed about was the “depth” of each lecture. I believe that increasing the class time to three hours like a typical major-related lecture would allow the professors to convey their message more clearly; in other words, ideally speaking, decreasing the type of classes and giving more time to elaborate on such topics could have triggered more stimulating and inspiring discussions.

Nonetheless, it was a very engaging, inspiring experience and I would like to express my whole gratitude towards the KU leaders and organizers for preparing such a precious memory. Thank you.

2. Why should we participate in this type of program?

During the program, I asked a lot of participants the question: “Why did you decide to participate in the ILAS program?” Numerous answers were present which I found it difficult to generalize, but roughly speaking most of the participants were primarily interested in Japanese culture, be that of language, animation, and food. Hence, to elaborate on what they know already and to enjoy the cultural beauty of Japan they experienced before were the major reasons. Thankfully, the other participants asked me the same question, but I did not have a clear answer because I was not the type of person who was initially into Japan; I think I was driven more by curiosity rather than attractivity. So, now the question is why did I get curious about this program. I think the concept of “humanities” and the wide range of classes provided by this program moved me to apply for it. The irony was I did not know why I liked humanities and what good studying humanities do to me. So, I decided to research about the purpose of humanities from a philosophical approach. According to the University of Tennessee, it states that the purpose of humanities is to cultivate a “good operator.” In fact, it raises an interesting point of how what really matters is not the efficiency or productivity of the operation per se but more about who controls and utilizes such operation. The second academic lecture that covered the difference between Bonobo, Chimpanzees and humans stimulated me to consider the unique characteristics of humans, and I believe the creation and continuation of humanities explain the complexity and specialty of humans from other animals. The constant desire to delve into ethics and questioning the value and justification of our choices distinguishes humans. The practice of exploring different fields and applying the moral principle as well as trying to find a common bond among different studies enriches the world but at the same creates immense problems. Therefore, by participating in this type of program where communication between diverse majors are present is needed to remind each other about what direction humanity wants to take and why we are doing certain things.

Final Report

Tricia

KSP Number: 113

Yonsei University

1. General impression of the program

I found this program to be an incredibly fulfilling experience overall. Before joining this program, I had always been interested in various aspects of Japanese history, culture, and literature. However, I've never had the opportunity to travel to Japan and have always learnt about the country from the outside. That is why I took up this program, hoping to open my eyes to various parts of Japan that I still don't know about.

To start, the lectures provided were engaging and informative, and I particularly enjoyed the excursion to Ashiu Forest. While we covered a wide range of topics, including economy, science,

and bonobos, I believe the program lacked an in-depth exploration of Kyoto's history and culture, which I had eagerly anticipated. While the comprehensive lectures and research about Japan were valuable, I felt there was a notable gap in our understanding of Kyoto's rich history. Perhaps due to my inclination toward history, I felt particularly drawn to the cultural aspects and related literature, and I regret that we didn't have the opportunity to delve deeper into those aspects during the program.

Additionally, the graduate school tour also felt a bit short, possibly due to limited professor availability, resulting in only a brief glimpse of the graduate school's offerings. Despite this, I cherished the time spent in my Japanese classes and the interactions with KU students. While I had knowledge of survival Japanese, taking Japanese language classes and talking to some of the KU students have propelled me to delve further into my interest in the Japanese language. Their proactive engagement and genuine concern for our comfort were also unexpected and heartening. We even formed close friendships and spent time together beyond the program's scope.

One cultural experience that I thought would be enriching was attending a Kabuki or Noh Theatre Performance, either with the KUASU students or with the ILAS students. While I personally hadn't witnessed such performances before, I think that this aspect of Japanese culture would also be an interesting experience for the next batch of students. In sum, my participation in the summer program exceeded my expectations. I extend my gratitude to all those who contributed to its success and made this experience possible.

2. One specific topic that you have been particularly interested in during this program: What you have learned about the topic, reasons why you became interested in the topic, what additional investigation you have done about the topic, and so on. (Examples of topics from former students include daily use of technology in Japan, comparative study about manners, etc.)

A particular subject that caught my interest is the field of social linguistics in Japan and its implications for foreigners and individuals learning the Japanese language. One aspect that intrigued me was the distinction between polite and impolite forms in Japanese. While studying in Korea, I also observed the presence of such forms in Hangul, but I believe the dynamics are somewhat different in Japan.

An essential point to consider is the psychological and emotional distance associated with the use of the polite form. This form serves as a means for Japanese individuals to establish boundaries and delineate personal space. Personally, I've grown accustomed to these boundaries through my experiences in both Singapore and South Korea. However, I've noticed that Western foreigners often find this level of distance somewhat "cold," particularly during initial interactions. However, in Japan, it is a sign of respect and even "friendliness" towards the other party - if one starts with casual speech, it might feel too upfront and often rude.

Another noteworthy aspect of the polite form is its persistence, especially when addressing superiors or elders. Regardless of the closeness developed over time, the usage of the polite form remains largely unchanged. For instance, in the case of addressing a Sensei, even if a close bond is formed or if our profession changes, the student will always be referred to the teacher as "Sensei" without variation (assuming respect for their position is maintained).

An intriguing example I encountered involved conversations with Japanese friends. I mentioned that in Korea, some people address me using terms like "noona" or "unnie" as a way to denote a close sibling-like relationship. However, in Japan, it would be considered odd to use the term "onee-san" for someone who isn't a biological sister. In this example, we see that the differentiation in language usage among friends, family members, and authority figures is particularly pronounced in Japanese. Not only are boundaries drawn between different social statuses, but also amongst the people around you (family and friends).

Naturally, in our contemporary society, where language evolves, these distinctions are not always crystal clear, leading to confusion for those learning the language for the first time, which is why the foreign experience is an intriguing interest to me. One thing to note is that these foreigners, despite whether or not they are fluent in Japanese or not, are still seen as "foreign" within the Japanese context. In this, the boundaries down for them are a little different, which is note-worthy to understand and investigate.

All in all, the intricacy of the Japanese language and how it differs between experiences makes language captivating, particularly in how it functions within our social framework.

Final Report

JISEOK, AHN
KSP Number:114
Yonsei University

1. General impression about the program

The 2023 Kyoto Summer Program provided me with a valuable experience that was both informative and fun. Through this program, I was able to experience the Japanese culture, have an in-depth discussion about various topics, gain new information from the provided lectures, and most importantly make new friends.

The cultural experience sessions were very fun and enjoyable. Our trip to the Ashiu Forest was very informative and gave me a chance to think about the importance of biodiversity in our ecosystem. Also, it was just a great opportunity to look around a great forest that was very dense with unique vegetation and full of life. Furthermore, the Yukata and the Wagashi making activity helped me to fully embrace the traditional Japanese culture. It was very enlightening to get a chance to look around the beautiful Japanese garden in a traditional Japanese outfit. Moreover,

making Wagashi, a traditional Japanese snack, with my own hands and trying it out was very fun as well.

Although I enjoyed every one of these activities, my favorite part of the program was interacting with other students either from international backgrounds or from the Kyoto university. Meeting my fellow participants of the ILAS program who came to Kyoto from all around the globe gave me an opportunity to indirectly experience each of their own cultures. Thanks to this opportunity I was able to learn more about Germany, Hong Kong, China, and the United State's culture as well as the Japanese culture through the program. Also, it was very enjoyable to share our own thoughts and opinions about some serious topics such as AI and economic inequality. Through such discussions, I was able to gain new perspectives and new ideas on how to approach these difficult problems that we are currently facing.

Overall, I really enjoyed and gained a lot during my two-week period in Kyoto and would love to participate in such program again in the future.

2. The traditional houses of Japan

On our way back from the Kyoto university's Ashiu Research Forest, we encountered some houses that looked out of place. Among the typical, common houses stood a house that looked very unique and interesting. It had a thatched roof that was built in a very steep angle and had a strange embellishment on the top of that roof. At first glance, I knew that it had to be one of the old traditional houses of Japan that is still standing to this day. Although, I didn't yet realize the importance and the fascinating stories that it carried along with it.

After coming back from the Ashiu Forest, I asked my Japanese friend about the name of this house and used that to search up for more information about this unique house. After spending some time researching, I found out that what I saw was called a Gassho house and that it indeed was one of the traditional Japanese houses. One of the main distinctive features of this house was that it had a thatched roof as it was very cheap to manufacture. Also, the fact that peasants were forbidden to use higher quality material for their roof also caused these Gassho houses to have a thatched roof. Furthermore, I found out that the roofs were built in a very steep angle to let the snow fall off easily and prevent the roofs from collapsing.

After absorbing all of this new information, I found out that the Gassho houses shared a lot of similarities with the Korean traditional house called the Choga house. Just like the Gassho houses, Choga house also had a thatched roof that was made out of rice or wheat straw. Furthermore, almost all of the peasants lived in the Choga house because, just like the Gassho houses, it was very cheap to live in.

It was very fun to learn more about the traditional Japanese housing and it was even more fun to compare it with the Korean traditional housing. Through this research session, I was able to gain a more concrete understanding of the traditional ways of Japanese and Korean living.

Final Report

Vincent

KSP Number:115

National Taiwan University

My impression of KSP:

I've had the most incredible time participating in the Kyoto Summer Program! To be honest, it has far exceeded my initial expectations. I can't believe the two weeks have passed within a blink of an eye. It feels as though the bond between my roommates, who hail from various corners of the world, and myself has been forged over years, not days. The memories we've created together are simply priceless, and I can't express how grateful I am for the friendships we've formed.

The Japanese language classes have been an absolute highlight for me. They strike the perfect balance between being intensive and enjoyable, making learning an absolute pleasure. A huge shoutout goes to my fantastic Japanese Class teacher and my classmates who have contributed immensely to the engaging and uplifting learning atmosphere. Each class feels like an exciting journey, and I had a great time learning practical Japanese and use the phrases in my daily life.

The academic lectures have been nothing short of captivating. I've had the opportunity to explore a myriad of topics, ranging from the intricacies of Japan's schooling system to the rich tapestry of its literature, culture, history, and technological advancements. The depth of knowledge I've gained is truly astounding, and it's all thanks to the informative and intriguing lectures.

One of the standout moments for me was the cultural experience of crafting wagashi. The combination of creativity and tastiness was an absolute treat. The process itself was a joyful adventure, and I found myself completely engrossed in every step.

Reflecting on the Kyoto Summer Program, I am overwhelmed with gratitude for the incredible experiences it has brought into my life. This program has not only allowed me to forge deep connections and friendships but has also expanded my horizons in ways I could have never imagined. It's been an unforgettable journey of discovery, and I'm looking forward to seeing everyone again in the future.

Interested Topic:

I've been really curious about how education works in Japan. We talked about it in our last academic class, and I had conversations with friends about different school systems later on. I ended up comparing college entrance exams and high school setups in countries like Korea, Japan, Hong Kong, and Taiwan. What stood out to me was how much Japan's education system resembles Taiwan's. The content of entrance exams and even the teaching methods and costs of cram schools are surprisingly similar. It's interesting to see this shared approach between the two countries. On the flip side, the Korean system seemed much more intense and competitive. The school hours are

long, and students often have extra tutoring sessions afterward. Sometimes, they even continue studying under a teacher's supervision after regular school hours. Hong Kong's education system caught my attention as well. They offer a wider array of courses in high school, almost like what you'd find at a university level. Their entrance exams are distinctive, focusing on different abilities and using unique question designs. Exploring these different educational systems has been a real eye-opener. Each country has its own way of helping students learn and grow. It's fascinating to see the differences and similarities, and I'm genuinely excited to continue learning more about education around the world.

Final Report

LAURA

KSP Number:116

National Taiwan University

1. General impression about the program

The summer course at Kyoto University brought me many valuable experiences, and many of which I could not learn in Taiwan. I remember that in the Japanese course, I learned how to use a more polite way to ask for help or to talk to teachers or important people. Talking with Kyoto University students not only allowed me to make friends, but also taught me how to speak Japanese better. Also, they were always very kind to me. We went to lunch or dinner together after class, and sometimes they took me to get to know the campus. I like to communicate and share life experiences in Japan or Taiwan since we both were very interested in different cultures. This was a very good chance for me to know and understand more about Japan. Hopefully, I can meet them again in Japan or Taiwan in the future.

Field trip to Ashiu gave me a deeper understanding of the ecosystem, stand dynamics and regeneration of natural mixed forests. Unlike the forests in Taiwan, we do not have deer hazards, but we have too many betel nut trees which makes the roots unable to effectively grasp the soil, resulting in hillsides. Landslides happen after typhoons or heavy rain from time to time.

Impressively, the researchers who devote their time to guarding the forest share their passion with us. We absolutely had a great day and that became the best part to me in this programme.

In addition, each different speaker introduces his own research field in the lectures. It is also very good to understand the current research direction of Kyoto University. I like this arrangement very much because it's very easy for international students to understand. Besides, for discussion, it was the first time for me to discuss and share opinions with the students from different countries. I learned how to respect people from different backgrounds and how to express myself in an appropriate way. In this summer programme, every day was exciting to me to experience new things, and this has become my best memory of this summer. Many thanks to the teachers and students of Kyoto University!

2. Edible Insects Can Be A Sustainable Food Production

As a person, we all need food to survive. "Eating" becomes something we need to accomplish every day. What should we eat? In other words, we care about whether the food is satisfying and whether it can provide complete nutrition. In contrast, few of us care about the production process. What is the source of food? Is it safe? For us, what are the health effects of producing food? How does the production of food change the environment? Or conversely, what kind of environment produces food? We seem to know very little, or we actually know a lot and refuse to admit it. Especially when depriving certain lives of animals during the process and creating environmental pollution. After the rise of human morality and environmental awareness, we began to look for solutions. Even though we have many issues to solve, it seems that there are no very effective methods. But one good choice is high-quality protein source—insects, which may be an effective solution. At the same time, pigs or cows are compared with insects, the greenhouse gas emission is much higher. If there is no need to raise many animals for food, there will be less carbon dioxide emissions, and less sewage. Compared with insects, the space needed for raising animals comes more. We transform the places where animals are raised into green spaces, increase plant photosynthesis, and improve air quality. In terms of humaneness, according to research, it shows no direct evidence that insects feel pain, and the fact that insects are much easier and more humane to deal with than larger animals, these evidence suggest that we might be able to believe that eating insects is a sustainable food production and more eco-friendly to our earth.

In my personal opinion I do support this idea, but I also think it is difficult to implement this method for real. For example, insects are not regarded as the main source of nutrition in most countries. We are not familiar with the appearance and taste of insects. If there are many choices, it can be predicted that the public will tend to choose common and familiar foods. There cannot be a strong incentive for the public to actively choose insects as a source. Only Countries that do not have enough food resources tend to choose insects. But they are still a minority, and limited to improving the environment. If we want to promote it, we must make policy or fundamentally strong implementation.

Final Report

Wei

KSP Number:117

National Taiwan University

1.General impression about the program

When applying to the program, I wrote about how much I looked forward to learning new things and meeting people from different backgrounds. And that is exactly what I experienced during the 15 days program. Every day I went to school with friends by foot and we chatted all the way. We chose the same route most of the time with a few exceptions when we tried to avoid more exposure to the bursting sun. I would not say there was adventure every day, but I found the beauty of everyday life even until the very last day. I would make compliments about Kamogawa River as well as some random buildings and streets even though I had already seen them for so many days.

Being able to identify myself as a resident of Kyoto for some time in my life is enjoyable and deserves to be cherished forever. It is not the only thing that would last forever, though. Before the program began, I had been worried about how my roommates would be. Questions like: “what if they do not want to sleep until very late at night; what if they are all picky people and refuse to negotiate with me; what if they do not like or even hate me,” fully filled my mind. However, it ended up all my roommates are kind and amazing person. In fact, we just clipped shortly after randomly bumping into each other at the lobby. Interestingly, 3 out of 4 of us were morning person before the program, but we transformed ourselves into night owls in order to have more time to chat. We shared about everything in life and discussed every topics. And most importantly, we laughed out loud together all the time. Friendship would definitely secure itself in us and stayed ever since.

As for the academic lectures and discussion, I admit not all of the knowledge would last forever as friendships and memories would. It is for sure, however, that they have sparked my interests for further research or at least lead me one step closer to a connotative and liberal person. The lectures about bonobos, chemistry, multiculture and education in Japan, whaling, food preservation are all interesting, informative, and enjoyable to me.

I am convinced that there must be equal amount of hard-work as how much I enjoy the program. So I would like to thank all the sensei and Kyoto University for making it possible. Thank you so much. There are even more appreciation that can not be conveyed using words.

2. The problem of populated deer

Long time ago, I once heard about the problem of overpopulation of deers in Taiwan, but I did not take the issue seriously. I actually forgot about it until re-heard the same topic during the field trip to Ashiu forest. That is the reason why I chose it. As I dug into the problem, I found it is more interesting than I originally thought.

The overpopulation of deers leads to ecosystem disturbance because those deers consume almost all of the ground plantation. Because of the remaining toxic plantation, people might not notice how serious the problem is in the first place. It still looks green and not that barren. However, being green actually cannot be used as an index for a diverse or good ecosystem. The biological diversity is low if the number of species or amount is limited, and this would consequently cause harm to the forests. The plantation would be the first to change, followed by the nitrogen and carbon cycle, and eventually, the whole environment would be altered.

In Japan’s case, the question of why for the past 30 or 40 years, the deers became overpopulated remains unanswered. However, there are four main hypotheses attempting to answer that, including global warming, wolf extinction, overprotection due to prior extinction crisis, and declining hunter hypothesis. The global warming account for shorter winter time which may consequently leads to the thriving of deer population.

On the other hand, in Taiwan’s case, the situation is different. During the age of discovery, a large amount of deerskin was imported from Taiwan to Mainland China, Japan, and Persia by the Dutch East India Company, which was in charge of Taiwan at that time. After about one hundred years of trading and habitat destruction, the deer population dropped dramatically. And eventually, the

wild population of Taiwanese sika deer totally died out in 1969. Only a few individuals that had been caged, but protected remained in the zoo. Interestingly, this is what we have debated about during the final discussion section.

From the year of 1983, Taiwan's government, zookeepers, and scientists initiated the project of restoration by helping sika deers to reproduce and then reintroduce them into one of the National natural parks. And that's how and where the issue of deers overpopulated occurred.

Even though the main causing factor differs, there are still some similarities. According to Taxonomy, both deer populations that were mentioned above belong to the same species, only in different subspecies. Also, both of them once faced a serious extinction crisis but overcame the problem afterward.

Extinction, as well as overpopulation, are problematic, so we still need to pay more effort into this issue and hopefully will find the natural balance again.

Final Report

AR

KSP Number:118

University of Vienna

1. General Impression about the program

When the Kyoto Summer School started, I was filled with a mixture of anticipation and uncertainty about what to expect. The topics covered in the lectures seemed to just scratch my own academic itch, and my lack of familiarity with the Japanese language presented an additional challenge.

When I arrived at the hotel booked by the university, no one was there yet. I took a leisurely stroll around Kyoto and was warmly greeted on my return by Yoshi, one of the student leaders. A few other participants had also arrived and we quickly struck up a conversation. From that moment on, I sensed a real camaraderie in the group - a shared curiosity that was to shape our experience.

The highlight of the programme for me were the stimulating discussions with the other participants. We explored a wide range of topics, each of which offered a new perspective that I had not considered before. These discussions opened my eyes to the richness of different perspectives and the value of stepping out of my own bubble. What impressed me most was that our differences did not divide us, but enriched our understanding of the world.

The lectures, while not directly related to my academic focus, proved surprisingly enlightening. They challenged my preconceived notions about Japanese culture and society. From interesting lectures on whaling and dietary habits to thought-provoking insights into the Japanese education system and the history of the Ainu and Ryukyu, each lecture broadened my horizons. The interactive nature of the presentations, involving both international and Japanese students, further deepened the learning experience.

I must express my gratitude to Kashiwagi Sensei for her patient guidance through the Japanese language. Despite the demanding coursework, her structured approach helped me make great progress in a short time. After the programme, I was even able to communicate in simple situations during my travels.

However, the true essence of the programme lies in the contacts made. I had the privilege of meeting remarkable people from different parts of the world, each of whom brought a unique perspective. These encounters underlined the potential of collaboration across cultural and geographical boundaries.

In conclusion, I highly recommend the Kyoto Summer School to anyone interested in Japanese culture. The programme not only broadened my understanding of Japan, but also reinforced the idea that learning knows no borders. It was an experience that highlighted the power of academic exploration and the connections that can be made through shared curiosity.

2. The Empowering Intersection of Academic Activism: Bridging Knowledge and Action

A topic that deeply captivated me during the Kyoto Summer Program was academic activism. Our visits to various laboratories included a remarkable encounter with Professor Asato, whose research focuses on migration studies. He shared how sociological data collection often perpetuates an inherent asymmetry: the researcher takes, while the subject gives their personal information. Driven by this disparity, Prof. Asato embarked on a journey of giving back through community engagement, particularly within the Filipino Diaspora. Especially during the pandemic, he provided households with donated meals and facilitated Japanese language classes with the help of his students. Inspired by his impactful initiatives, I delved deeper into the realm of academic activism.

Back in Vienna, I am an active participant in political groups, underscoring how political involvement has woven itself into the fabric of student life in Germany and Austria. Gathering for demonstrations or participating in political endeavors has evolved into an activity that I eagerly partake in, often alongside my circle of close friends.

At the University of Vienna, there are courses touching on political and activist themes, albeit predominantly in a theoretical context that doesn't always foster direct action. Many professors adopt a neutral stance or even discourage activism. Intrigued by the avenues available for academics to be active agents of change and curious about mobilizing like-minded individuals within academia, I embarked on an exploration. I delved into various studies and absorbed insights from "The Activist Academic: Engaged Scholarship for Resistance, Hope, and Social Change" by Cann & DeMeulenaere.

Academic activism unfolds with numerous advantages, such as nurturing social responsibility and facilitating interdisciplinary collaborations with fellow scholars and activists. There's an inherent boost to one's academic credibility and relevance when research is seen as instrumental in addressing tangible, real-world challenges instead of dwelling solely in the realm of hypothesis. As scholars or even future professors, we find ourselves in a privileged position to wield our high reputation and influence toward political decisions, a potential that, in my opinion, should be harnessed to the fullest.

In conclusion, the profound encounter with academic activism in Kyoto and subsequent explorations have illuminated the potent potential that scholars hold as catalysts for positive change. My commitment to political groups, the influence of Professor Asato's work, and my exploration of academic activism underscore that this endeavor is not only a commendable

aspiration but also a vibrant reality, brimming with opportunities to contribute significantly to a more just and sustainable world.

Final Report

Paddy

KSP Number:119

Heidelberg University

1. General impression about the program

Kyoto Summer Program 2023. It really was a very great experience for me. I liked everything about the program. But still I liked some activities more and some less. The first thing I noticed when arriving, was how open and active the KU students have been. I really was happy, that all of them helped us as good as they could to understand and enjoy the contents of the program to the fullest. That was also very important in the discussion sessions. The Discussion sessions have been very lively and interesting. The Reason for that probably was the selection of topics for the discussion sessions. For a lot of the topics, I personally didn't think about them before. So, I discovered a lot of new Thoughts and arguments. Some of the topics were more difficult to discuss and some have been easier. The same goes for the academic lectures. Still, some of the lectures and the lecturers will stick in my mind. Because I am a biology Major, I really liked the more scientific lectures as for example the lecture about the future of agriculture and sustainable Food Production. Besides how I liked the lectures I think every lecturer gave it their all and made a good impression. I think I really learned something. But not only the Lecturers had put in a lot of effort. The teachers for Japanese Language Classes have done a really good job and at least from what I heard everybody liked them for their personality and the way of their teaching as well. Though in my Japanese Class, which was Japanese Language Class Level 1B with Namba Sensei, I learned a lot of new things I still remember now like numbers and telling the time, sometimes I couldn't keep up. It was so fast because we only had 10 hours of Japanese Language Lessons. I think, because of my experience so far, in Japan till today you need to speak the language to really enjoy your stay. With English you usually do not come far in conversation with the normal Japanese person. And that is the reason, why I think we should have done more than 10 hours of Japanese lessons. I also liked the Cultural experience a lot. I think it was very nice that we got to experience the kimono wearing and the wagashi making. I really enjoyed the field trip, but I will talk about that a lot more in the second part of the final report. But in Conclusion I think the final presentations from everybody summarize the experience we had in the program pretty good. We learned a lot and we laughed a lot!

2. What we missed at the Ashiu Forest Research Station

I thought of doing my final presentation about this topic after we visited the Ashiu Forest Research Station (AFRS). As a Biology Major I am interested in Animals, Plants and Ecosystems. So, I was seeing forward to go to the forest since I knew that we would go there. I really liked the guided Tour we went to in the forest. At first I was scared of going in there, because of the toxic snakes,

insects and dangerous bears we got promised. But luckily we didn't encounter any of them. At least our Tour has been safe. I wanted to see the deer, but we didn't see any of them as well. We only saw the effect they had on the vegetation. There were just a few species of also toxic plants because the deer logically only eat the edible plants. The fence though it was just a fence still was interesting. They built it so that they can secure some of the forest original vegetation. Which surprisingly actually did work well. I thought as I saw that fence, that deer could get over or maybe through the fence somehow. But we really could see a different vegetation inside of the fence, than outside of it. But then in preparation of my final presentation I researched some information about the AFRS on the internet. I found out that there are a lot of cool Animals like big salamanders and crazy looking birds and beautiful plants in the forest, that we didn't see. Some animals like bats were obviously unseen because we have been at the forest at daytime. But saying what we missed in the forest is a little bit mean to the tour guides. They did a great job in guiding and showing us a very interesting part of Japan. It has been a whole day trip to the forest, because of the long time it took us to get to the Forest. That's the only thing I didn't like about the field trip. All in all, the field trip was one of the memories that will stick to my mind for a very long time and is an experience I want to maybe do again sometimes. I really want to see what I found at my research :).

Final Report

Lino

KSP Number:120

Heidelberg University

1. General impression about the program

The program was well structured and provided a great variety of different academic fields in regards of the lectures as well as of the participants. Due to that an interdisciplinary study-environment was guaranteed. Especially the discussions among students were a great opportunity to get several opinions about the discussed topics and to learn more about the thinking and argumentation of students from different countries. In my opinion this was more than beneficial for everyone's personal development. The cultural experiences were fine but could be improved. Don't get me wrong, they were totally good. But for example: After residing in a *ryokan* (旅館) for the whole program it didn't feel that special anymore to "see [and walk on] beautiful Tatami". Wearing a *yukata* on the other hand was a real pleasure and I enjoyed it a lot. But also, here I would have preferred it if we would have worn them while visiting Kiyomizu Dera or something like that. The trip to the Ashu Forest Research Station was very exciting at first but turned into a disappointment during the hike until it got a great experience again. This was because not everyone got the information that we will get provided with information about the forest on our way back, so it felt like we hiked there after a two-hour bus tour only to see a fence and then we hiked back. In total the trip was a really good experience because we got to know firsthand how Japanese researchers and society in general approach questions about how to be in touch with

nature and how to live with her instead of dominating nature. In summary I liked the program very much and I hope that I'm able to come to Kyoto again and to participate in another program!

2. Religious Diversity in today's Japanese Society

Inspired by academic lecture Nr. 1, I wanted to add my point of view about the religious diversity within today's Japanese society. First, I want to talk about the term *shūkyō*. According to Josephson the Sino-Japanese term was popularized in the 1870s as a translation for the Euro-American „religion“ and then exported throughout East Asia and is a compound of two characters, 宗 (*shū*) and 教 (*kyō*). (Josephsen, 2012, P. 7) Reader and Pye argued that the Japanese term *shūkyō* was a natural translation for the Euro-American concept of religion. [...] (Ibid).

So, what kind of religions exist in today's Japanese society?

„Most Japanese think themselves as non-religious. Yet there are not many countries that have more diversity in religions than Japan.“ (motivistjapan.com, August 10th, 2023).

According to Prohl Scholars of religion estimate that between 10 and 20 percent of the Japanese population are members of so-called ‚new religions‘ 新宗教 (*shinshūkyō*). (Prohl & Nelson, 2012, P. 242). „In the middle of the 1970s, observers began to take note of a new religious development in Japan. Some spoke of a ‚religious boom‘, others about the rise of the ‚spirit world‘ (*seishin sekai* 精神世界) “or the rise of a religious ‚third sector‘ [...]. (Ibid, P. 243). „On the one hand, these terms describe the religious organizations that have formed since the mid-70s in Japan and are called the ‚new new religions‘ (*shinshinshūkyō* 新新宗教). “(Ibid). „On the other hand, they describe an increased range of religious goods and services known elsewhere in industrialized societies as ‚New Age‘, ‚Body Mind Spirit‘ or ‚spirituality‘ (*supirichuariti* スピリチュアリテイ). “(Ibid).

In my PowerPoint presentation you can find a few examples for 新新宗教 (*shinshinshūkyō*) on slide Nr. 6.

She also says that these new new religious groups have either been newly founded or experienced a boom in membership during the last [three] decades. (Ibid, P 252) [and] that their teachings are mainly focused on worldly benefits (*genze riyaku*) (Ibid, P. 248).

What about Christianity you might ask.

„In Japan, Christianity doesn't have much influence, compared with [other] countries [of the world]. [...]“. However, there was and still is a continually influence of Christianity within Japanese society since 1549 – see timetable within my PowerPoint presentation (Slide Nr. 8).

Nowadays the Japanese government acknowledges the Ainu as indigenous to Japan but still only a few people know about their unique culture and beliefs.

„The Ainu believed that flora and fauna, tools, tsunami [...], earthquakes, pandemics, and the like in *ainumosir* (the Ainu homeland) had a *ramat*, or ‚spirit‘. “(ff-ainu.or.jp, August 10th, 2023). „It was thought that these came to *ainumosir* from the realm of *ramat* and returned there when their roles were completed. “(Ibid). „According to the Ainu, deities are beyond the power of humans, but are indispensable to our lives. (Ibid).

In a similar way also the Okinawans beliefs are not well known. „Okinawans have traditionally followed Ryukyuan religious beliefs. (usarj.army.mil/information/aboutokinawa, August 10th,

2023). This is characterized by worshipping ancestors and respecting the relationships between the living, dead and the gods and spirits of the natural world. “(Ibid).

In conclusion it can be said that:

1. Even if Japanese consider themselves as non-religious there is a wide variety of religious beliefs and practices within today's Japanese society.
2. Christianity has not as much influence as in other parts of the world and Shintoism and Buddhism are obviously major in Japan. However, there are many different variations of all three religions accompanied by new religious developments and other indigenous belief systems.
3. “All things considered, Japanese people are very generous and tolerant towards religious beliefs. They have a pragmatic approach: they take the best of what each culture (or religion, for that matter) has to offer. Most of the Japanese are agnostic but they enjoy practically religious customs and remain open about religions.”(Ibid.).

Final Report

LELA

KSP Number:121

Heidelberg University

1. General impression about the program

The program overall was very well organized and the content seemed to be very well considered. From the uncomplicated arrival to the well described locations and additional information to the overall interaction, everything was very pleasant. The breaks as well as the requirements for the program were well balanced and led to a lot of fun every day.

I liked the structure and atmosphere of the language class very much. It fit the program's standard very well and was not too difficult nor easy. I especially loved the inclusion of the Japanese students for more practice which is usually lacking in common language classes. Also the teacher was very well at handling and boosting our individual skills and level. She was very cheerful and fun to work with.

I appreciate the availability of many people within this program very much. It made everything even more uncomplicated.

The open and frequent exchange in the line group made a lot of nice things possible. For example the exchange of images, helping each other find the location and sharing news. Therefore I again appreciate the high time investment by everybody (this is very uncommon for me).

The hotel was also an experience for itself and very well chosen I think. It nourished a lot of communication within the program's participants just by being in a shared room and being able to go to the public bath. I am probably also not the only one experiencing those classic Japanese facilities for the first time. Even the way to the university every day along the river was fun. The staff was also more obliging than I ever experienced in a hotel before.

The first field trip to the Ashiu forest was a very interesting experience. It was a great honor to have such an amount of planning done for all of us to see a place of live research and study of the

university. It was nearly a bit sad that we spent more than double the amount of time in the bus than in the forest instead of staying there for a longer time. But of course this is reasonable for an acceptable time frame for everybody.

The second cultural experience was personally my favorite because it again gave us a lot of chances to talk with each other. It was very interesting to see the property of the university and even more fun to be allowed to capture this experience in a place like this with everybody in traditional clothing. Being able to make traditional sweets with the help of professionals of kyoto was very amazing and again, a great honor. It was a nice contrast to listening to lectures.

Its part of why I think this program has very balanced content.

The lectures are of course not interesting for everybody because we all are from different faculties, but they filled a broad variety of contents.

In summary, the program was very well designed for getting deep insight of the life in japan in a way that a normal vacation could not capture. It offered a lot of opportunities to talk with others and exchange and experience new things, but it never felt forced. I made a lot of friends and made a lot of wonderful experiences.

2. Some differences in students lifes

During my trip I met a lot of different students with different attitude towards university.

From my experience, there are two different types of students. The ones who care as much as they need to for university, and those who usually spend all their time on university in their normal habits.

In Japan, this was roughly the same.

Even so, I became curious about this topic, because I imagined how I would be influenced if I would go to university in Japan. Would I change my habit of study?

I know from some of my friends that they spend nearly all day in university. From morning to late in the night. I didn't quite figure out how they plan their time, but it seemed to be less dense and productive than what I am used to from Heidelberg.

Usually, for those who spend a lot of time for university work, they still work a lot at home or in the library. This is different for most Japanese students that I met. The amount of content also seems to be rather low for the Japanese students (but I only know a few subjects that are not like mine). I experienced that the "being in university all day" means spending a lot of time with your fellow students walking around campus, talking and eating. I am used to the habit: if I am in university, I only work with highest productivity. I have a 30 minutes break for lunch, but thats it. Usually only group work is discussed with a bit of small talk in between, but the groups very quickly decide to leave university together or alone if the group work is very unproductive.

The students habits seem to be very different for every individual, ranging from students who work a lot on their way in the train, those who usually stick at home, library people and more. Still, the attendance in the Japanese universities seems to be much higher (maybe because you have to attend some lectures. But even so, I know a lot of people in germany who go to the classes but leave instantly afterwards. No matter their travel time).

I wonder if the way how people study together differs. In my university and subject, we have to do homework in groups every week.

In Japan, this seems to be different, even for my subject. The attendance seems to be much more relevant.

Another difference I came across was the long way to university. A lot of people in bigger cities live outside and need to drive for a longer time to university. Often times even around an hour or more. I think in Germany, the people who have to do this, are less than in Japan. The consideration of cost to live alone or move to a bigger city should be roughly the same in Japan and Germany. Having to drive such a long time often leads to people just attending the minimal of classes every semester in Germany while in Japan it seems to be, again, more regular. I even met one student who lives in their lab (normal bachelors student) to avoid the long travel time. This is only imaginable for upper students in exam phase, post docs, professors or similar in Germany.} So to keep up again, the most differences are in the discipline of attending university (or just be on campus every day) and the productivity on work as well as the balance and mix of free time and work.

It's hard to conclude something well structured or clear here because I didn't really take a focused survey of the people I asked and know, but I think it was very interesting to listen to what they told me about their lifestyle regarding university. Also it made me wonder again how I think what is best to manage work life balance, the value of being on campus every day, etc.

Final Report

Michelle

KSP Number:122

University of California, San Diego

I would like to express my heartfelt gratitude for the opportunity to participate in the 2023 Kyoto University Summer Program from July 27th to August 10th. The experience has truly been genuinely transformative and inspiring.

Throughout the program's duration, I was consistently impressed by the thought-provoking sessions, the exceptional quality of the instructors, and the dedicated KU students who play a vital role in making the entire program possible within the span of just two weeks. Their efforts were truly commendable, as they went above and beyond to curate exceptionally fruitful experiences for not only participants arriving from distant places but also someone like myself, who was visiting Japan for the very first time.

The overall program encompassed more than just gaining knowledge about Japanese culture; it provided a platform for experiencing Japanese culture alongside individuals from across the globe, fostering the joy of diverse cultural exchanges.

One aspect I particularly enjoyed and believe it successfully facilitated these exchanges was the thoughtful management of the hotel room assignment, which brought together individuals

from diverse backgrounds. Sharing a space with my three other roommates, each hailing from a different part of the world allowed us to create bonds through engaging in cultural exchanges outside of the classroom setting. This facilitated a deeper understanding of each other's perspectives and enriched the overall experience as we forged connections in advance.

I also appreciated the emphasis on hands-on activities and interactive discussions, including the field trip to Ashiu Forest and various engaging discussion sessions. The chance to connect with fellow participants and share our optimistic and adverse perspectives on a variety of subjects was invaluable. These interactions not only broadened my own perspectives but also exposed me to a multitude of viewpoints. For instance, during the discussion on disasters, I gained insights into how different countries address and prevent natural disasters, including the tools they employ for measurement and prediction.

While I was not able to actively participate in every single discussion, the culminating session left a lasting impression. During the final discussion session, each student representative is responsible for summarizing the key points from their respective discussion session, leading to a comprehensive and well-rounded conclusion. The extended discussion after that encouraged further engagement and ensured that diverse viewpoints were taken into consideration, contributing to a more holistic understanding of the topics explored.

The Role of Technology in Addressing Food Waste

I was greatly inspired by Professor Kawai's enlightening lecture on the cultural dimensions of education in Japan. This experience sparked a profound interest in me to delve into the intricate intersection between collective and individualized educational approaches for my final presentation. Additionally, I found the eighth academic lecture, which delved into the realm of curbing food loss and waste, to be another captivating topic of mine. During that lecture, Professor Kondo highlighted two pivotal ways in which advanced technologies contribute, spanning from harvest to consumption, in minimizing food waste. As a student from Speculative Design major, and with the serious issue of food waste pervasive in the United States, I was enthusiastic about exploring this domain further, particularly in terms of how the power of AI could potentially ameliorate the situation.

Yet, as I delved further into my research, I stumbled upon a wealth of well-established technologies that have already been devised and implemented within industries to tackle food waste prior to the consumption stage. Consequently, I began to shift away from the technological aspects of waste reduction and instead contemplated the behavioral and educational dimensions that consumers ought to embrace.

Among the strategies to control food waste during the consumption phase, a notable approach involves empowering customers to determine their own food portions. Throughout experiencing life in Japan, I was intrigued by Japan's distinctive practice of offering such an option to patrons – an approach I have rarely encountered elsewhere. Through personal experience, I found that having control over portion sizes allowed me to fully consume the food on my plate. Furthermore, the Japanese culinary tradition, which emphasizes variety in small portions, achieves both a visually appealing spread and a well-rounded nutritional intake.

Reshaping consumer behavior is far more facile. Simple awareness raising is not enough. It is imperative to understand the drivers for food being wasted at a household level and real change requires a mix of interventions that target specific behaviors.

While my knowledge in this field is still evolving, I aspired to make consumer behavior my current focus of exploration. As I gain more insights about AI and technology along the way, I anticipate revisiting, reflecting, and drawing crucial connections between the issue of food waste and the potential role of technology in mitigating this challenge.

In closing everything above, I am profoundly grateful for the Kyoto University team for orchestrating this outstanding program. The impact of this experience resonates in both my personal growth and academic journey. I am excited about the prospects that lie ahead.

Final Report

Gio

KSP Number:123

George Washington University

1. General Impression:

This program has taught me things about Japan that I could never learn in a classroom. Every day I was busy learning about a variety of topics, but my learning did not stop there. Through the two cultural experiences, I received hands-on learning in terms of Japanese cuisine, attire, and nature. The Japanese language classes were particularly helpful. I was able to brush up on my Japanese, and learn a few new things. After class, it was exciting to be able to attend discussions with other Kyoto University students and further practice my Japanese. In my free time, I was able to roam the streets of Kyoto, continuing my learning at the Imperial Palace. I also encountered a diversity unlike any other that I have previously experienced. Being from Washington D.C, I'm used to interacting with a variety of cultures, but getting to know students from all over Asia was a valuable experience that I will not forget. Through this program, I have made lasting friendships that I never expected.

In terms of feedback, it would be nice to spread out some of the coursework, given that every day was extremely busy. Furthermore, having a couple more free days would allow for better rest, and more time to digest academic material. It would also be helpful to have more frequent discussions in Japanese as opposed to discussions in English. I found that practicing my speaking skills in Japanese contributed much more to my understanding when compared to the traditional classroom setting. It would also be interesting to interact with extracurricular clubs at the university. During my stay at the program, I was lucky enough to enter the school gym, and as I passed, I was able to see a range of student organized clubs such as table tennis, gymnastics, aikido, and more. Having seen these clubs made me eager to interact with Kyoto University on a deeper level. Overall, I was extremely impressed and feel super lucky to have experienced such a unique program.

2. Diversity in Japan and Beyond:

One topic that I have been particularly interested in during this program is diversity in Japan. Specifically, the Ainu and the Ryukyu Kingdom. During the program, I learned the role such societies played in the political history of Japan. For example, the Ainu played a large role in facilitating trade between China, Russia, and Japan. Similarly, the Ryukyuans held a facilitating role between Japanese and Chinese relations. I particularly became interested in this topic because prior to my studies in this program, I had always thought of Japan as a homogenous, or non-diverse society. It was not until this lecture that I began to consider some of the ethnic divisions within Japanese society. Somewhat related to this topic, I have investigated the diaspora of the neighboring country, the Philippines. Given that I am Filipino myself, it is interesting to compare and contrast the factors that contribute to the composition of both societies. For example, early Austronesian civilizations settled in the Philippines, using the islands as a frame of reference during the era in which they heavily relied on fishing practices. Today, the Filipino economy is heavily dependent on overseas foreign workers, which is eerily similar to the ancient Austronesian society that required its citizens to travel far for resources, only to return to the islands with their earnings. Connecting this back to contemporary Japan, it is interesting to speculate how Japan will continue its course economically. For example, during the *Japan's Lost Decades* Lecture, it was assumed that a combination of factors such as a declining birth rate, increasing elderly population, AI, etc. contributed to an economic downturn. Now when comparing the two countries, one outsources its well-being through the employment of overseas foreign workers (the Philippines), while the other is in the midst of adopting a friendlier foreigner policy to encourage an influx of workers (Japan). While it is difficult to understand the ins and outs of a country's economy, it is interesting trying to piece it together with historical trends.

第二部
京都サマープログラム 2023
(KUASU)

《主催》



《共催》



京都大学
国際高等教育院

9. 京都サマープログラム 2023(KUASU プログラム)

9.1 設立の経緯と目的

国際的に活躍できる人材の育成と大学教育の展開力の強化を目的として、平成 23 年度から大学の世界展開力強化事業 (Inter-University Exchange Project)がおこなわれてきた。この事業が焦点を置いているのは以下の 2 点である。

(1) 日本人大学生の海外留学

(2) 外国人大学生の戦略的受入にかかわる国際的大学間連携

「京都サマープログラム 2023」は上記の(2)のタイプに属している。アジアの諸大学の学生を大学間連携に基づいて受け入れる事業として開始された。以下、簡単に年表を示す。

平成 23 年度	文部科学省による大学の世界展開力強化事業が開始
平成 24 年度	KUASU による《「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成》が世界展開力強化事業の 1 つとして採択される
平成 25 年度	京都大学国際交流センターが KUASU を構成する 1 部局としてのプログラム(派遣・受入) 実施および実施準備を開始
平成 26 年度 2 月	第一回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが実施される (森真理子・教授／国際交流センター長、佐々木幸喜特定助教が担当)
平成 27 年度 2 月	第二回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが実施される (河合淳子教授、稲垣和也特定助教が担当)
平成 28 年度 8 月	第三回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、稲垣和也特定助教が担当)
平成 29 年度 8 月	第四回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、稲垣和也特定助教が担当)
平成 30 年度 8 月	第五回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、西島薫特定助教が担当)
令和元年度 8 月	第六回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、西島薫特定助教が担当)
令和 2 年度 2 月	第七回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、西島薫特定助教が担当)

令和3年度 8月	第八回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、西島薫特定助教が担当)
令和4年度 8月	第九回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、張子康特定助教が担当)

令和5年度8月に実施された今回の京都サマープログラム2023は、第10回目となる。平成28年度から、ILASプログラムとカリキュラムの一部を合同で実施し始め、令和元年度までに合同でおこなうカリキュラム内容はさらに拡大するとともに相互連携もより深まってきた。令和5年度のKUASUプログラム参加対象大学は、インドネシア大学、チュラーロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校(外国語大学・人文社会科学大学)のアセアン3大学およびカリフォルニア大学サンディエゴ校である。プログラム準備段階において、上記アセアン3大学およびカリフォルニア大学サンディエゴ校に、(1) 日本学関連領域(日本学、日本文学、日本史学等)を学ぶ、(2) 学士課程または修士課程に在籍する、という参加条件で学生募集の依頼をおこなった。

受入プログラムだけでなく、派遣プログラムも、京都大学とアセアン諸大学の間におけるより良い国際的連携・協力の蓄積に寄与することが期待されており、日本とアセアン諸国で国際的に活躍できる留学生／日本人大学生の育成を目的としている。加えて、KUASUが掲げる3つのミッションに準じ、(i) 世界最高基準の日本研究の統合・体系化を見据えた日本語・日本文化教育の実践、(ii) 日本とアセアンが互いに抱える諸問題の共有・解決を見据えた共同学習の実践に、受入・派遣プログラムの主眼が置かれている

実質的な観点から見ると、受入プログラムは派遣プログラム(上記(1)の「日本人大学生の海外留学」)と密接に連動している。京都大学／アセアン諸大学の同じ学生が、受入プログラムにも派遣プログラムにも参加することにより、交流・共同学習のリレーが続いているためである。京都大学学生と留学生間のコミュニケーションがSNSを媒介としてプログラム後も継続的に続いており、本プログラムが国際的な相互交流のきっかけになっている。

9.2 KUASU プログラムの特徴

KUASU プログラムにおける主な教授言語は日本語である。ただし、教育・学習における媒介言語としての英語の重要性、そしてILASプログラムとKUASUプログラムの学生達が合同でプログラムの一部を受講するため、アカデミックレクチャーは基本的に英語でおこなった。本年度のKUASUプログラムのカリキュラムの特徴は、(A) 日本語での学生交流、(B) 文化学習、(C) 共同発表である。

(A) の日本語での学生交流に関しては、主に(C) の共同発表の準備および Discussion Session にておこなった。共同発表の準備では、以下の表の通り、本学学生サポーター、本学受講生そして海外学生からなる多国籍のグループを作った。発表準備はグループごとにブレイクアウトセッションを用いておこない、発表で使用するスライドの作成を日本語にておこなった。発表準備は参加学生たちが密度の高いコミュニケーションをおこなう場として、本プログラムの中でも重要な位置を占めている。さらに Discussion Session では、合同発表とは異なるグループをつくり、「AIと教育」「ジェンダーギャップ」「環境政策」「移民問題」「戦争と平和」などアカデミックレクチャーと関連するテーマについて討論をおこなっ

た。(B)に関しては、Cultural Experience において、今年度はテーマを「日本の商店街」と「部活動・サークル活動」の二本立てとした。特に京都錦市場商店街へ現地調査に赴いたほか、本学の学生サークルの協力（有機農業研究会 minori、京都大学新聞社、京都大学天之武産合気道同好会）を得て、実際に部活動・サークル活動の体験を行った。。(C)に関しては、本プログラムの成果を本学学生と合同で発表してもらった。また日本語の授業を担当して頂いた先生方にもそれぞれの発表についてコメントを頂いた。各グループの発表テーマは以下 9.3.の表の通りである。

9.3. 共同発表

共同学習における発表タイトルと発表者

1. 「各国の伝統的な服のデザイン」 （＝各国の伝統衣装の比較）		
KSP151	Thuy	ベトナム国家大学ハノイ校・M2
KSP156	Franc	チュラーロンコーン大学・B1
KSP161	Haekal	インドネシア大学・B2
KSP202	Kouichi	京都大学農学部・B1
リーダー	Natsuho	京都大学農学部・B2
2. 「国による中学教育の相違点」 （＝各国の中学校教育の比較）		
KSP152	Chip	ベトナム国家大学ハノイ校・B3
KSP157	Pancake	チュラーロンコーン大学・B1
KSP162	Siska	インドネシア大学・B2
KSP205	Kima	京都大学工学部・B2
リーダー	Ryosuke	京都大学理学部・B3
3. 「各国の受験事情について」 （＝各国の受験についての比較）		
KSP153	Tra	ベトナム国家大学ハノイ校・B5
KSP158	Baitong	チュラーロンコーン大学・B1
KSP163	Jackie	カリフォルニア大学サンディエゴ校・B3
KSP210	massan	京都大学文学部・B1
KSP224	Jinyouzu	京都大学法学部・B3
リーダー	Yui	京都大学工学部・B3
4. 「各国のお正月について」 （＝各国の正月の過ごし方の比較）		
KSP154	Chi	ベトナム国家大学ハノイ校・B2
KSP164	Lily	ベトナム国家大学ハノイ校・B6
KSP159	Meli	インドネシア大学・B2
KSP212	Kurumi	京都大学総合人間学部・B1
KSP229	Mana	京都大学農学部・B1

5. 「3 か国でのことわざの比較」 (=各国のことわざの比較)

KSP155	Mile	チューラーロンコーン大学・B2
KSP160	Aicha	インドネシア大学・B2
KSP216	Haruka	京都大学教育学部・B2
KSP218	Shuta	京都大学工学部・B1
リーダー	Fumiya	京都大学工学部・B3

「各国の伝統的な服のデザイン」



「国による中学教育の相違点」



「各国の受験事情について」



「各国のお正月について」



「3 か国でのことわざの比較」



私の京都大学

ハノイ国家大学外国語大学・大学院・2年生

KSP151

Thuy

① プログラムに参加したきっかけ

大学の先生方からこのプログラムを教えてくださいました。大学生の時、日本へ留学する機会がありませんでしたので、このプログラムを知った時とても嬉しかったです。

② プログラムへの参加を通じて学んだこと

二週間の間に、私は日本語の授業やアカデミック講座、京都大学の学生との会話やフィールドトリップなど、さまざまな学習活動に参加しました。日本語の授業では、新聞や長文の読み方を学びました。また、俳句や短歌も勉強しました。俳句や短歌を学ぶ際には、それらの背景も理解しました。アカデミック講座では、さまざまなテーマを学びましたが、中でも

「Sensing Technologies for sustainable Agriculture」という講座が一番気に入りました。近藤直先生の授業は非常にわかりやすく、面白かったです。また、芦生の森も訪れました。この旅を終えて、私は自然への責任を感じました。

③ プログラムの感想

私たちに教えてくれた時間と努力に心から感謝しています。2週間、私たちは京都大学の学生として日本語を勉強したり、アカデミック講座に参加したり、文化を体験したりしました。京都大学の先生方や学生たちに温かく迎えられ、日本語の勉強だけではなく、日常の生活も色々なことをサポートして、豊かな学習環境を作ってくれて、ありがとうございます。このプログラムで得た知識と洞察を将来の取り組みに活かすのを楽しみにしています。京都大学は私の青春の一部です。一生忘れないと思います。

④ 特に印象に残ったことなど

京都大学の先生方や学生たちには、とても温かく迎えられました。私が日本の旅館に到着したのは午後6時でしたが、1時間遅れて午後7時半頃になってしまいました。しかし、京大の学生たちは待っていてくれて、お食事に連れて行ってくれました。初めて自動販売機でラーメンを買ったのですが、使い方がわからず困っていました。そんな時、京大の友達である Ryosuke さんと Shuya さんが親切にも詳しく教えてくれたので、日本の生活にだんだん慣れていくことができました。また、毎日の発表準備講座では Zikang 先生と一緒に参加してくれており、質問がある度に説明してくれました。さらに、日本語の授業にもいつも京大の学生たちが参加 してくれて、色々な点でサポートしてくれました。私はまだまだ日本語能力が苦手ですが、先生方や友達たちが常に応援してくれ、自信を持つことができるようになりました。そして、毎日の授業に参加するたびにワクワクして、楽しく過ごすことができました。

最終レポート

ハノイ国家大学外国語大学・日本語言語文化学部・3年生

KSP152

Chip

①プログラムに参加したきっかけ

大学の三年生が終わったら、「日本語が難しくて、できない」「一所懸命頑張ったが日本語能力がまあまあ」という考えがあった。その時、日本語に興味を持っていなかった。大学の教師にこのトラブルを相談して、アドバイスと解決方法を聞いて、教室が京都サマープログラム 2023 を紹介して下さって。先生は「プログラムに参加して、日本語を話したり、日本の生活を体験したり、日本のことを調べたりするチャンスがある。それから、日本語が続くかどうか自分で答えられる」と言った。その理由で、京都サマープログラム 2023 に申し込んだ。

②プログラムへの参加を通じて学んだこと

面白い日本語の勉強方法を見つける。以前、大学で試験のために、語彙と文法と読解と聴解のテクニックだけ詰め込んだ。勉強は時々つまらなくて疲れると感じて、日本語のコミュニケーションスキルができない。白方佳果先生のおかげで、日本語の授業は面白くなっている。日本語の新しい言葉と表現以外、日本の文化と思想も学習できた。日本の文学とニュースを通して、日本語の勉強は以前のように大変ではない。

Academic Lecture と体験活動に参加した後で、日本についての知識（経済、歴史、言語、文学、教育）がだんだん増えていくと思う。

③プログラムの感想

授業の他に、錦市場や和風庭園や芦生研究森と言った特別な体験活動に参加したり、多様なバックグラウンドの友達に交流したりすることができる。私が初めてだ。誰は心が広いし、頭が柔らかいし、偏見がないし。それに、いっしょにディスカッションの時、一つの課題について様々なアスペクトから考えていた。友達と話してから、面白いことを学んだ。

④特に印象に残ったことなど

先生方と京大の学生達と旅館さわや本店の仲居はいつも優しく、思いやりがある。最後の Academic Lecture で、河合淳子先生は私の教育について質問を詳しく答えた。張子康先生はいつも笑って、留学生たちの気持ちを配慮して、ベトナムのお菓子をもらった時泣きたいほど感動した。京大の友達、Ryosuke, Shuya, Yui, kima, Kurumi, Paru, Kaho は観光地に連れて行って、写真をとって、いっしょにたべて、笑って、日本のことについて紹介して、楽しかった。困る時、直ぐに助けてくれた。京大で優しい人々に会えて、私は日本語を続けようとおもっている、いつか京都に戻りたい。皆様、誠にありがとうございました。

① プログラムに参加したきっかけ

私はずっと前から日本に行きたくて、日本に来るチャンスを探していました。2年前、日本へ1年間の交換留学奨学金を受け取ったのに、コロナの影響で日本に行くことができなくなりました。残念でした！今回、京都大学のサマープログラムについてのお知らせを見たとき、とても興奮しました。子供の頃から、古くて自然に恵まれた京都市が大好きでした。また、日本の生活や文化を体験し、日本のトップ大学である京都大学の友達と交流したいので、このプログラムを登録することにしました。

② プログラムへの参加を通じて学んだこと

このプログラムに参加して、さまざまなテーマの学術講演を受講したり、芦生林で体験できたり、各国の友達と一緒に課外活動に参加したりして、たくさんの経験をすることができました。まず、自分が得たことは、日本語力です。毎日、買い物をしたり、京大で勉強したり、友達と話したり、行われた発表準備をしたりするときに日本語を使わなければならなかったので、「聞く、話す、読む、書く」という4技能を活かすことができました。

また、日本の公共交通機関の乗り方も学びました。最初、バスや電車での移動がとても大変でしたが、KUASU リーダーの指導のおかげで公共交通機関をうまく利用できました。

③ プログラムの感想

このプログラムに参加できてとても幸運だと感じています。私は素晴らしい先生たちに出会いました。彼らは温かい心を持っていて、いつでも喜んで助けてくれます。また、日本人学生も外国人大学生もとても親切で、一緒に楽しい時間を過ごすことができました。本当に良かったです。

次に、環境に気を配り、自然を愛する人なので、芦生研究林の遠足を楽しみました。先生から植物の話、林の世話をする過程や直面している困難について聞いて、感動しました。

④ 特に印象に残ったことなど

最も印象に残ったのは、おそらく京都大学の先生と学生の温かさです。京都に滞在する間、みんなが私たちをとても助けてくれました。そのおかげで、京都がホームだという実感が湧きました。

最終報告

ハノイ国家大学、外国語大学・日本語文化学部・2年生

KSP 番号：154

Chi

① プログラムに参加したきっかけ

日本語を勉強始めた時から、いつも日本に行きたいです。しかし、仕事があるので、一年ぐらいの長い時間のプログラムに応募できなかったです。偶然に大学に京都大学サマープログラムのメールをもらいました。いいチャンスと思って、申し込むことを決めました。

② プログラムへの参加を通じて学んだこと

Academic Lecture

ベトナムの大学では言語、医学、科学などの別々な専門分野しかないので、京大でいろいろな専門の授業を行なったことを驚きました。日本語だけじゃなくて、ほかの分野の知識を学んでもらって嬉しいです。

日本語クラス

日本語のクラスの先生の教え方はわかりやすい感じがあります。毎日ニュースを聞きながら、先生は優しく説明してくれて、ベトナムに帰ったあとで聴解宿題がもう怖くなくて聞き取りスキルも上がりました。

KU 学生や外国人の学生と相談すること & Final Presentation

私の一番よくないスキルは会話です。日本語で話すときは恥ずかしく、何を話せばいいかわからなかったですが、15 日間でみんなと話したおかげで、自信になって日本語の使い方ももっと学びました。

③ プログラムの感想

張先生、河合先生をはじめ先生たちやリーダーの皆さんは、想像以上に私たちを歓迎してくれました。私の想像では、日本人は冷たくて仕事だけに集中していると思っていましたが、日本語でまだ喃語を話す子供に話しかけ、根気強く説明してくれました。名前の意味、専攻や住んでいる場所、食べ物や贈り物について話してくれました。皆さんは別れを告げるときに私を抱きしめて、小さな贈り物を送ってくれるし、国に帰るときに尋ねるためにメッセージを送ってくれました。

この旅で出会ったすべての人、聞いたすべての講義、訪れたすべての場所を私は大切に思っています。大阪に行ったとき、高層ビルや混雑した駅を見ていると、急に京都が恋しくなりました。京都は旅行に行く場所ではなく、帰る場所のような気がします。

④ 特に印象に残ったことなど

Ryosuke さん、Shuya さん、Kurumi さん、Mana さん、Aoi さん、Kei さん、Haruki さん、Yui さん、Meli さん、Aicha さん、Sota さん、Shuta さん、moai さん、Siska さん、Haekal

さん、Mile さん、Pancake さん、Baitong さん、Franc さん、Jackie さん、Su さん、Nathan さんなどのたくさんの友達に会って、助けてくれて、話し合う機会がありました。さまざまな場所から人々が集まることは、祝福だと思います。15 日間で、先生や友達が私にくれたような熱心で優しいサポートはこれまでに受けたことはありません。ずっと京大にいたくなるくらい優しいです。今まで、心からありがたい気持ちと感じています。

Final Report

Chulalongkorn University, Faculty of Arts, 2-year-student

KSP 番号 : 155

Mile

① プログラムに参加したきっかけ

私はずっと日本に留学したいと思っていました。高校の時は日本に来る予定でしたが、新型コロナの感染者が増えた一方で行けなくなりました。その時からずっと悔しかったです。ですから、先生が kyoto Summer Program の奨学金を紹介してくださった時、この奨学金を受けることにしました。そして、私は京都に行ったことはありません。魅力的なところで、日本の伝統的な文化を代表する町だと聞きましたから、興味を持ち始めました。日本に留学したいことと京都に興味を持っていることがきっかけで、このプログラムに参加することになりました。

② プログラムへの参加を通じて学んだこと

この2週間はとても早かったと思います。それにしても、色々なことを勉強させていただきました。日本語のクラスで読書を中心として、時間がない時のニュースを読む方法や俳句と短歌も学ばせていただきました。読書の内容は京都が多いので、京都の美しさの俳句や短歌を学んだり、作ったりしました。Academic Lecture で、私の大学にないものを勉強させていただきました。例えば、Sensing technologies for sustainable agriculture クラスで食品ロスを防ぐために高度な技術を紹介していただいて学びました。または日本の文学をとして美しさを表す作品や和歌も学びました。日本の季節や自然を繋げて美しさや気持ちを表すものを自分で味わいました。クラスでは勉強ばかりでなく学生たちの意見を自由に言わせていただいたので、自分の視界と知識を広げます。

③ プログラムの感想

このプログラムから学んだことは時間はとても大切だということです。Cultural Experience はとても焦って、錦市場が開く時間の前につ着きました。着いてもほとんど店が開いてないので、何もできませんでした。店が開き始めても時間がないので急いで他のところに行かなければなりません。タイには日本語を話すチャンスがありませんが、このプログラムは日本語を使うチャンスをくれました。私にとっては授業を受けることばかりでなく大切なことは日本語で他の人に自分の考えや自分の意見が伝えられることです。そして自分の文化と他の人の文化を交換することも大切です。自分の文化と他の人の文化の

違うところを理解して学ぶべきです。そうすれば、この世界で他の人と毎日楽しく過ごせると思います。このプログラムはそのチャンスを与えたので、感動します。

④ 特に印象に残ったことなど

このプログラムに参加したら、新たな人に出会って友達ができました。国籍や日本語能力を問わず、皆さんはとても親切で、いつも助けてくれました。色々な場所を紹介したり、美味しい料理屋も連れて行ったりしてくれました。発表準備で、日本人のスタッフさんも日本語を直してくれましたので、発表がうまくいきました。皆さんに会えて嬉しいです。この2週間の記憶はいつまでも大切にしておきます。この経験をくださってありがとうございます。

最終レポート

チュラロンコーン大学・文学部・2年生

KSP 番号 : 156

Franc

① プログラムに参加したきっかけ

このプログラムを初めて聞いたときが一年生だ。その時は日本語先生に京都大学で二週間学んだり、日本暮らししたり、日本人と話せたりするプログラムがあると伝えていただいたので、興味があった。先生によると、先生たちが学生の成績で参加する人を選ぶそうだった。それで、このプログラムに参加できるように一生懸命勉強していた。しかし、今年の五月に私は先生に京都サマープログラムに誘っていただいて、行くか行かないかまよって迷っているところでした。日本に初めて行った時は5年間を経たし、京都に行ったことないし、それに日本暮らししてみたいことである。こんなわけでもう一度考えたら、京都に行くことにした。

② プログラムへの参加を通じて学んだこと

違う文化なので人間が不同ということを学んだ。京都に二週間住んだのはタイ人だけと住まなく、色々な国から来た人とも暮らしかつ日本人とも暮らした。そして、他の人と意見を交換する機会があったから、新しい意見が見られる。ある行動がにタイ人にとって普通だと思うけれど、他の人にとって普通ではない。それに、森林へ行くことやレクチャーなどを通じて学んだ知識が沢山ある。

③ プログラムの感想

私はこのプログラムに参加することにして、よかった。私が一番好きなのは日本語授業だ。その日本語授業はニュースを聞く内容があるので、すごく役に立つ授業だと思う。タイで学んでいる時は日本人と喋る機会がなかなかない。それで、京都大学と話すことがいい機会になり好きだと思う。このプログラムはしたことないことをさせられた。例えば、森林に見学に行くことや合気道してみることである。しかし、私にとって時間割りがとても厳しいだと思う。授業は八時四十五分から十八時までだから、もう少し少なくすれば、そんなに疲れていなかった

と思う。そして、錦市場に行く Cultural Experience の時には朝早く行ったので会っている店が少なかった。それで、出来ることがあまりない。ともあれ、素晴らしい経験になった。

④ 特に印象に残ったことなど

印象について言ったら、友情のことである。最初は日本に行った後に友達があまりできないと思ったけれど、本当は日本に行った後に色々な人に会ったり、他の人と話したり、遊んだりした。気がつくと友達が沢山できてしまった。帰国の前の週に私は京都大学の学生にカラオケに誘ってもらって、とても楽しかった。そして、最後の日本語授業に私は日本人に難しい単語を説明してもらったので、今まで感謝している。それに、京都の夏がタイより暑くても、京都に二週間暮らすことがこの街に縁があると思う。私はもし今度また京都に行ったら、こんな友情やこんな雰囲気などをもらうかなと思っているけれど、京都サマープログラムに参加したのは素敵な思い出になったと思う。

Final Report

Chulalongkorn University, Faculty of Arts 文学部 2 回生

KSP 番号 : 157

Pancake

1. プログラムに参加したきっかけ

私は中学生の時からずっとと外国で学びたいです。でも、機会がありませんでした。そして、来年日本に留学したいです。このプログラムは日本での生活してみるし、学んでみる機会です。日本で学ぶのが好きかどうか分かります。先生からこのプログラムの情報について伝えてくれたと、すぐに申し込みました。

2. プログラムへの参加を通じて学んだこと

色々なことを学びました。タイで学んだことがない知識です。初めて聞きました。例えば、日本人は鯨を食べることです。とても面白かったです。そして、一番好きな Academic Lecture は日本古典文学に見る日本人の美意識です。この Academic Lecture を勉強した時、興味があるようになりました。これから勉強続けようと思います。他に、このプログラムには色々な国の人が参加したので、異国の文化を学びました。特に日本の文化です。また、友情について学びました。これまでに誰も会ったことがありませんでしたが、困っている時に、いつもみんなは助けてくれました。

3. プログラムの感想

先生達は優しく、私達を温かく迎えてくれました。Academic Lecture はとても楽しかったです。たくさんの活動をさせました。例えば、ハイキングするや合気道をするなどです。タイでこの活動をする機会はあまりありません。良い経験でした。そして、このプログラムから日本人の

友達ができたのは初めてです。とても嬉しかったです。先生達とスタッフは一所懸命活動を準備してくれてどうもありがとうございました。お疲れ様でした。

4. 特に印象に残ったことなど

KU students と一緒に話したり、旅行したり、昼ご飯を食べたりしました。その時は一番楽しかったです。みんなはとても元気で、優しいです。行きたいところへ連れて行ってくれました。ある日私達は花火大会に行きたかったのですが、用事がありましたので、間に合わないかもしれません。でも、ある Leader は私達を待っていました。それから私達を花火大会に連れて行きました。感動しました。そして、他の Leader は手作りのプレゼントをくれました。とても可愛いです。どうもありがとうございました。タイに戻る時に、とても悲しかったです。またみんなに会いたいです。良い思い出になりました。

Final Report

Chulalongkorn University, Faculty of Arts, Year 2

KSP 番号 : 158

Baitong

1. プログラムに参加したきっかけ

私がこのプログラムに参加するきっかけは長い時間で留学するかどうか決められないで、ちょうど先生がこのプログラムをすすめられました。このプログラムは短期留学だし、色々な活動が面白そうだし、日本へ来たことがあります、日本語を勉強してから、まだ日本へ来たことがなくて、日本語に恵まれるところにいたいと思いますから、このプログラムに参加します。

2. プログラムへの参加を通じて学んだこと

このプログラムを通じて色々な事を学びました、Academic Lecture でたくさんの人のいろいろな意見か聞こえたこととか、たくさん考えたことがないことも学びました。特に The Aesthetics and Sensitivities of Japanese as seen through Classical Japanese の Lecture topic はとても楽しかったです。知らなかった日本と色々な国の文化もたくさん交換しました。たくさんの人と一緒にいることとか、フリールドトリップの経験にもたくさんの考え方を学びました。Final presentation にも色々な国のことを学びました。それに、日本語のクラスもたくさん新しい単語を習いました。KU の学生に単語を聞いて、このような方法は初めてで、とても楽しかった。ニュースを聞くのはとても難しいですが、新しい経験になりました。

もっと練習したいです！

3. プログラムの感想

たくさん日本人の友達ができたと。みんなさんはとても親切で、たくさんのかを一緒にしました。一緒にご飯を食べたし、一緒に好きなパフェを食べたし、観光地を連れて行ってくれたし、カラオケも連れて行ってくれました。初めて日本語の歌をカラオケで歌って、ちょっと難しいですが、とても楽しかったです。日本語話そうの活動も、日本語クラスも、たくさん日本人

と日本語で話せました。日本人の友達もできたし、会話も練習できたし、とても楽しかったです。日本人だけでなく他の国の友達もたくさんできました。みんなはとてもとても親切です。英語もたくさん話しました。

4. 特に印象に残ったことなど

特に印象居残ったことはたくさんあります。YuiさんとFumiyaさんとShutaさんが山登りに連れて行ってくれたとか。初めて夜に山登しました。ちょっと怖かったですがみなさんのおかげで助かりました。山の上は町の景色が見えて、とても美しく、感動しました。Harukiさんも私たちを待って、花火大会へ連れて行ってくれました。とてもきれいだったです。それに、最後の日も和菓子をくれました。Yuiさんも自分で作ったプレゼントをくれました。とても可愛かったです。いつも私たちがいじめるFumiyaさんもプレゼントをくれました。他のLeadersとKU studentsも皆んなとても親切です。一緒に色々なことをして、たくさんのことを話して、とても楽しかったです。Completion ceremonyもとても感動しました、みなさんに聞いたことは泣くほど印象しました。Farewell partyもAfter partyもたくさんみんなと話すし、思い出になって写真を撮りました。花火はとてもきれいだって、とても楽しかったです。帰る時も初めてと話したTaishiさんも私たちを旅館まで送ってくれて、お茶をくれました。この2週間はとても早かったです。いい思い出になることもたくさんあります。一生忘れません。このプログラムを行なってくれて、心から感謝します。みなさん会えてよかったです。どうもありがとうございました。

大切二週間の最後レポート

Universitas Indonesia・Japanese Studies・B2

KSP 番号：159

Meli

日本に行くことは、日本学科の学生にとって一番欲しいことです。プログラム通りに日本に行くチャンスがあるので、参加してなりました。大学で2年間ほど日本について学んでいますが、本物を体験するや見る機会がなかったので、素晴らしい機会です。プログラムの中に、日本語だけじゃなくて、寄与と大学についてとアカデミックレクチャーもあって、日本大学の授業とか日本文化も知るようになるので、完璧だと思っています。

日本語授業には日本のニュースの聞き取り練習して、新しい言葉とか文法とか漢語を学んでいました。例えば「近隣住民」は近くに住んでいる人という意味です。アカデミックレクチャーを通じてたくさんことを学んでいたが、一番好きなのは日本のフェミニズム運動のレクチャーです。日本の大学院の研究室を行った機会もありました。アカデミックのほかに、日本の文化も体験した、錦市場に行って、和菓子を食べて、店を見ました。芦生研究林のフィールドトリップに森を守るためにいろいろな活動を知るようになりました。日本学生たちと日本語でしゃべり機会がたくさんあるので、日本語でしゃべるのが自身があるようになりました。他の留学生たちと英語でしゃべりするので、英語も練習できました。

先生方とリーダーたちと京大生たちと旅館さわや人々と本当にありがとうございました。プログラムにはたくさん事を学んでいて、いろいろな所に行き、疲れましたが、楽しかったです。2023の夏は忘れられない思い出になります。毎日疲れたのに、楽しかったので、二週間は短くなる感じました。日本からだけじゃなくて、ほかの国から友達を会って一緒に勉強したり授業行ったり遊んだりしたので、うれしかったです。

日本学生たちが本当に優しい人だと思います。わからない言葉がある場合は英語でとか簡単な日本語でゆっくり説明して、行きたい所があるならできるだけ連れて行ってくれた本当に感動しました。日本学生から新しい言葉もたくさん勉強していた、例えば大好きな言葉は「中古店」です。毎日使っている言葉も勉強していた、例えば「小さい」が「ちっちゃい」になります。全部が一番大切な体験と思い出になります。またいつか会おうと思っています。

京都サマープログラムのレポート

Universitas Indonesia • Japanese Studies • B2

KSP 番号 : 160

Aicha

①プログラムに参加したきっかけ

日本での生活を経験したいことがきっかけで、このプログラムに参加することにしました。うちの大学には専門は日本学科ですので、日本の文化や生活などを学ぶ機会があって、日本についてすごく気になりました。それに、世界の大学の中に、京都大学は最も上位大学もう一つで有名で、このプログラムにも色々な面白い授業があって、参加するのはすごく大切な勉強になると思っていました。

②プログラムへの参加を通じて学んだこと

一番は言語です。日本語クラスや日本のかたとおしゃべりするのおかげで、日本語を練習する機会が多くなりました。そして、意外に、色々な国から友達とおしゃべりするのおかげで、英語練習機械も多くなりました。2番は専門以外のことを含めて新しいことを学ぶ機会もありました。色々なトピックをクラスに選ぶことができ、新しいことをたくさん学びました。

最後の学んだことは生活の授業です。このプログラムのおかげで、周りの人たちともっとオープンに話せるようになりました。もう少し勇気を持つことで、自分の周りで起きているもっと面白いことを見つけられるようになることを学びました。その他にも、日本語のニュースの読み方、日本の電車やバスの利用方法、神社での祈り方など、日本の習慣について多くの新しいスキルを学ぶことができました。

③プログラムの感想

このプログラムは本当に人生を変える経験でした。参加した後、私は以前とは違う、より良い人

間になったような気がします。このプログラムは上位大学で授業を受けることだけではなく、日本の生活を体験し、いろいろな学ぶことができますと思います。本当に最高の勉強になりました。

④特に印象に残ったことなど

まず、ボノボについての授業です。この授業に参加した後、ボノボの社会生活が人間と似ていることを考えずにはいられませんでした。研究結果にとっても感心しました。徳山先生の授業にまた参加する機会があれば、ぜひこの研究の続くを聞きたいと思っています。

もう一つは、他の学生との絆です。日本に来る前は言葉や文化が違って、違う国からの学生たちとうまく友達になれないと思っていました。しかし、それは間違いでした。たった2週間で私は新しい友達を作ることができて、仲良くなることができました。みんなと会話や文化交流ができることに本当に良かったです。

KUASU 最終レポート

Universitas Indonesia, Faculty of Humanities, 2nd year

KSP 番号 : 161

Haekal

子供の時からアニメやマンガ日本のポップカルチャーに触れている。それで、高校生から日本語を勉強して、インドネシア大学の日本学科に入学した。この時から京都に行くという目標があった。京都は現代的な街でありながら伝統的な建物や雰囲気を守っている。それに、日本語を勉強している学生として日本に留学する目標もある。このプログラムに参加してその二つの目標を同時に達することができて、正に「一石二鳥」だ。

プログラムでは上級の日本語クラスで授業を受けていた。表九クラスでは京都に関する文章、短歌、俳句を学んでいた。その中で、最も印象に残るのは夏目漱石の『京に着ける夕』を勉強した時だ。文章は夏目漱石が京都に着いた時の気持ちを語っている文章である。京都は寒い、昔のまま、さびしいと書かれた。この文章は2つの意味の可能性がある。そのままの意味と表現的の意味の可能性と考えられている。この文章のきっかけで、改めて日本語は深いなと考えさせられた。

日本語のクラスの他に、アカデミックレクチャーに参加する機会をいただいた。12クラスの中から8回に参加していたが、それぞれのトピックが面白くて、とても参考になりました。教育から科学まで、本来自分の大学で学んでいないことを学べてとても貴重な経験だと思う。授業に加えて、室外の活動もした。ラブ見学、フィールドトリップ、カルチュラルエクスペリエンスなど、視野を広げて京都大学と京都のことをもっと知ることができた。

このプログラムではスケジュールはけっこう混んでいるが、そのおかげで日本語とその文化をたくさん学べて楽しいです。先生とサポーターのおかげで京都を楽しむことができた感謝しています。

プログラムの中で一番印象に残ったことは合気道サークル見学と京都大学生と話す時だ。自分からしようと思ったことないものを学ぶことができて楽しいです。相手の力を利用しながら自分を守ると小さな体の動きで体が簡単に投げられることが特に興味深い。そして、京都大学生と話すことで友達作ったり同じ趣味を持つ人と話すことができて楽しかった。

サマープログラムのレポート

インドネシア大学・日本学科・3年生

KSP 番号：162

Siska

私は世界の様々な文化に興味があります。世界中に多くの人々と会って交流したい。そして、話し、知識を共有し、彼らと軽く深い会話をする事です。私も世界中の人とつながりたいです。このプログラムを始める最大のチャンスになると感じます。インドネシア大学に入学したから、私は留学を経験したいという強い願望と決意を持っています。私が留学したい理由は、他の国で教育制度と学習方法がどのように施行されているのか知りたいからです。

このプログラムから多くのことを学びました。インドネシアでは、森へ行ったことはありませんが、このプログラムでは森へ行って、たくさん経験をしました。私の専攻から違う科目を選ぶことができました。経済や動物や化学などを勉強することができました。私はさまざまな国籍の人たちと話をしていました。彼らは自国で起こった多くのことを共有しました。私はこのプログラムで英語と日本語のスキルを練習できるので自信がありました。

私はこのプログラムでイスラム教徒として非常に高く評価されていました。豚肉があれば、どんな材料が入っているか教えてくれました。それから、オリエンテーションの初日に、先生がお祈りの場所を教えてくれました。お土産もとても良く、イベントの終わりもとても良かったです。このサマープログラムを素晴らしいものにした京都大学の講師や学生には、とても嬉しく感謝していました。

京都大学の学生たちとのたくさんことをしました。本当に楽しいし、良い印象を与えてくれました。京都の街の景色を見るために、私たちは夜に大文字山に登りました。景色は本当にきれいでした。そして、私たちも下鴨神社へ行きました。その時は、祭りがあったので、屋台がたくさんありました。

最終レポート

UCSD, International Business & Japanese Studies, B3

KSP 番号 : 163

Jackie

1. プログラムに参加したきっかけ

最初は自分の大学からメールをもらって、日本へ留学することに興味があるので、アプリケーションを書いて提出しました。特に、このプログラムは日本で一番良い大学の一つである京都大学なので、とても参加して経験したいです。

2. プログラムへの参加を通じて学んだこと

プログラムへの参加を通じて学んだことは、さまざまな国から来た人と交流することであり、様々なことを学ぶことです。例えば、KUASU の最後の発表では、5 つのグループが様々なトピックを選んで、各国を比較し発表しました。トピックは教育からことわざまで様々なもので、以前は中国にしか存在しないと思っていたことわざも学び、興味深いと感じました。意味はほぼ同じですが、異なる表現方法があります。言語の魅力を感じました。また、京都や日本の大学に関することも学びました。日本語のクラスでは、京都に関する文章や俳句など様々なことを読みました。例えば、なぜ関東や関西と呼ばれるのかについても学びました。最初は日本の首都が京都であったため、京都以外の地域、たとえば東京（江戸）は関東と呼ばれました。その後、日本の首都は東京に変わり、関西という言葉は初めて使われました。

3. プログラムの感想

このプログラムへの参加は非常に貴重な機会だと思います。プログラム中には、日本の先生や学生、様々な国から来た学生と交流し、楽しい時間を共に過ごしました。特に、KU のリーダーたちは非常に親切で、私たちに楽しい経験を提供してくれました。感謝の気持ちを伝えたいです。リーダーたちはプログラム内だけでなく、自身の時間も使って様々な場所を案内してくれました。そして、張先生も非常に親切な先生です。張先生はいつも笑顔で、私たちに多くの助けを提供してくれました。このプログラムで一番学んだことは、学術的な講義だけでなく、異なる国の人々との交流方法やコミュニケーションの方法だと思います。先生方とリーダーたちの努力のおかげで、私たちは素晴らしい経験をすることができました。ただし、プログラムの調整がうまくいかない部分もあると感じます。例えば、ILAS と KUASU は 2 つの異なるプログラムですが、お互いに交流する機会が少なすぎると思います。両プログラムの学生が共に交流する機会が増えれば、より良い結果が期待できると考えます。

4. 特に印象に残ったことなど

一番印象に残っているのは、プログラムが行った Ashiu forest のフィールドトリップ、KUASU リーダーさんが行った大文字山登山、そして最終日の花火アフターパーティーです。グループ活動において、みんなで共有する思い出を作ることが楽しいです。特に大文字山登山では、みんなで一緒に登りました。登るのは大変でしたが、登った後の夜景がその苦勞を報いてくれました。また、友達と一緒に山に登り、共に作った思い出がさらに貴重です。最後に心から感謝を伝えたいと思います。このプログラムのおかげで、ここで多くの素晴らしい人々と知り合うことができ

ました。このプログラムが今後も続いて、より多くの人々が興味深い文化交流を体験できることを願っています。

Final Report Format for KUASU

ハノイ国家大学—外国語大学

KSP 番号：164

Lily

1. プログラムに参加したきっかけ

日本語を専攻している大学生として、私は日本に行くことを夢見ていました。私は常に映画のような観光、京都の料理や多くの儀式、伝統的な日本中心部の独特な文化に魅了されてきました。日本が環境に優しい国であることは知っていますが、日本人が巨大な製造業を環境保護制度にどのように協力できるのかも知りたいと思っています。日本で最も信頼できる大学の一つであり、これは絶対に逃せないチャンスだと思い、チャンスを掴んで応募することにしました。

2. プログラムへの参加を通じて学んだこと

プログラム全体を通して、私はより深い文化的理解を得ることができ、たくさんの新しい友達ができ、とってもうれしかったです。ソーシャルインベーションだけでなく、チームワークについても、間違いなく多くのことを学びました。今後、KSP プログラムから得た最も貴重な経験は、多国籍かつ多分野のチームで働く能力だと思います。私たちのクラスには、いくつかの異なる研究分野や異なる文化から来た学生がいましたが、全員がそれぞれの強みと知識ベースを協力してプロジェクトに取り組むことができました。この種のコラボレーションは、ほとんどの大学生にとって本当に特別でまれな機会であり、私が学んだことは非常に貴重です。日本語が上達したかかもしれないと思います。日本人は協力を大切にするということも学びました。フィールドトリップはとても楽しかったです。芦生の森を見学し、その生物多様性について学びました。

3. プログラムの感想

京都大学のキャンパスは母校よりも広いので、最初は道を見つけるのが少し大変でしたが、京大生のサポートですぐに道を覚えることができました。

キャンパス内で私のお気に入りの場所は、ルーン食堂です。ランチタイムには安くて美味しい料理がたくさんあります。

私たちが泊まったホテルはとても豪華です。ホテルには客室がたくさんあったので、他の留学生と知り合い、夜中まで話せました。とても楽しかったです。

4. 特に印象に残ったことなど

京都大学の好意ことからとても感動しました。彼らは自由な一日に私たちを市内に連れて行ってくれ、電車の乗り方を学ぶのを手伝ってくれました。京都大学の学生と交流することで、より深い文化的理解を得ることができました。

10. 京都大学受講生 参加報告

京都サマープログラムを通じて感じたこと

法学部 4年
KSP 番号：201
名前：りあ

本サマープログラムで様々な講義を受講し、多くの留学生と交流する中で、英語でのコミュニケーション能力はもちろん向上したと思いますが、そのほかにも貴重な経験が沢山できました。

その中でも特に印象的だったことは、日本人や日本というアイデンティティを再認識できたことです。とある留学生が、「自国は都市として発展してはいるが他国と比較して特筆すべき文化やアイデンティティがない」と言っていたのが耳に残っており、このプログラムでもあったような衣食住にまつわる、また伝統的なものから現代のサブカルに至るまで様々な文化が存在する日本の独自性を実感し、改めて誇らしく思いました。さらに、日本文化だけでなく日本人の気質やイメージ等を留学生の方から直接聞くことができたのは非常に新鮮でしたし、留学生の方に改めて日本について尋ねられた経験も、自分自身や日本について考え、学び直す良い契機となりました。私は将来公務員として働くことが決まっており、観光産業やインフラの海外展開にも携わりたいたいと漠然と考えていましたが、本プログラムでさらにその想いが強くなり、海外と関わる機会に積極的に参加して日本の在り方を考え、独自性を発揮していきたいと思うようになりました。

また、外から見た日本を再考する以外の側面でも、留学生の方から学んだことは多くありました。その中でも私は、留学生の積極性を改めて実感し、自分も見習いたいと思いました。Academic Lecture や Discussion in English は自身の専門外の毎回異なるテーマばかりで恐らく留学生もそうだったと思いますが、自身の知識や経験、関心事項と結びつけて積極的に質問・発言している姿が非常に印象的でした。私は最初、専門外の分野では不用意に発言しにくいと考えていましたが、留学生の姿に触発されて徐々に自分の意見や質問を言えるようになり、彼らも耳を傾けてくれて楽しみながら議論できるようになりました。また、相手に流されずに自分の価値観に基づく主張を貫ける留学生も多く、見習いたいと感じました。さらに、プログラム後の食事や遊びに積極的な留学生も多く、異文化交流という大枠を超えてパーソナルに交流を深めることができたのも非常に良い経験となりました。

このように本プログラムを通じて得た知見や留学生、京都大学の学生との絆は本当に貴重なものだと感じていますし、これらを将来にわたって大切にしていきたいです。そして今後は、より長期の交流プログラムに参加したり、foreignerとして海外留学したりして様々な経験を積み、視野の広い教養ある国際人になれるように、まずは英語を中心に自身の語学力をさらに磨きたいと思います。

KSP 最終レポート

農学部 1 回生

KSP 番号：202

名前：M.K.

京都サマープログラム2023では、本当に様々な経験をさせていただきました。12回あったアカデミックレクチャーでは、普段の大学生活ではなかなか受けることのできない様々な分野の講義を受けることができました。自分の専攻とは異なった分野のお話がとても多く、自分にとって新しい知識や視点をたくさん発見することができました。日本語教授実習では、初級と中級のクラスに参加させていただきました。どのようにすれば留学生の皆さんに正しく日本語をわかってもらえるかを常に意識しながら留学生の皆さんと接するのはとても難しいことでしたが、その分自分の伝えたいことがちゃんと理解してもらえた時の喜びや達成感もとても大きかったです。また、フィールドトリップでは、京都大学が管理している芦生研究林を見学させていただきました。市街地で生活しているとなかなか目を向けることのない自然の美しさや自然に関する問題など間近で体験することができ、とても貴重な経験になったと思います。文化体験では、錦市場の訪問と和菓子づくり体験をさせていただきました。どちらも日本に住んでいるからこそ逆にわざわざ体験しようとは思わないこともあり、私にとって初めての経験でした。市場訪問では、市場の中に多くのお寺や神社があったことや、内陸に位置する京都の市場に多くの魚屋さんが並んでいたことなど、日本人の私にとっても新しい発見が多く、とても楽しかったです。和菓子づくり体験では、いつもは食べるだけの和菓子を実際に自分の手で作ってみることで、和菓子をつくるのがどれだけ難しいかを身をもって体験できました。また、自分の手で、みんなと一緒に作った和菓子の味は忘れられないほどおいしかったです。

私はKUASUグループとして発表にも関わらせていただきました。高校や大学では、課題やテストの多くは個人作業なので、誰かと一緒に課題に取り組むのはとても久しぶりでした。話し合いを通してみんなでひとつのものを作り上げていくことは、困難もありましたが、それ以上に楽しかったです。

ここまでこのプログラムで体験させていただいた様々な活動について書いてきましたが、このプログラムを通して最も印象に残っているのは留学生の皆さんとの日常的な交流です。会話は基本的に英語だったのでただ話すだけでも学べることはとても多く、成長できたと感じましたが、それ以上に異文化のことを知ることによって得られたものは多かったと感じます。なにより、話をしていく中で留学生と仲良くなれたことがとてもうれしかったし、仲良くなった友人と話をすることはとても楽しかったです。この経験を通して、海外留学や国際交流に積極的に参加したいと思うようになりました。このプログラムに参加させていただき、本当にありがとうございました。もし来年もこのプログラムが行われるなら、ぜひともまた参加したいなと思います。

最終レポート

医学部 2 回生

KSP 番号：203

名前：YURINA

今回のサマープログラムは私にとってとても刺激的なものでした。特に、ディスカッションでは、いろいろな考え方に触れることができました。私自身、以前から平和の問題に大きな興味がありました。そのため、戦争と経済に関するディスカッションは非常に興味深いものでした。

「経済的には、戦争によって武器など多くの需要が生まれ、破壊された町の復旧でインフラストラクチャーがより良いものに生まれ変わるだろう」という意見がある一方、「そのような経済活動の優先のために多くの犠牲者を出すのは非人道的だ」という意見もありました。戦争に対する見方や価値観が人によって全く違い、勉強になりました。また、他の国の学生から見た日本についても非常に興味深かったです。日本では原子爆弾が落とされて終戦に向かったというような考え方もあり、潜在的に被害者意識的なものが見受けられます。日本で教育を受けている中でもなかなか日本の加害意識について聞くことは少ないように感じます。しかし、実際に日本もフィリピンで大虐殺をしたり、東アジアを中心に植民地化しようという動きがみられたりということがありました。それについて、海外学生の印象なども聞きたいと思っていました。今回のプログラムで日本の加害性について強い意見を持つ学生に出会えませんでした。韓国の中ではやはり教育を受ける中で日本に植民地支配されたというような話が大きく取り上げられたという話を聞きました。日本の教育だけでは重点の置き方が海外とは違うこともあるため、海外学生の受けてきた教育などについて聞くことはとても効果的だと感じました。それによって、いろいろな情報を集め、過去の歴史についての正しい理解や解釈につなげることができると感じました。これからは、学校で教えられていることやメディアで報道されていることだけを信賴しきるのではなく、様々な情報を探して、自分で考え判断していきたいと思います。

今回できた海外学生とのつながりを大切にしていきたいです。私は平和な世界を実現するためには、国境を越えて若者がつながり、世界に存在する課題について共通の問題意識を持ち、足並みをそろえて解決を目指すことが必要だと思います。そうすることで国家間の結びつきも強くなります。今回はその一歩として非常に有意義な時間を過ごすことができました。

My valuable experience of spending summer with various friends

Law of Faculty • B1

KSP number : 204

Name : Watanabe Soya

First of all, I want to show my appreciation to people who managed this summer program. I have never been to foreign countries in my life. In addition, I've had few chances to talk with foreign people in English until I entered Kyoto university. So, this program was very meaningful and gave me many valuable experiences. I could communicate with people who have different backgrounds in English through this program and then, as a result I feel like I can acquire some English skills I couldn't have acquired if I taken part in this program. For instance, this program told me that if I'm to improve my English, I should not be afraid of making mistakes, in particular, about speaking. Before I participated in this summer program meeting some international students, I had had a prejudice that ones who have quite different background from mine are quite different form me in the perspectives of preference, value and belief. Moreover, some of them looks quite different in terms of the appearance because of a difference between race making me have such a prejudice. After this program, however, I found that they are just the same as me, human beings, and like me in some points. I found that I don't need be very afraid of talking with them because they are not much different form me and make efforts to understand me when I try conveying my thoughts in English. Thus, I have started to feel like talking with foreign people rather than hesitating to do so. This is surely important in the situation I want to talk with Japanese as well as people who speak certain language other than Japanese. Summer program taught me another important lesson. That is a value English is a language. It is quite natural and of course I knew it as a fact, however in fact, I hadn't felt like it. Until a while ago I had studied English because I was required to take an English exam as an entrance exam of Kyoto university. So English was just a tool for me to get into university at that time. In such situation, I didn't think I needed to improve speaking skills leading to the thought that English is the letter to write or read but not language to speak. Through this summer program, I could have so many opportunities to speak English that I could understand English is a language to speak. Thanks to this program, I could make many friends who come from foreign countries as well as Japanese ones. They broadened my world and gave me new perspectives. This summer memory will surely remain in my mind even when I become an elderly gentleman!!

刺激的な夏の2週間

工学部 2 回生

KSP 番号：205

名前：kima

このプロジェクトに参加して留学生の方からも他の日本人学生からも多くの刺激を受け、自分の視野がとても広がりました。生活習慣や食文化の違いではなく、考え方や価値観の相違を肌で感じる事ができたことが大きな要因です。特に刺激を受けたのは、アカデミックレクチャーでの質疑応答です。海外では日本とは違って積極的に発言がされるということは知っていましたが、質問内容が全く違うことに驚きました。日本で質問されることの中心は、分からないところの補足説明を求めるものです。しかし留学生の方々は、講義内容に関連する話題について教授はどう思うのか意見を求めるものが多いように感じました。質問をする前に、自分自身の意見を述べていることも特徴の一つです。普段からニュースなどをしっかり理解し、それについて自分で考えて意見を持つという思考作業をしているのだと思います。この作業を繰り返すことで、自分の価値観の軸が強くなり出来上がるとともに、様々な意見を取り入れる受容力が身についているのだと感じました。自分の軸があり、かつ受容力のある人は議論の際に重要な存在となり、他者からの信頼を得ることができます。私もこのような人になりたいと強く思いました。

私は初め、このプログラムに参加することに不安がありました。英語の学習は試験用にしかしたことが無く、実際に外国に住む方と会話をしたことが無かったからです。ですがせっかくの機会だからと思い、初日からたくさんの留学生に自分から話しかけてみました。留学生の方は私のつたない英語を頑張って聞き取ってくれて、様々な話題の会話をすることができました。「コミュニケーションで大切なのは言語力ではなく、伝えようとする気持ちだ」という話は何度も聞いたことがありますが、身をもって感じたのははじめてです。会話の中で、このプログラムに参加している留学生は私が思っていた以上に日本について興味を持ってくれていることを知りました。私は幼いころから茶華道・日本舞踊・書道などの日本文化を経験してきたこともあり、とてもうれしい気持ちになりました。いろんな話をしたい、日本の文化をもっと伝えたいという気持ちが徐々に強まっていき、家に帰ってから日本文化について詳しく調べ、英語を復習するようになりました。留学生の方との交流は、多くの面で私を成長させてくれたと思います。これからの時代、外国の方とつながる機会がどんどん増えていきます。特に私が興味を持っている気候変動の原因である地球温暖化問題に取り組むためには、国際的な協調が欠かせません。より良い話し合いを行うためには互いのことを知っている必要があります。今回このプログラムに参加したことは、外国の文化や価値観に興味を持つきっかけになったと思います。それと同時に、日本の文化についても理解を深めたいと思うようになりました。日本に住んでいるにもかかわらず、いざ日本文化を説明しようとしてもわからないことが多いことに気付きました。自分たちのことを知ってもらうためにも、自分の文化への理解を深めたいです。

留学生の方からたくさんの刺激を受けて、いま私は取り組んでいきたいことがたくさんあります。中でも、国際問題に関するニュースについて自分で思考すること・英語でのコミュニケーション能力を高めること・日本文化を学ぶことの3つを積極的に行いたいと思います。そして将来、国際的な協調に貢献できる人材になりたいと思います。

京都サマープログラムと私と

工学部 1 回生
KSP 番号 : 207
名前 : N.R

私がこのプログラムに参加してよかったと思うことは3つある。

1つ目は、志の高い学生と親睦を深められたことだ。一人一人が自分のやりたいことや目標をしっかり持っており、しかもそれを銜いなく口に出せるという環境は、普段の学生生活ではなかなか得られない。多くの人と交流することができたが、物腰の柔らかさや、積極性、英語力、気配り上手などの長所がそれぞれにあり、すごいな、見習いたいと素直に思えた。そんな仲間と出会い、刺激を受けられただけでも本プログラムに参加した意義があった。

2つ目は、自分に足りていないものを見つめる機会を得られたことだ。海外からの学生とともにやる Discussion を通して、他人の発言中であっても自分がその発言に感じた疑問を即座に口に出す姿勢、国の政治や政策、現状などに関する話題で自分の意見を発言する姿勢を学んだ。特に後者に関して私は今まで、政治に関わることは、人によって様々な立場・意見があるため、多様な国の人が集まる場で自分の考えを断言すると、自分の考えが「自国を代表する意見」のように受け取られてしまうのではと考え、抵抗感を抱いていた。しかし、意見を求められる場で、曖昧な立場をとることは、まったく議論の役に立たず、そしていろいろ考えているようで逆に自分で何も考えていないということに気が付いた。結局私は、Discussion で上述のような姿勢を示すことはできなかった。だが、Discussion session among students で海外学生から、日本の政治に関する質問への回答と意見をタブレットに記入してほしいと言われた際に、きちんと自分の考えを記述することができたのは成長だと思う。

3つ目は、「海外学生から見た日本」を知れたことだ。これを知ることは私の参加動機の一つでもあったため、実現できてよかった。町がきれい、電車網が発達しているなどのよく耳にする話から、文化や経済に関する話も聞いた。興味深かったのは、アメリカの学生から聞いた、マクドナルドやケンタッキー・フライド・チキンは今や日本国内の方が人気が高く、メニューも豊富との話と、インドネシアの学生から聞いた、日本の通勤電車ではほとんどの男性が黒い靴黒い靴黒いスーツという格好をしているのが凄くおもしろいという話だ。海外を訪れたことがなく、中学から電車通学の私にとっては、通勤電車のスーツ姿の男性は当たり前の存在だった。そのため、それをおもしろがるということが私にはおもしろかった。日本に対する忌憚のない感想を聞き、自分の視座を広げることができた。ちなみにインドネシアでは会社勤めの人も、それぞれの個性を出した服装をしていることが多いそうだ。日本とはまた違った通勤風景をぜひ見てみたい。

プログラム中、11 日間ほぼ毎日1限から5限の時間大学に通うのは大変だと感じる時も確かにあった。だけど一日のプログラムが始まる度に、楽しくて刺激的な時間によって、そんな感情はすぐに消え去った。「1回生の夏休み序盤」という今後の学生生活における夏休みの在り方を決定づけかねない重要な時期に、期間中はあつという間に感じたが、思い返してみると1か月くらいあったのではないかと感じるほどに充実した日々を過ごすことができて本当によかった。

Being Exposed on the Great Stimulus from the All the Participates

KSP number : 208

Name: : Kaho

My main purpose to join The Kyoto Summer Program was making friends and communicating in English so that I can know the other countries and its culture. In addition, I thought this is a great opportunity to imagine the life of the studying abroad because I really aspire to study abroad. The interaction with those who have various background gave me a lot of invaluable things.

One of them was that the daily communication and discussions about many kinds of topics made me realize my own stereotypes and ignorance. In terms of my bias, I was really surprised when I heard that the housework are done by the housekeepers in China mainly because I did not expect that employing housekeepers are common in China. Additionally, I found that many Japanese women have unique perspective toward the marriage compared to other Eastern Asian countries. In the discussion section we Japanese students explained the exchange students that many Japanese women still hope to marry with so-called high speck man, leading low percentage of the female students who are engaged in the higher education such as universities. The exchange students looked so surprised and to feel so strange. When it comes to my ignorance, I bitterly realize that I do not consider even popular topics deeply, especially what I am not interested in. Since I started to love alone, I have fewer opportunities to read or hear news because now I need to correct information spontaneously. I could not express my opinion just because I do not have my concrete opinion due to the lack of the information and knowledge. To sum up, the activities of this program helped me to review myself.

The other of them was that I learned how to make my opinion and presentation interesting and clear to understand. The final presentations by the international students were ideal model of my presentation in the points of making slides and gestures. Still, I have not got used to making presentations in front of others, so every time I felt that the audience appeared bored. Moreover, the professors showed me the importance of the good command of English and of attracting audience. Just explaining academic things never engage people in the lecture and answering questions properly in English is really crucial to maintain the atmosphere exciting. I found that to make my opinions or questions clear and easy to understand briefly stating and repeat the main point again at the end of the saying are useful. As I mentioned above, I could grasp some tips that are helpful for my future academic carrier in this program.

I partly archived what I would like to do in the studying abroad and realized the necessity of my English improvement. My next goal is expressing my opinions more frequently and replying to what others say in some sentences. As I did so far, I would like to keep making friends who are from foreign countries so that I obtain proper understandings about the other culture as well as my own culture. (507 words)

サマープロジェクトで見た自分の課題

総合人間学部 1 年

K S P 番号 : 209

名前 : Canon

今回のサマープログラムを通して、私は他人の話を聞くことが多く、Discussion の時間も留学生が話す意見に賛成したり、留学生が先に母国の現状や問題を話してその後こちら側が日本のことを話したり比べたりすることがほとんどであった。もちろん留学生たちは日本に興味を持ってこのプログラムに参加していて、彼らの日本語を学ぶ熱意や日本の文化を知ろうとする姿勢にも非常に驚かされたが、自分から発言することがとても少なく、自分自身が発言する事に対してハードルがあるように無意識に感じていることに気が付けた。Discussion や講義での質問などで他人に対して発言するというのはそのテーマに対する日ごろからの興味関心、自分の意見がなければ難しいことであると思うが、私はそのような考えからなかなか積極的に発言できず受け身になりがちであったし、留学生と私たち日本人学生の積極性の違いは全ての場面に当てはまるわけではないが、顕著なものだったと感じた。私は今まで英語力にあまり自信を持てず、最初に Discussion に参加した日は周囲の人の話を聞くことに必死になって 1 回しか発言できなかった。しかし実際は文法や単語のレベルの違いが大きいのではなく話す意欲が大きな違いを生んでいて、私が必死に周りの話を聞いて内容を理解しようとしていたのと同じように留学生もこちらの話を理解しようとしてくれていることに気が付いたので、2 回目以降は自分から発言しようと気持ちを改められた。また、自分の意見を言うとき、なんといえ伝わるか、英語で何と伝えたいのかを考えていると話が進んでしまい言えなくなる場面もあり、討論の時に意見を言い慣れることがいかに大切かも分かった。発言する前にためらってしまうのは経験値の違いが大きいからだと思うし、自分は今まで英語で討論する経験がなく、勝手に崇高なイメージを抱いていたので実際に経験して大きな気づきを得られたので今回のサマープログラムに参加した意義は大きい。これから私は留学したいので英語の勉強をしようと考えていたが、それも点数や座学などよりも実用的な学びにしようと思ったし、留学するための英語を身に着ける段階ではないと思うので、留学した先で自分の体験が深いものになるような教養や積極的な姿勢も見につけようと思う。今回のプログラムを通してできた友人とは宗教のことや相手の通う大学のことなど色々話をして、京都大学の食堂などに驚いていたので、次は自分がその友達に会いに行きたい。

KSP から得た将来の展望など

文学部 1 年生

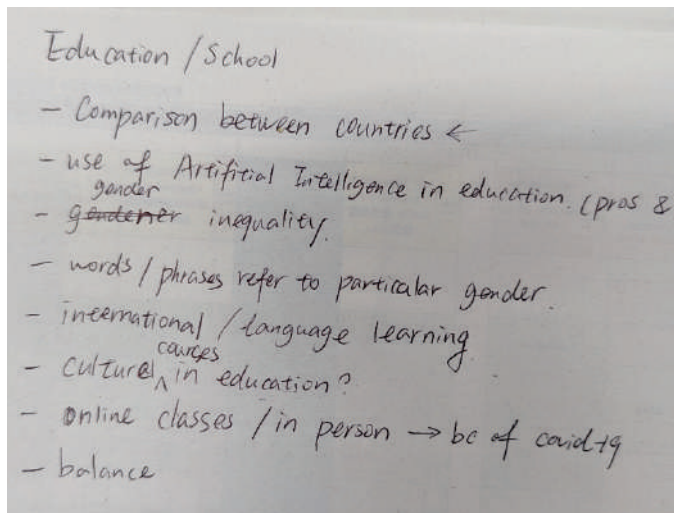
KSP 番号：210

名前：massan

京都サマープログラム(以下、KSP)を通して学んだことなどを記させていただきます。

〔KUASU 発表について〕

KUASU 発表準備講座の一回目では、軽い自己紹介の後、大テーマを「教育」にしぼり、発表の内容を考えました。その際からチームの皆さんが建設的な意見を出してくれたおかげで以降の発表準備がスムーズに進みました(以下の写真を参照してください)。皆で教育に関連した社会問題(例：学部間の性差、「リケジョ」といった言葉など)を多く挙げる事ができたので、日本だけではなく各国の教育事情を知ることができたとともに、発表テーマの「大学受験」を決定することができました。そして、私は日本の大学受験についてまとめるだけではなく、留学生の日本語についての質問にも答えるなど、チームに貢献できたと思います。そして発表本番は練習の成果もあって、1 分半ほど伸びてしまったもののほとんど時間通りに行き、満足のいくものでした。



左の写真は最初の発表準備で話し合った内容のメモです。

〔KUASU ディスカッションについて〕

私は KUASU ディスカッションのファシリテーターを担当し、大テーマとして「戦争と平和」が割り当てられました。ですが、このテーマはとても難しく、センシティブになり過ぎないようにしつつも核心を突く小テーマ(「国連を通して平和を考える」)の決定にかなりの時間を費やしました。情報が偏らないように、日本の新聞だけではなく英字新聞にも目を通し、ディスカッション用のスライドを作成しました。この経験を通して、私も日本で報道される情報の偏りに気づかされ、至らなさを痛感しました。また、ディスカッション当日では、グループの留学生・日本人学生のおかげで深い内容まで踏み込んで考えることもできました。発表は時間不足のせいで少し物足りなかったと感じますが、留学生の頭の片隅に少しでも残ってくれるものであったと思います。

〔留学生との交流について〕

今回の KSP を通じて、私は KUASU のグループのメンバーだけではなく、ILAS の歴史学専攻の留学生(特に中国の学生)とも仲良くなることができました。私は初対面のかたと日本語でさえ緊張してうまく話せないことがコンプレックスでしたが、今回の KSP では日本語実習やアカデミックレクチャーなどを通して留学生のかたと英語で話して打ち解けることができたと思います。とくに、中国の留学生とは張先生の東洋史 Lab 訪問以外でも、近代日中関係の歴史や中国が日本から輸入した言葉(例：経済，化学，哲学など)などの会話をしたり、高台寺を訪れたり、一緒に夜ご飯を食べたりするなど仲良くなることができました。私は、東洋史に興味があるので、これらの話は将来の研究に新たな視点を与えてくれる印象的なものでした。



Completing Kyoto Summer Program

総合人間学部 3 回生

KSP No : 211

Name : Toshiya

During this program, I was really surprised at other Kyoto University students' eagerness to communicate with international students in English. KU students, including me, are not always as proficient at speaking English as international students. On the contrary, their enthusiasm for cross-cultural communication seems to be even more zealous. I heard that this program was so competitive, and suppose KU participants getting into this program are particularly international-minded and keen to interact with people from other countries. It is often said that English education in Japan focuses on reading and listening so much that it fails to cultivate speaking skills. In contrast, students from other countries, at least to me, seem to firstly brush up their speaking skills, especially conversational ones. Some international students, not only in this program but also in regular classes, have few problems in grammar or fluency despite not having an affluent vocabulary. When I was in a group discussion with international students in another class, one of them spoke the technical word "bureaucracy". However, he could not write down the word in the correct spelling. In addition to it, I have encountered similar cases several times. It seems to me that the first step to starting

English learning is different between Japanese and foreign people. The former first begins with memorizing grammar or words by using vocabulary notebooks, while practical oral communication is the first training for the latter. More straightforwardly speaking, Japanese students apply reading or writing skills to speaking, and international students are the opposite. One newspaper article showed that most junior high school students in Japan cannot do well on the English-speaking test in the national academic achievement survey (approximately 60% of subjects got 0 pt in some questions). The main reason for this is, according to the questionnaire survey for students, the problem in their vocabulary or ability to quickly make sentences. I suppose this kind of poor-speaking problem results from English education in Japan which prioritizes “comprehension” rather than “utilization”. Christiansen and Chater (2022) revealed that verbal communication is created through improvisation and intrinsically lacking in supreme grammar or sentence structure (Christiansen & Chater, 2022). I indeed saw many times similar cases; Japanese students (of course including me) attempted to convey their thought to international students by impromptu usage of their limited vocabulary and grammar, like connecting words to make sentences without being conscious of grammatical correctness. This suggests that we need to offer conversation training, especially free chat or discussion, to improve Japanese students’ speaking skills. We appear to use different parts of our brain or functional circuit of it for different abilities, comprehension (reading) and utilization (speaking). Since reading reference materials and grasping their contents are fundamental in academic research, comprehension skill and our existing education cultivating it are needless to say essential. Despite its importance, we also must provide more educational opportunities for improving students’ speaking (or, more specifically, conversation) skills. Kyoto Summer Program is suitable for it. High competition for this program implies that a considerable number of potential KU students demand opportunities to brush up their English skills, to make themselves more international-minded, or simply to make friends with international students through their common hobbies. It would be favorable if more chances like this program are offered.

Throughout this program, I again feel the significance of interacting with various students majoring in various study areas. Most participants are freshmen or sophomores and do not have specific majors yet, the topics of their chat are therefore extremely various ranging from daily news about technology or international affairs to basic philosophy and biology. I am a junior now and already assigned to a geographical study laboratory, so the conversation topics there are necessarily converged into what is directly related to our major such as transportation or travel experience (actually I am a bit sick of such nerdy conversation so this program was fresh for me). As Professor Kitagawa expressed in his lecture (and I asked a question to him), it is crucial for students, especially undergraduate students, to learn and gain knowledge from as many study areas as possible. This will contribute to their multilateral and open-minded point of view. Aside from interaction with international students, this program itself having various academic lectures is the utmost situation for exchanging a variety of ideas and thoughts. Although liberal arts and science classes undoubtedly contribute to a certain degree, I feel it is not sufficient and focuses on mainly input and not output. I again felt that such a casual but educated cross-sectional discussion enriches students’ minds.

As implied in the previous paragraph, my specialization is geography and Japanese history and I would like to be a researcher in the future. Another surprising point for me is that international

students are interested in Japanese culture and traditions more than I expected (some participants even consider going to graduate school at Japanese universities). In contrast to such popularity of “Japan”, it seems to me that at our university, if all over Japan, there is not enough turnout who can give accurate and detailed information about Japan in English. Specialization of the laboratories which we visited during the Graduate Lab Visit session was sociology, natural science, psychology, and world history, and therefore not Japanese studies. I do by no means mean to deny the existence and importance of Japanese studies done by overseas researchers or Japanese ones who endeavor to spread their achievements. In fact, Professor Yukawa gave a brilliant lecture in English about the seasonal sense of Japanese people expressed in classic literature. However, researchers on Japanese history and culture are particularly not willing to express their research achievements to international academia unless specialize in international history or the dissemination of Japanese culture to other countries. Moreover, the potential of geography seems not to be utilized. It is often said that geography is a study with a wide frontage that novices can easily start (geography courses at our university are markedly popular compared to other liberal arts and sciences courses), and I am all for this point. As Relph (1976) said, a sense of place is indispensable for our identity, personality, and even instinct (Relph, 1976). Thus, it is possible to develop geographical studies from our simple questions about daily geographic matters (e.g. Why is Demachiyana station here? What was Kyoto city like in the past?). Using visual images like maps or photos or exploration-like field research is also effective in attracting novice students. Given these characteristics, in my view, it is suitable for liberal arts and sciences education programs like Kyoto Summer Program. I am considering attending a graduate school abroad in the future, and I felt that I would like to become a researcher who can actively contribute to the international dissemination of research on Japanese history and culture, as well as teach attractive and instructive liberal arts courses using geography.

I apologize for spelling my thought or just feelings in a rambling way like a miscellaneous essay by a philosopher. Due to my poor English writing skills, I regret failing to put my thought in concise and beautiful sentences. In my usual advanced course report, I research and compare a variety of reference materials to create a report that emphasizes logical development, but this time I dared to focus on my own thoughts and impressions without citing many references. From my own experience, I think that at opportunities for international exchange among students, not only our English education but also other problems in Japan compared to the international community are often critically discussed. In my opinion, however, the purpose of exchanging opinions is to compare situations in each country with some respect and not to deny or reject a specific one. Rather than blindly deploring and criticizing the situation in Japan, it is important to understand the background and advantages of the existing system, recognize the differences with other countries, and seek an objective response. There is one Japanese proverb, “Cherish the harmony among people (和を以て貴しとなす)”. In this age of globalization and diversity, I feel that this tolerance to recognize everything rationally, without denying it radically, is the key. At the end of this essay, I show gratitude to all academic staff and student leaders who prepare for this great Kyoto Summer Program. Next year, I in turn would like to work as a leader of this program.

References

- Christiansen, M. H., & Chater, N. (2022). *The Language Game: How Improvisation Created Language and Changed the World* (1 ed.). Basic Books.
- Relph, E. (1976). *Place and Placelessness* (1 ed.). Pion.

最終レポート

総合人間学部 1 年

KSP 番号 : 212

氏名 : Kurumi

今回のサマープログラムを通して、私は 2 つのことを学んだ。1 つ目はコミュニケーションをとるツールとしての英語の使い方だ。私は KUASE の最終発表に参加した。発表自体は日本語で行うものの、留学生たちとプレゼンの内容をすり合わせる際にはやはり英語でコミュニケーションをとる必要があった。このとき、実際に英語で会話しようとするとうまく言葉が出てこなくなってしまうし、相手が言っていることすらも十分に聞き取ることはできなくて最初はとても焦り、ショックを受けた。いままでは受験のための英語を勉強していたので、いかに文法的に間違えず、正確でスマートな英語を使うかということに重点を置いていた。しかし今回は、なんとか相手の言いたいことをくみ取るためになんども聞き返したり、自分の伝えたいことをなんとか分かってもらおうと、文法が全くなっていない状態で思いつく限りの単語を並べたり、ジェスチャーを付け加えたりした。まったくスマートな英語ではないけれど、やり取りを繰り返すうちにだんだんとスムーズに意思疎通をはかれるようになった。完璧でなくとも伝え方次第で言語は伝わるということや、わからないことはわかったふりをするのではなく、素直に理解できるまで聞き返すべきだということを実感した。この経験を通して、英語を使うことへの自分の中のハードルが下がった一方で、やはりアカデミックレクチャーなどで積極的に講義内容について英語で質問しているほかの受講者の姿を見ているともっと頑張ろうと思った。2 つ目は日本の文化についてだ。私たちの班は KUASE の最終発表で各国のお正月の違いについてプレゼンした。私は日本のお正月について紹介するパートを担当したのだが、自国のことながら、調べる過程で全く知らないことがたくさんでてきて、驚いた。また cultural experience で、午前中は錦市場に行ったのだが、それに際して日本の商店街の成り立ちや変遷を学ぶことができたし、実際の商店街の活気の良さを肌で感じることもできた。午後の和菓子作り体験ではすこし敷居が高いなと感じていた京菓子を実際に自分で作ったことで、材料さえあれば意外に簡単に楽しく作ることができると分かり、京菓子を身近に感じることもできた。今回、留学生との交流を通して日本とほかの国の違いを感じられたことに加えて、その過程で日本のことについてもより知ることができたということと、自国の文化についての深い知識があったほうがよりよい国際交流ができそうだということに気づけたということにおいて、とても実りある経験をすることができた。

最終レポート

農学部 1 回生

KSP 番号：213

名前：Mayu

このプログラムを通じて積極性の大切さを実感した。積極性という言葉そのものは稚拙な響きがあるが、ここで言いたいのは「国際基準の」積極性である。高校まで日本で過ごしてきた私にとって、積極性とはこのサマープログラムに参加したり、通訳に立候補したりすることを意味していた。勿論それらが積極性に含まれることに誤りはないのだが、国際的な積極性の基準はより高い水準にあることに気付かされた。例えば、プログラム参加初日に Discussion in English に参加した私は、4人グループ内で少なくとも1回は意見を述べ、グループごとの順番が回ってきたら自分が代表として発言したいと考えていた。それが高校までで評価されてきた日本仕様の積極性だったからだ。しかし実際には、各グループの代表者が発言するごとに他のグループから反対意見や質問が飛び交い、その中で他のグループの意見が提示されるというスタイルが標準化していった。私自身は自分の英語力に自信がもてなかったため、そうした環境の中で発言することができず、自分の意見のみならず同じグループのメンバーの意見すらも無駄にしてしまった（参加者全体に提示することができなかった）。

これではダメだと思ったが、多くの人の前ですぐに英語で発言する勇気は得られないと考え、まずは周りの人と仲良くなることに重点を置いた。留学生の子を自分から誘って一緒に食事し、留学生から誘ってもらったカラオケやショッピングには必ず参加するようにした。そうするうちに授業内外どちらでも発言することへのハードルが下がり、今まで話していなかった留学生とも新たに友達になれる、という好循環が生まれた。また、自分にとって何がわからない部分なのかを意識してレクチャーを聞いたり、自分にとってどのようなポリシーに反するのかを意識してディスカッションしたりできたため、深い学びに繋げることもできた。このように、自分の学びを充実させるには自分自身の積極性が不可欠であると身をもって体験できた。

将来は国際的な場で活躍したいと考えているため、今回のプログラムを通じて国際的な基準に適応する経験ができたことは非常に貴重であった。今後、京大での授業や留学を通じて多様なバックグラウンドをもつ学生たちと学びに取り組む機会が増えると思うが、それらに「参加する」ことを目的としたりそれだけに満足したりせず、「積極的に」参加した上で何を得るかを意識しながら取り組みたいと考えている。

最後にこのように貴重な機会をくださった先生がた、サポートしてくださった先輩がた、友達になってくれた留学生の皆様に心より感謝申し上げます。2週間楽しい時間をありがとうございました。(1094 words)

京都サマープログラムでの経験

総合人間学部・1年

KSP 番号：214

名前：eleven

この京都サマープログラムを実際に受講してみて感じた一番の良さは、留学生と京都で学ぶ機会を持てるということだ。私自身在学习中に留学したいと思っており、英語力向上や国際交流などの、留学準備段階としてこのプログラムに申し込んだ。京都で留学生たちと日本、京都の文化を学ぶことで、自分では気が付かなかった日本の新しい発見や、まだまだ日本について知らないことが多くあることを学んだ。例えば、カラオケや花火、サークル活動は、ほかの国では日本ほど活発じゃないそうだ。これは世界に行く前に気が付けて非常に良かったと思う。単なる言語学習だけではないことを学ぶことができた。世界のことを理解するには、まず自分の国、地域の文化をしっかり理解する必要がある。京都という日本の中で最も歴史ある都市の大学に通っていることを生かせるプログラムであったと考える。

プログラムの中で最も難しかったことは、英語でのディスカッションである。もともと英語が好きで今まで大学入試のために勉強してきたが、いざ話すとなると自分の思っていた以上に言葉がでてこなかった。理解できて考えがあっても、自分の言いたいことの半分も言うことができず、悔しい思いをした。英語を頑張ろうとすると考えが止まり、考えると英語で話すことができなくなった。その場でいかに自分の考えを英語で話すことの難しさがわかった。そして、非英語圏の留学生たちもすらすらと英語で話していて刺激になった。夏にこの課題を直に感じることもできたのはよかったと思う。また、完璧な英語でなくても、恐れずに自分の最大限の英語で伝えるという訓練にもなった。今後の実践的な英語学習のモチベーションとなるだろう。

私がこのプログラムで得られた一番の財産は、やはり、留学生たちとの出会いである。プログラム内の授業や活動も財産だが、何よりさまざまな地域からの留学生たちと2週間、一緒に勉強したり、ご飯を食べたり、花火をしたり、カラオケに行ったり、話をしたりして交流できたことは、普段学部生として生活するときにはできない経験であり、将来にも非常に意味を持つ貴重な経験であった。教科書や動画では決して得ることのできない経験であった。この経験を生かしてもっと視野の広い、国際的に活躍できる人間に成長したい。

最後にこのプログラムを企画、運営して下さった先生方、リーダーさんたち、貴重な経験を本当にありがとうございました。

最終レポート

京都大学教育学部 2 回

KSP 番号：216

名前：Haruka

このプログラムに参加して一番強く感じたことは、言語をフレキシブルに使えることの有用さである。日本に住んでいると、たいていの場合日本語しか使う場面はない。しかし今回のプログラムに関わった多くの海外学生は、それぞれあらゆる文化的背景を持っていて、少なくとも 3 か国語、多ければ 5 か国語を自由自在に使いこなしていた。もちろんその中には、必ずと言っていいほど英語が含まれていた。今回のプログラムに参加する京大生は語学力不問ということもあり、英語が得意な学生から私のようにあまり得意でない学生まで幅広く参加していたが、「英語をもっと自由に使えれば」と痛感する場面は何度もあった。巷でよく言われるよう、拙い英語でも確かに伝わりはする。しかしその英語を理解し分かりやすく返さなければいけないという点で、相手の負担は大きくなるだろう。相手に負担をかけることは、円滑なコミュニケーションを営むうえで障壁になると私は考える。そのためたとえ通じるとしても、相手に負担をかけさせないために私は自分の英語力を上げていきたいと強く思った。しかしこのプログラムが語学力不問であったからこそ、私はこのことについて身をもって実感し、英語を学ぶ大きなモチベーションを得ることができた。その点、このプログラムの参加条件にはとても感謝している。

また、短期間のプログラムの中で講義や文化体験をできる限り多く履修したこともいい方向に働いた。実際、日本語教授実習では各レベルの授業に参加でき、レベルごとの難しさを感じることができた。日本語を俯瞰的に見る機会はなかなかないので、日本人の私からしても意義のある時間だったように思う。文化体験や Field Trip でも、普段の授業ではできない研究林の探検や文化的建物の散策をすることができ、有意義な時間だった。

このプログラムに参加するまで留学にはあまり興味がなく、海外に出なくても日本でたくさん学べることはあると思い込み、留学についての情報も大して集めずにいた。しかし参加して、今は留学に強く惹かれている。たしかに国内でも学びを深めることはできるだろう。けれど私は、大きく環境の異なる場所で、異なる文化的背景を持つ海外の人と意見交換をたくさんして知見を広げる経験を、一度でもいいからしてみたいと思う。挫折もあると思うが、自分の努力次第で実りのあるものにできると感じる。残された大学生の時間を、より意義のある時間にできるよう、これからの計画を練り直そうと思った。たった 2 週間だったが、このプログラムに参加した経験は私の大学生活の分岐点となるだろう。それぐらい刺激的で、楽しくて、学びのある時間だった。この経験が無駄にせず、グローバルな学びをこの先も意識したいと思う。(1122 語)

学習成果について

まず、アカデミックレクチャーの内容に大いに刺激を受けた。中でも、関山先生の「失われた 30 年」の授業で、日本の経済に興味を持った。これは、Discussion in English で日本の問題について考える際に、あらゆるところで日本経済の停滞が問題として出てくことや、個人的にちょうど家族と日本経済の停滞要因について話していたことなどが重なったことも要因である。この授業では、「「経済」とは何か？」というかなり基礎的なところから説明して下さったこともあり、失われた 30 年の詳しい経過などは知ることができなかったが、自分で知ろうと思えるきっかけになった。自分なりの意見を授業後に先生に聞きに行くこともでき、お話しできたのも良かった。文学部としてこのトピックに関してできるアプローチはいろいろあると思うが、戦後の歴史を追っていくことがまずあると思う。戦後のアメリカとの貿易摩擦、GHQ との関係など、「失われた 30 年」に関して様々な言説を聞いたことがあるので、どれが妥当な説なのかを、自分で考えたい。ここから、今の日本の政治が採るべき姿勢を明らかにできると思うからだ。何となく進路に迷っていたが、自分のやってみたいかもしれないことができたので、この夏とりあえず現代史に関わる本を読んで勉強しようと思っている。

他にも、近藤先生の授業で、環境問題など時代毎に存在する問題は、常にテクノロジーによって改善され続けてきたことが分かった。理系のやることは常に将来を見据えていてすごいなあ、と思ったが、授業後に先生に質問すると、文系の学問也大いにそういった問題の解決には必要になってくるらしい。例えば地理学は、その土地の持つ歴史性や土地の特徴を研究するから、現在発生している問題を解決するのに不可欠になる。そうした話を聞き、地理学にも興味が出たので、ひとまず入門書を借りた。この夏読もうと思う。

ILAS の final presentation で、ヨンセイ大学の Su さんが話していたことが印象的だった。正直、人文学を学ぶ意義が、文学部に所属していながらわからなくなっていた。理系などの学問は分かりやすく社会の発展に寄与するものが多いと思う。先ほど言ったテクノロジーの発展などである。一方、文学部の学問は、特に文学研究など、正直社会の役に立つかわれれば、よくわからない。別に訳に立つ必要性は必ずしもないと私は思っている。しかし、学ぶ中で、なんのためにやっているのだろう、という思いはあった。しかし、彼女の言っていた通り、理系は「どうやって」を考える学問で、人文学は「なぜ」を考える学問である。この彼女のスピーチと、近藤先生の授業は、私にとって示唆的なものだった。理系の学問が「どうやって」社会に存在する問題を解決しようかと考える際には、「なぜ」そうなっているのか、という人文学的な見地が必要になる。学問分野は分けられているが、双方の協力なしでは成り立たないことが多いだろう。そのことが腑に落ちた。文学研究だって、湯川先生の授業を英語で受けてみてわかったことだが、ある国の文学を読み解くことは、その国の文化や国民性を理解するのにつながり、現在あるその国の人々の特質について考察する際に役立つと思う。何でもかんでもこういった「役に立つ」というような実利的な側面に注目するのはナンセンスだと思うが、学問的価値を見出しにくくなっていた中、私にとって示唆的な授業が多かった。

プログラムの感想

主に英語のスキル向上を狙ってこの授業を取った。実際に参加してみると、周りの海外学生は皆英語で話していて（当たり前）、最初はかなり怖気づいてしまった。授業やディスカッションも、全体での発表では3割くらいしか内容を理解できず、自分のスキルの低さをやはり実感した。しかしながら、参加していた留学生は皆理解があり、私のつたない英語でも理解しようと努めてくれ、自分で話したいことはつたないなりに頑張ると、しっかりコミュニケーションできたのでうれしかった。授業の中、特に Discussion in English では、アメリカ、台湾、香港、中国、韓国などから来た学生と話せたことで、非常に面白い発見が多くあった。中でも印象的なのは、日本の女性の社会進出の低さである。日本のジェンダーギャップ指数ランキングが地を這っているのは知っていたが、京都大学の全生徒に占める女子学生の割合が20パーセントほどだといったときの海外学生の驚きようには私が驚かされた。レベルが高い大学では女子生徒の割合が少ないという事実特に違和感を持っていなかったのが、他国ではそうではないと知って驚いた。ほかにも日本の移民・難民に対する関心の低さなど、他国と比較して初めてわかる日本の側面というのはたくさんあるのだと実感した。こうしたトピックについては、プログラム内だけでなく、ランチタイムや放課後など自由時間でも話し合うことができた。ジェンダー問題や同性婚について台湾の子と話し合い、歴史の教え方についてドイツ出身の子と話し合えた。どれも私が知りたかったこと、全く知らなかったことばかりで、大変面白かったし、貴重な話だった。そして、私が話した留学生は皆、私の質問に対して自分の答えを持っていて、自分の国についての理解や解釈をしっかりと持っていた。このことは私にとってとても刺激的だった。同じくらいの年齢の人たちのはずなのに、今の日本で、ここまで日本の現状について真剣に考えて自分の意見をもっている若者はどれだけいるだろう？もちろんこのプログラムに参加するような学生は皆勤勉でそういったことに興味を持った人しかいないだろうが、それにしてもみんなの意見には感心したし、私ももっと日本について考えようと思った。こうした気づきすべては、英語のコミュニケーションを通じて得られたものなので、頑張って話すと、こういった少し難しいトピックについても十分話し合えるのだと分かってよかった。

様々な学びがあったが、留学生たちとカラオケに行ったり、ゲームセンターに行ったり、そうした遊びをする中で分かったのは、別に言語や文化が違えど、同じノリで仲良くなることができるということだ。違う国の友人がいないと、何となく自分と相手（海外の人々）は違う存在なのかと思ってしまう節があると思う。理解することができない存在なのかと思ってしまう。しかし、国籍関係なく同じおふざけのノリで遊ぶことができたのを考えると、我々は皆同じような感性を持った人間なのだった。戦争についてのディスカッションで、違う国の人と友達になる、という意見があったが、本当にそうで、みんなもっと海外に友人を作れば、憎みあうことも減るだろうに、と思った。

英語のスキルに関しては、つたないとはいえ、プログラムの最後には結構英語に慣れ、英語を話すのもそれほど抵抗が無くなっていた（家に帰ってからも日本語に混ざって自然と英語が出てきたほど）。ここでつかんだ感覚を忘れたくはないので、今後E2科目を取るなり留学生を交流をするなどして、スキルの維持に努めたい。

将来への影響

まず、留学についてあまり具体的に考えていなかったが、本格的に視野に入れ始めた。きっかけはもちろん先述したような留学生との交わりもあるが、このプログラムに参加していた京都大

学の学生同士で、たくさん留学プログラムについての情報交換ができたことが大きい。このプログラムに参加していた日本人学生は、留学予定がある人や経験のある人が多く、また学問的な興味関心を広く持った、バイタリティにあふれる人が多かったので、非常に刺激を受けた。私がいつも属している人たちはそれほど留学に積極的なタイプではないので、このプログラムではアツい人たちが多くて得るものが多かった。

もっと大局的に見れば、このプログラムを通じて、今後ずっと海外との直接的なかかわりを持ち続けたいと思うようになった。具体的に言うと、新しくできた海外の友人と連絡を取り続けたり、海外の人との交流機会には積極的に参加したりするということである。日本の現状を知るためには、海外の現状と比較する必要がある。河合先生の授業でもあった通り、自国のことは見えづらい。海外のことを知って、日本のことを知る。そういうことを続けていきたいと思った。

Kyoto summer program final report

工学部 1 回生

KSP 番号 : 218

名前 : Shuta YAMADA

What I learned through this program

The reason I applied to this program was because I want to communicate with competent students from other cultural backgrounds and know what they are thinking. However, when I look back on the past two weeks, I realize that I learn much more things through this program, which is diversity and different perspectives.

As I expected, international students have strong willingness and curiosity to learn. I was surprised of enthusiasm and ability to take action of the student from Taiwan. He majors public health, but also has interest in economics and informatics. That's why he invested a lot of money - although he ended up losing it all- and learned many programming languages. Listening about his challenges, I decided to take action as soon as possible if there are the chance to fail. Indeed, there are thousands of books about this kind of story, but listening to the story from the one who experienced and enjoyed the process was the most inspiring thing for me.

Also, there are a lot of KU students who have ambitions. Actually, I was somewhat disappointed to how students around me have low motivation to anything in the first semester. But, I could met many students who share next goal or interest in academic matters. For example, some student are learning Mandarin so hard since he have strong interest in oriental history and want to study abroad to China. I even think just able to get to know them makes participating in this program worth it.

In conclusion, I could learn a lot of things from both international and KU students and that things make me more interested in participating in international program like this. I will make full use of them and hope to participate this event as a leader sometime.

Opinion

I have 3 opinions about this program.

Firstly, lecturers should provide students with detailed slides of their lecture. Some KU students (including me) had difficulty to follow the lecture due to the lack of English ability and may spend 2 hours doing nothing. Of course, how much students can understand English is a personal matter, but since this program do not require any English ability, this program should be friendly to those who are not proficient in English.

Secondly, the time schedule of KUASU cultural experience, Nishiki market visit, was not ideal. Along with the schedule, students can go sightseeing there at around 10AM but at that time, most stores are not opened yet and therefore less people are visiting there, so international students cannot experience the true vibrancy of the market. Also, I felt some international students felt unfair about the difference in activities between KUASU and ILAS. Some of KUASU students complaint that they cannot wear Kimono in the program. From these points, I suggest doing the same Kimono activity for both groups instead of Nishiki market visit. For the afternoon activity, though I do not know how KUASU students felt about it because I participated in ILAS Wagashi experience, I think at least Wagashi activity have a good reputation among students.

そして、3 つ目は学生が互いに交流する時間はもう少し確保されていてもよかったのではないかと思います。講義やディスカッションでもお互いの考え方を深めることはできるのですが、話題を制限されずに自由に話す場でしかできない交流もあると思います。そこで、プログラム内の活動の取捨選択の自由度を減らしたり、プログラム内の活動を選ぶ前に交流会を実施したりして学生たちの自由時間が合わせやすくするとより交流の時間をふやすことができると思います。

京都サマープログラムを通して

総合人間学部 1 年

KSP 番号：220

名前：Mihiro

京都サマープログラムでは、授業やディスカッション、休み時間などを通して、様々なバックグラウンドを持つ海外学生と共に学び、討論し、交流をすることができた。

なかでも私が最も良い経験になったと感じたのは、海外学生と一緒にディスカッションをする時間であった。様々な国から来た学生と話し、多くの新しい考えを得ることができた。例えば移民について、移民側が自国の文化を捨ててまで受け入れ先の文化に馴染む必要があるのかという疑問が出されたとき、私はすごく驚いた。“同じ”であることが好まれがちな日本社会で生きてきて、周りに合わせることによって馴染むことが快適に暮らすために大切だという考えを当然のように持っていたことを自覚するとともに、文化の違いを尊重し合いながら互いに理解を深めていくという選択肢が移民にも存在することを認識させられた。また、実際に移民の両親を持つアメリカ人学生の実体験を聞いたり、ペットについてのディスカッションでは、ペット先進国であるドイツ出身の学生からドイツでのペットの扱いについて聞いたりすることで、グループとしての考えの幅を広げるとともに議論に具体性を出すことができた。逆に自分の考えや日本での経験が海外学生の共感や驚きを呼ぶこともあり、このディスカッションの時間を通して様々なバックグラウンドを持つ人同士で話し合うことの有用性を学ぶことができた。

授業時間外の会話においては、他国の文化について多く学ぶことができた。例えば、中国でも両親の名前の漢字を組み合わせて名前を作ることがあると聞き、親近感を感じた。また、インドネシアでは多くの言語が話されていたり、名字を持たない人が多かったりすると聞き、日本との違いに驚いた。

海外についてだけでなく、日本についても多くのことを学んだ。日本語教授実習では敬語や活用、表現における日本語の難しさを学び、アカデミックレクチャーでは、学校で鯨肉を食べたり集団生活での心得を習ったりする日本の特殊性を学ぶことができた。また海外学生のファイナルプレゼンテーションでは、多くの学生が自国と日本を比較したり、それぞれの視点から日本について話したりしており、すごく興味深かった。庭、電車、街路樹などについての比較や琉球王国、宗教についての分析は着眼点から面白く、もっと長く聞いていたかった。

私は今後、海外の人とも協力して国際問題に取り組む仕事につきたいと考えている。今回のプログラムで国際問題や日本についての新しい考え、他国の文化について学び得られた、視野の広がりや新しい知見、また、国境の壁を超えて友達を作ることができるという事実を忘れず、将来に活かしていきたい。

サマープログラムを終えて

法学部一回生

KSP 番号：221

名前：Mari

今回のプログラムが自分にとって良かったと思う点は3つある。

1つは、英語力向上のきっかけとなるプログラムであったということだ。大学受験としての英語は好きだったが、実際に英語を使って人と関わる機会が圧倒的に足りないと感じたのが、私がサマープログラムに参加した理由だ。最初のうちは、実際に英語でディスカッションをするときや、普通の会話でさえも上手く聞いたり話したりすることができなかったが、何とかして意思疎通をはかりたいと集中することができた。自分の考えていることを表現できず、相手の意図が分からないのは大きなストレスではあったが、その分もっと英語の勉強をしようというモチベーションにつながった。また Academic Lecture で教授方による高度な講義を英語で聴くなど、今までの人生で一番、長期間集中して英語に触れあった機関だったと思う。

2つ目は、様々な国の文化や価値観を学んだということだ。留学生と話す中でそれぞれの国のことを知れた。例えば、中国の北京大学は王朝の庭を有しているため、大きな池があることや、今はコロナの感染拡大を防ぐため大学関係者しか入れないこと、大学内に食堂が10個以上あり、色々な地域の食事が楽しめることが分かった。他にはドイツでは教会が仲介となるから、家の中、自分1人で祈ってはいけず、タイでは日本語や中国語、韓国語などのアジアの言語が第2外国語として人気だそうだ。日本と同じ様な話もあれば、全く違っていてびっくりする話もあった。とても興味深かったし、違いを不愉快なものではなくそのようにおもしろいと思える思考をこれからも大切にしていきたいと思った。

3つ目は、日本についてもより深く理解することができたということだ。Academic Lecture では失われた30年やクジラを食べる習慣など、自分でもうまく説明できる自信のなかった議題について新しい視点から知ることができた。フィールドトリップやカルチャルエクスペリエンスでは知らなかった日本の自然や伝統に触れることができた。私は10年以上日本を出ていないので、ずっと海外に行ってみたいと思っていたが、日本で外国人と一緒に日本で様々な経験をすることで、日本の魅力を再発見できたと思う。

とても楽しかったと同時に、留学生の話をもっと理解したかったなど後悔する点もあった。これらの反省点を生かして、これからも英語やその他の言語の勉強に励み、国際的な物事に興味を持っていきたい。

サマープログラム最終レポート

農学部一回生

KSP 番号：222

名前：bouro

本文

私はこのプログラムを通して様々なことを学ぶことができた。まず、英語力が少し向上したと思う。私は主に ILAS コースで参加したので、プログラムのほぼすべての活動で英語を使用した。授業も英語、ディスカッションも英語、普段の参加者との会話も英語。また、活動が終わって家に帰った後も、あの時はうまく話せなかったけどこう言えば良かったなどと一人でその日の反省をしたり、とにかく常に英語のことを考えていた。この2週間は私の人生で最もたくさん英語に触れた2週間だった。その中で、わずかではあるが確実に参加前より英語力が高まった。

次に、海外の方とコミュニケーションが取れるような実用的な英語力を身に着けるために自分に足りない力は何なのかを知ることができた。私はこれまで受験のために英語をたくさん勉強してきたが、海外の方と英語で話した経験はなく、そのようなことを目的とした英語の勉強もしたことがなかった。なので、そのような実用的な英語力を身に着けるにはどうすればよいのか、そのヒントを得られればと思ってこのプログラムに参加した。そして、自分に最も不足しているのはリスニング力だと痛感した。大学受験の時、私は学校の教材の付属の CD などでリスニングの練習をしていた。おかげで受験のリスニングでは高得点をとれるようになった。しかし、海外の学生の方たちが話す英語は受験のリスニングテストとは別物だったので、なかなか聞き取ることができなかった。まず海外の学生の方たちは話すスピードがとても速かった。そして速いだけではなく、受験のリスニングと比べてリンキングが強かったように思う。これを聞き取れるようになるにはネイティブの英語にたくさん触れてスピードやリンキングに慣れる必要があるため、受験英語だけでは太刀打ちできそうにないと思った。

一方で、受験英語が役立つ点もあると思った。大学受験の時に覚えた英単語や文法をだんだんと忘れつつあるため、海外の学生と話すときに受験勉強で覚えたはずの単語や構文がスラスラ出てこず、何度ももどかしい思いをした。私は、実用的な英語力を身に着けるためには、特に日常会話だけではなくディスカッションもできるようなレベルを目指すならば、語彙や構文などの受験英語も必須だと感じた。

私はこのプログラムを通して、自分の英語力を向上させるとともに、さらなる英語力の向上に何が必要か知ることができた。これからは英語の習得に向けて一層努力し、将来は海外留学も視野に入れていきたい。

京都サマープログラムを終えて

京都大学法学部 1 年

KSP 番号：2 2 3

Paru

私がこのプログラムに参加した理由の一つに、英語を話す機会を作りたいという理由がありました。しかし実際にプログラムが始まると、日本語を上手に話せる留学生も多いし、KUASU の発表準備で使う言語はほぼ日本語でした。予想以上に日本語を使用する場面が多くて正直少し落胆しました。しかしそこで、KUASU で日本語ばかり使う道に進むのではなく、ILAS で英語を使って discussion をするコースに変更しました。Discussion では、自分とは異なる文化や価値観の中で育ってきた人たちの考えを聞き、自分の意見も真面目に聞いてくれるという貴重な体験をしました。留学生が話す英語を聞き取れないことも多かったですが、確認を取ったりしてできる限り理解に努めました。また、自分の意見を英語で表現することができずにしばらく考え込んでしまった時もありましたが、留学生たちが急かさずに待っていてくれたり手伝ってくれたりしてくれたおかげで、何とか英語で自分の考えを伝えることができました。さらに、授業外で日本語が話せる留学生と話す時も、日本語だけで話すのではなく、英語を話す練習がしたいと伝えて英語で会話しました。このように、今回のプログラムで私は、自ら英語を話す機会を増やすことができ、一つの目標を達成することができました。

もう一つのプログラム参加理由は、異文化に触れたいということでした。私は今回のプログラムでは、タイ、ベトナム、インドネシアからの留学生とたくさん話をしました。彼女たちと話す前に私が東南アジアに対して抱いていたイメージは、街があまりきれいではなく土っぽくて、行きたいとはあまり思っていないでした。しかしそれぞれの国での生活や食文化、家、学校などについて聞くと、魅力的なものばかりで、実際に行ってみたいと思いました。今までは英語圏への留学しか考えていなかったけれど、それ以外の様々な国にも旅行に行って自分の肌でその国を知りたいと思うようになりました。また、今まで意識していなかったことに気付くことも多くありました。留学生に、コンビニの商品に付いている値段の小数点以下は何かと聞かれた時や、オンラインショッピングをしたいが住所は旅館の部屋番号で良いのかと聞かれた時答えることができませんでした。外国では食べ物を友達とシェアすることが多いけど日本ではあまりしないことも、今まで考えたことがなかったので驚きました。また京都の寺社仏閣について留学生に教えるために調べ、京都の歴史の長さや素晴らしさを再認識できました。これからも様々な国や文化の人と触れ合い、普段意識していないことや日本についての発見をたくさんしていきたいです。

これからも、英語を話す機会を増やし、異文化に触れて自分の視野を広げる努力をし続けたいです。その第一歩として大学で長期留学をして有意義なものにできるように頑張ります。

私は、一度に多くの分野について幅広く学ぶことができるアカデミックレクチャーに興味を持って参加しました。試験日程のために受けることのできなかった授業もあり残念でしたが、できる限り多くの授業に出席し多くを学ぶことができました。特に、私は普段留学生と過ごすことが多く、「日本文化」を意識することが多いので、日本文化の特徴を学べるような授業は特に興味深かったです。しかし、留学生が言っていたのは、先生方の英語に日本語のアクセントがあると理解できないということでした。発音はネイティブでない以上、正しく発音することはほぼ不可能ではないかと思うので、ゆっくり話したり、パワポの情報量を多くした方が、留学生が理解しやすいのではないかと感じました。

日本語で話そうのクラスには一度参加しました。その時にドイツ人の友達ができ、もともと知り合いだったアメリカ人の友人と一緒に毎日出かけて、日本文化を紹介したり、政治や文化について話し合えたことが良かったです。ドイツ人の友人二人とは、プログラム後に広島、岡山に旅行に行けるほど仲良くなり、かけがえのない友情を築けたことが一番の収穫でした。一度だけでしたが日本語で話すクラスに参加してよかったと思います。

私は東南アジアの友人がいなかったのも、多くのタイ、ベトナムなどからの友人ができて、その国々に対して興味をもつきっかけになりました。

また、サークル研究室見学、清風荘見学など、普段見ない京大を見ることができたことは本当に興味深く、京大がより好きになりましたし、留学生も他大学を見ることができてよかったのではないかと思います。ドイツ人の友人二人は、日本に感動して、来年京大へ交換留学を絶対にしたいと言っていたので、とても意義のあるものではないかと思います。

ディスカッションやプレゼン発表も、小グループで話す機会が仲良くなれて良かったですし、とても興味深いトピックをかなり真面目に議論できて楽しかったです。私はアジアの友達と話してみたかったので KUASU メインでしたが、同じ時間でなければディスカッションにもう少し出たかったです。最初の時点で、KUASU と ILAS 両方に参加したい場合に、どのくらい KUASU を休んでも大丈夫なのかを知りたかったなとも思うので、今年の体験などを来年に引き継ぐことで解消できるのではないかと思います。（雰囲気分らずディスカッションには一度しかさんかしなかったが、実際はもっとディスカッションに参加できたと思う）ただ、クラスが多すぎて留学生が京都観光をする時間がほとんどないことは少し残念ではなかったかと思います。次回からは、終了時刻を早めるか、寺院などの閉館時間などを事前に強調しておくことで、プログラム後も京都に数日滞在して観光をするという選択肢を留学生も取りやすかったと思います。

今回の京都サマープログラムで学べたこと、将来への影響を順に述べていきたい。

①学習成果

自分が今回の KSP で学んだこと・気づかされたことは数多くある。

まず第一に、世界各地から来た留学生たちとのディスカッションや日本語で会話をする講座、食事の時の会話などで自らの視野を広げることができた。例えば難民と移民に関するディスカッションでは、ある留学生は難民と移民を区別し（それまで自分は難民と移民の区別をそれほど意識していなかった）、それぞれに対する政策を説得的に説明していた。ドイツや香港といった、日本よりも民族の多様性がある地域からきた留学生に特有の意見だったと思う。また香港出身の留学生たちと夕食を共にしたときには、彼らが香港政府による規制の強化とそれに対する市民の反発を力説し、香港の抱える民主主義の危機を目の当たりにした。また、「香港には日本の『和食』や『着物』というような文化的なアイデンティティがないんだ」と言っていたのも強く印象に残っている。

第二に、毎日長時間にわたり英語を使ってディスカッションや日常会話を行ったことで、英語によるコミュニケーション力が多少は向上したと実感している。プログラムの前半は会話の途中で言葉が出てこず会話が途切れてしまうことも多々あったが、最終日のパーティーや花火の時にはスムーズに発話できることも多くなった。

また、世界各地からきた留学生たちの英語力に直に触れることができ、とても刺激を受けた。英語を母国語としない中国、韓国、ベトナム、タイなどの学生も英語をネイティブのように使いこなしており、自らも海外留学のためにスピーキング力やリスニング力を自主的に向上させていきたいと思った。

②将来への影響

英語のスピーキング力が向上したと述べたが、ボキャブラリーや日常表現の圧倒的な不足により、ディスカッションや日常会話で「言いたいことが言えない」もどかしさは幾度となく感じた。また相手の英語を一回で聞き取ることができず、“Once more please”や“Pardon”を用いたのも1回や2回ではない。今後は表現の習熟やリスニングにより力を入れていきたいと思う。2回生または3回生から1年間の交換留学を考えている自分にとって、世界の大学生の英語力を実感することができたこの KSP はとても刺激的であり、モチベーションを高めてくれる絶好の機会だった。また留学する前に自らの視野を少しでも広げられたこともプラスに働くに違いない。今後もこのような機会があれば進んで参加し、京大に來ている留学生との交流も積極的に行き、英語を使う機会を増やしていきたい。

京都サマープログラムを終えて

京都大学文学部 1 回生

KSP 番号：226

名前：moai

1. 学習成果について

このプログラムの期間中、最も学習成果があったと思う講座は、ILAS のディスカッションです。元々英語を話すのはそれほど得意ではなかったのですが、海外の大学生の多様な考え方に触れる絶好の機会を逃したくないと思い、全 8 回のディスカッションにすべて参加しました。第一回の移民のディスカッションでは、予め自分の意見の方向性を準備して臨んだにも関わらず、グループ内で自ら進んで発言できませんでした。その理由は 2 つあり、①グループ内の議論について行けるだけのリスニング力がなかったこと、②日本の社会問題に意識を向けられていなかったことだと自己分析しています。また、非ネイティブの学生も英語を母国とする学生と対等に議論している光景に圧倒されました。こうして、一回目のディスカッションは、ほとんど意見を言えなかった悔しさを残して終わりました。

その後ディスカッションに何度も参加するなかで、上記の問題点に対して対策をとりました。①については、議論に追いつけないときはグループのメンバーにゆっくり話してもらいようお願いします。②については、ディスカッションの準備を毎回するとともに、議論内で日本の事例について知りたいことが出てきたら逐一調べて伝えことを心がけていました。

これらの成果があったのか、ディスカッションが進むにつれ、議論について行きやすくなっていきました。徐々に自分から意見を言えるようにもなりました。もちろん、グループの留学生がわかりやすく話してくれたことも大きいとは思いますが、英語を介した全般的なコミュニケーション力は確実に上昇しました。文法面のミスはあったし、全く流暢ではないけれど、グループのメンバーは必死に聞いてくれて、最後にはディスカッションをある程度楽しむことができました。

2. プログラムの感想

京都サマープログラムに参加して良かったと一番思えるポイントは、海外の大学生と様々な話ができて、最高の友達になれたことです。放課後や休日には一緒に出かけることも多く、2 週間だけでしたが濃密な時間を過ごせたと思います。プログラムの最中は海外の学生から逆に教えてもらうことも多かったです。プログラム開始前は日本（とりわけ京都）の文化について、ある程度は説明できると高をくくっていました。ですがその期待はすぐに裏切られました。例えば、「神社で手を洗うとき、左手から洗うのはなぜか」というような、普段日本に暮らしていて全く気にもとめないような素朴な質問をされたときには返答に困りました。このようにプログラム期間中は日本について考えさせられることが多く、改めて日本を俯瞰する機会になりました。そして「外」の文化との比較を通して、「内」の文化の魅力にも注目していきたいと思うようになりました。

Discussion in English で得られたもの

農学部 1 回生

KSP 番号：227

名前：NPC

本プログラムの Discussion in English が個人的に非常に楽しかった上に一番多くのものを得られたと思うのでそのことについて書いていく。

私は現在京都大学の一回生である。自分の人生を振り返ってみると小学校低学年時代にアメリカ合衆国に 2 年ほど住んでいたもののそれ以降は大して英語のスピーキングの実践を積んでこなかった。よって昔の経験が今でもどれくらい通用するのか、大学受験時代に学んだことはどれくらい実践のスピーキングの役に立つのかが気になっていた。そして実際に参加してみた感想だが自身の英語のスピーキングおよびリスニングのスキルは海外留学生相手に大きく遅れをとっていると感じた。話すスピードが大幅に遅い上にところどころで言葉が思いつかなくて詰まってしまう、相手の話すスピードについていけず内容理解ができない、といったことが多々あった。今後は京都大学内の留学生との交流を増やすなどしてもっと実践経験を積んでいきたい。

他には他国出身の留学生との意見交流によって他の国で起きていることや日本の現状との違いを知ることができたのも良かった。たとえば移民についてのディスカッションでは移民を多く受け入れているドイツで行われている政策を聴き日本にはまだ多くの移民を受け入れる準備はできていないのではないかと感じられた。ペットについてのディスカッションでは香港ではペットを奨励する地域がありそこではさまざまな政策がペットとその飼い主が住みやすいように行われていることを知った。日本ではそのようなことは行われていないし行おうとする試みさえ聞いたことないので世界のペットの立ち位置と日本のペットの立ち位置は大きく異なると知った。また経済格差についてのディスカッションでは日本では不登校から引きこもりにつながることも多くあると言ったら驚かれた。留学生の中には不登校という概念は自国にはないと言っている人がいてその人とのディスカッションを通じて日本で不登校が生まれる一因がわかった。またホームレスへの対処も日本とは大きく違った。このように日本と世界の違いを色々と気づくことができた。日本人との交流だけでは気付けないようなことも多くあった。日本には自分の持つ考えが唯一の正解だと信じて疑わない人間が多くいるように感じられるが、このようになってしまえば自分の考えに問題点があった時に気づくことができなくなってしまう。そうならないためには多様な視点から常に自分の考えを批判し続けることが大切だと思う。今回のディスカッションセミナーを通じて知らなかった知識・現実・発想を知ることができ、自分の中のものの見方が増えたと感じられる。

このように今回のプログラムの Discussion in English を通じていろいろなものが得られた。このような体験がまたあれば参加したいと思う。

サマープログラムの最終日、四条河原町から帰る際に、バス停で外国人観光客に声をかけられた。どうにもあるバス停に行きたいらしいが乗るべきバスがわからず、日本語が喋れなくて周りの案内人にも聞けず困っていたようだ。サマープログラムに参加したからといって英語のスピーキング能力は一朝一夕で伸びるものでもない。英語で必死に聞いてくる彼の力になりたいと思ったが英語で道案内しようと思ってもなかなか伝わらなかった。しかし、サマープログラムで得たものもある。それはたとえスムーズに伝わらなかったとしても臆せずコミュニケーションを図ろうとする積極性、違う文化や考え方を持つ相手のことをもっと知ろうとする態度である。サマープログラムには各国の災害対策や動物保護の法律、AIの今後についてなどを話し合う Discussion in English や、反対に留学生と日本語でお互いの国の話をしたりする日本語で話そうなどの機会があって、私は留学生の人と同レベルで英語を話すことは難しかったし、日本語があんまりわからなくて英語で聞き返してくる留学生もいたが、拙い英語ながらも自分の意見を伝えようと議論の間に視点や考えの核心だけでも示したり、例を出したり、また相手の伝えたいことを汲み取ろうと簡単な言葉に言い換えて聞き返したり、英語で近い言葉を探したりした。初めは怖かったが回数を重ねるごとにためらいは薄れていってこの前伝わらなかった経験を活かして改善し、自分から話しかけてみたりお互いの文化について雑談したりと積極的な姿勢を出すことができるようになった。相手のことを知ろうとする余力が出てくると会話は格段に楽しいものになり、留学生たちの国の美味しいもの、よく遊びに行く場所、さらに日本にはない風習や迷信、願掛けの類の話なんかも聞いて本やネットで知る情報より実感を持って文化や価値観の多様性を学ぶことができた。また、私は日本のサブカルチャーが好きだが、やはり留学生たちの中にもそういったものが好きな人が多くて、同じものが好きな同士でも目の付け所の違いを感じたりあるいは逆にやはり共通点もあってそういうことが知れたりしたのもいい経験だった。ただ、これらは全部自分だけじゃなくて、わざわざ母国語とは違う日本にやってきて積極的に日本について聞いてきたり一緒に遊びに行こうと誘ってきたりしてくれた留学生の人たちから大いに刺激を受けられた結果だと思う。

バス停で声をかけてきた彼には、目的地が近かったのでよければそこまで案内しましょうと提案した。道中、英語に詰まりながらも相手の出身地やこの後の京都滞在の予定、おすすめの観光スポットやバスの利用上の注意などについて話した。目的地まで着いて私に名前を尋ねてきた彼は「本当にありがとう、会えてよかった」と言って帰っていった。私が国際交流の活動に参加したかったのは日本に興味を持ってきてくれた人たちの力になりたい、その人たちと話して新しいことが知りたい視野を広げたいという思いが根底にあったように思う。このプログラムを終えてさらに自分が外に出て自分の目で留学生たちから学んだ様々なことを確認しに行きたいと思うようになった。具体的に自分の将来の道が定まっていて必要に迫られているわけではないのだが、ここまで人に向き合い違いに向き合った二週間はこれからも人と関わって生きていく人生に新たな視点を与えてくれたいい機会になった。

京都サマープログラムを終えて

農学部 1 回生

KSP 番号：229

名前：Mana

今回京都サマープログラムに参加させていただいて最も感じたことは、自分がまだまだ至らない、ということである。これは英語力についても、一般教養についても当てはまる。伸び代がある、と前向きに受けとり、これから自己研鑽に励みたいと強く感じた。

まずは講義について、各分野の名だたる先生方が大抵英語で講演を行ってくださったが、そこで感じたことのうちの 1 つは、自分が英語を聞き慣れていないということだ。どれだけ疲れていても無意識に内容は頭に入ってくる日本語の授業とは違って、英語は少しでも気を抜くと右から左にただ流れていくだけの音になってしまう。リスニングにはある程度自信があった為、この現状に悲しさを覚えた。これを受けて、今年の前期に医学概論という授業で聞いた話を思い出した。赤ちゃんは成長とともに親など周りの人が使っている言語を習得するが、たとえ生まれた時から犬がいる環境で育ったとしても犬の鳴き声は習得しない。このことから、赤ちゃんは無意識のうちに学ぶべき言語とそれ以外を区別し、学ぶべきと認識したものだけを身につけているかもしれないことがわかる、というものである。思い返してみると、中学・高校で受けてきた英語の授業はほとんどが文法事項の教授であり、生の英語を長時間浴びるという経験はしたことがなかった。そこで、まずは英語を自らが使用すべき言語の 1 つだと体に教え込むために、英語の音声にさらされ、それを理解しようとする経験を積むことが私には必要だと考えた。実際にこのプログラムの期間はその経験ができたが、それを一時期のものとして終わらせないために、TED を英語で視聴するなど、英語に触れることを日々の生活習慣にしなければならないと感じた。その他にもこれらの様々な分野の講義は、私が複数の言語間の比較や相互作用について考えることが好きだという発見に繋がったり、英語の講義を完全に理解した上で流暢に英語で質問をする同級生から刺激を受けたりと、色々な方面で成長への第一歩となった。

次に日本語教授のお手伝いについては、日本語を教えるという初めての体験ができて非常に面白かった。初日は資料全てに読み仮名がふられていることに感動したが、それだけでなく意識したことのない文法の項目に分けられて日本語が教えられているところが新鮮だった。確かに英語や第二外国語はこのように文法の項目ごとに整理して教わったが、やはり毎度どの項目に当てはまるかを考えなければならない点に難しさを感じた。これを受けて、言語学習はまずは深く考えないでその言語に触れ、さらに失敗を恐れずに声に出して自ら発してみるのが最も良い方法だと感じ、これからの自分の言語学習に活かそうと思った。またインドネシア大学に日本語学科が存在するなど、頑張って日本語を学ぼうとしてくれている人々の存在を知ることができて嬉しかった。

他にも大切な思い出として、留学生の友達と休日にお出かけをしたことが挙げられる。彼女たちとおしゃべりをする中で、日本人のファッションは系統が決まっておらず人それぞれなので面白い、外国人に人気という印象の寺社仏閣は宗教上の理由で興味がない人もたくさんいる、など新しい視点を知ることができた。加えて、ここでまた自分の至らなさを感じた。「すっぴんパウダー」という化粧品が欲しい、「ドンキ」に行きたいなど、想定以上に具体的な希望が多かった上、自分があまり経験したことのないものがほとんどだったのだ。日本人であるにも関わらず日

本の若者・大衆文化について詳しくないことを反省し、ルーティーンのような生活を送るのではなく色々な日本の面を知ることができるように普段から冒険することを心がけようと感じた。

まだまだたくさんの思い出があるが、まとめると、ここでしかできない多くの経験をさせてただいて、自分の語学、文化、精神面の成長の必要性を感じた。この経験を無駄しないよう、勉学に励み、たくさんの友達を作って、立派な国際人になるために日々努力する。

最後になりましたが、関係者の皆様、このような貴重な体験の場を設けてくださり、誠にありがとうございました。

多文化共学短期 [受入] 留学プログラム 2023 年度実施報告書

2024 年 6 月発行

編集・発行 京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)
京都大学国際高等教育院 (ILAS)
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話 (075) 753-9597

印刷・製本 株式会社 あおぞら印刷
電話 (075) 813-3350